秋田県文化財調査報告書第92集

秋田県立中央公園スポーツゾーン
地域内遺跡発掘調査報告書

滝ノ沢Ⅰ遺跡

滝ノ沢Ⅱ遺跡

駒坂袋Ⅰ遺跡

駒坂袋Ⅱ遺跡

1982・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

新秋田空港に隣接する、県立中央公園スポーツゾーンは、広く県民の運動広場として、また、昭和59年度全国高等学校総合体育大会の主会場として建設されるものであります。このため秋田県教育委員会では昭和55年秋に遺跡分布調査を行い、駒坂袋Ⅰ遺跡をはじめとする4ケ所の遺跡を確認し、本年4月に工事に先立ち記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

その結果、4ケ所の遺跡から旧石器、縄文時代前期～晩期、弥生時代の土器、石器と、縄文時代中期の竪穴住居跡、土壙等を発見しました。とくに、旧石器は数量的には少ないものの、発掘調査で発見されたものは県内でも数遺跡しかなく、貴重な資料と考えられます。

今後、本報告書が文化財の研究、保護の資料として広く活用いただければ幸いに存じます。最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行までいろいろと御協力いただきました雄和町教育委員会、土地所有者をはじめとする関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和57年3月

秋田県教育委員会
教育長　畠山芳郎

例　　言

1. 本報告書は、県立中央公園スポーツゾーン建設計画にともなう遺跡発掘調査報告書である。
2. 本報告書の作成にあたり、第１章第１節は富樫泰時、第１章第３節、第４章第１節、第３節の２は柴田陽一郎、その他は高橋忠彦が執筆した。
3. 遺構は10分の１、20分の１で実測し、報告書中の縮尺は任意である。挿図中ⓑは地山ブロック、▒は焼土を表わす。
4. 遺構の記号化は、住居跡にＳＩを、土壙にＳＫを付し、発見順に番号を付けた。
5. 遺跡、遺構の写真撮影は鈴木功が、遺物は高橋忠彦が行った。
6. 遺物の実測は、鈴木功、高橋修、高橋学、佐藤雅子が中心となって行った。
7. 遺物、遺構の実測図トレースは、松本淳子、石上尚子が行った。
8. 土色の記載は、小山正忠、竹原秀雄編集「新版土色帳」を使用した。

目　　次

序
例　　言
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
　第３節　立地と環境……4
　第４節　発掘調査の概要……4
　　1.　調査の方法……4
　　2.　調査の経過……5
第２章　滝ノ沢Ⅰ遺跡……11
　第１節　検出遺構……11
　第２節　遺構外出土遺物……11
　第３節　まとめ……12
第３章　滝ノ沢Ⅱ遺跡……17
　第１節　検出遺構……17
　第２節　遺構外出土遺物……17
　第３節　まとめ……17
第４章　駒坂袋Ⅰ遺跡……23
　第１節　検出遺構と遺物……23
　　1.　住居跡……23
　　2.　炉　跡……28
　　3.　土　壙……28
　　4.　配石遺構……32
　第２節　遺構外出土遺物……38
　第３節　まとめ……43
第５章　駒坂袋Ⅱ遺跡……54
　第１節　検出遺構……54
　　1.　住居跡……54
　　2.　土　壙……57
　第２節　遺構外出土遺物……60
　第３節　まとめ……62

挿図・図版目次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　滝ノ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡グリッド配置図……6
第３図　駒坂袋Ⅰ・Ⅱ遺跡グリッド配置図……7

＜滝ノ沢Ⅰ遺跡＞

第１図　出土遺物……13
図版１　上　遺跡全景　下　出土遺物

＜滝ノ沢Ⅱ遺跡＞

第１図　出土遺物……18
図版１　上　遺跡遠景　下　出土遺物

＜駒坂袋Ⅰ遺跡＞

第１図　駒坂袋Ⅰ遺跡遺構配置図……21・22
第２図　ＳＩ０１竪穴住居跡……23
第３図　ＳＩ０２竪穴住居跡炉……24
第４図　ＳＩ０２竪穴住居跡……25
第５図　１号炉……28
第６図　２号炉……28
第７図　ＳＫ０１土壙……29
第８図　ＳＫ０２土壙……29
第９図　ＳＫ０３土壙……31
第10図　ＳＫ０４・０５土壙……31
第11図　ＳＫ０６・０７土壙……32
第12図　ＳＫ０８土壙……32
第13図　ＳＫ０９土壙……32

第14図　配石遺構……33
第15図　住居跡内出土遺物……34
第16図　住居跡内出土遺物……35
第17図　遺構内出土遺物……36
第18図　遺構内出土石器・土製品……37
第19図　旧石器……39
第20図　遺構外出土遺物……40
第21図　遺構外出土遺物……45
第22図　遺構外出土遺物……46
第23図　遺構外出土遺物……47
第24図　遺構外出土遺物……48
第25図　遺構外出土遺物……49
第26図　遺構外出土遺物……50
図版１　上　遺跡遠景　下　調査区近景
図版２　上　発掘作業風景　下　同上
図版３　上　ＳＩ０１竪穴住居跡　下　ＳＩ０２竪穴住居跡
図版４　上　ＳＩ０２竪穴住居跡　下　配石遺構
図版５　上　１号炉　下　２号炉
図版６　上　ＳＫ０２　下　ＳＫ０３土壙
図版７　上　ＳＫ０４・０５　下　同上土壙
図版８　上　ＳＫ０４　中　ＳＫ・０６・０７　下　ＳＫ０８土壙
図版９　上　土器出土状況　下　石器出土状況
図版10　住居跡内出土遺物
図版11　遺構内出土遺物
図版12　遺構内出土遺物
図版13　旧石器
図版14　遺構外出土遺物
図版15　遺構外出土遺物
図版16　遺構外出土石器

＜駒坂袋Ⅱ遺跡＞

第１図　駒坂袋Ⅱ遺跡遺構配置図……53
第２図　ＳＩ０１竪穴住居跡……55
第３図　ＳＩ０２ａ・ｂ・ｃ竪穴住居跡……56
第４図　ＳＩ０２出土土器……57
第５図　ＳＫ０１土壙……57
第６図　ＳＫ０１出土土器……57
第７図　ＳＫ０２土壙……58
第８図　ＳＫ０３土壙……58
第９図　ＳＫ０３出土土器……59
第10図　ＳＫ０４土壙……59
第11図　ＳＫ０４出土土器……59
第12図　ＳＫ０５土壙……60
第13図　ＳＫ０５出土土器……61
第14図　遺構外出土土器……63
図版１　上　遺跡全景　下　発掘風景
図版２　上　ＳＩ０１竪穴住居跡　下　ＳＩ０２竪穴住居跡
図版３　上　ＳＫ０１土壙　下　同土層断面
図版４　上　ＳＫ０３土壙　下　同土器出土状況
図版５　上　ＳＫ０４　中　同土器出土状況　下　ＳＫ０５土器出土状況
図版６　出土遺物

第 1 章　はじめに

第 1 節　発掘調査に至るまで

新秋田空港は昭和56年６月24日開港した。この空港は周囲に県立中央公園として広大な緑地帯を設け、公害の少ない空港として全国的に注目されている。スポーツ・ゾーンは県立中央公園施設の一つとして空港の北側に建設しようとするものである。その広さは約20ヘクタール、主な施設として陸上競技場、サッカー、ラグビー場、テニスコート等。さらに将来は野球場、体育館等をも建設しようとするものである。この計画は昭和55年明らかにされた。そこで県教育委員会では昭和55年秋計画区域内に埋蔵文化財の有無を確認する遺跡分布調査を雄和町教育委員会の協力を得て実施したのである。

調査の結果、駒坂袋地区と滝ノ沢地区の二地区に四ケ所の遺跡が存在することがわかった。それぞれの遺跡を駒坂袋Ⅰ、同Ⅱ、滝ノ沢Ⅰ、同Ⅱ遺跡と呼ぶこととした。この四つの遺跡の規模、性格などから、記録保存という方法によって保護してさしつかえないものと判断されたのである。

このような経過を経て昭和56年４月文化庁長官へ文化財保護法第98条の２項により通知を提出し、発掘調査にとりかかったのである。

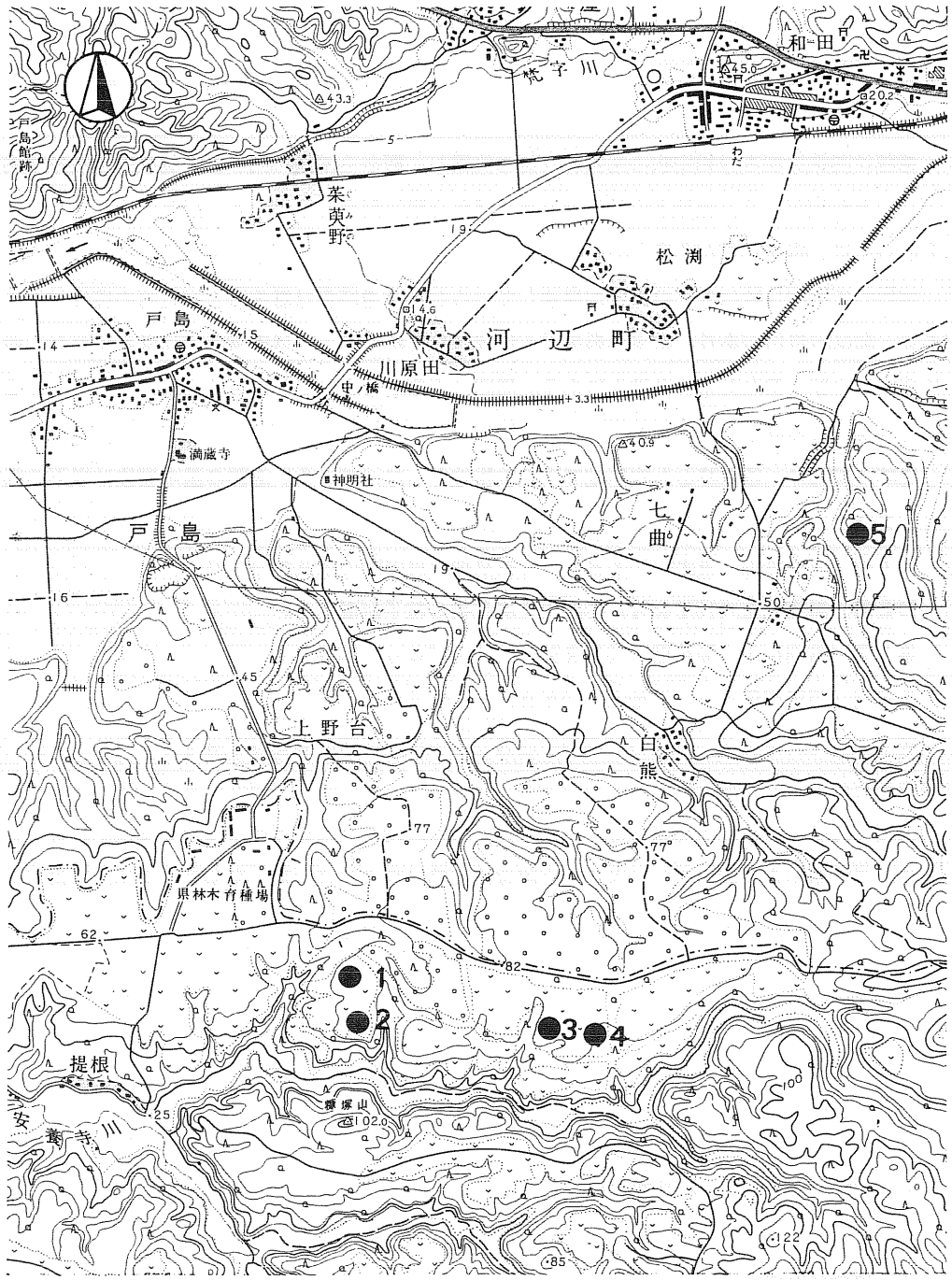
第 2 節　調査の組織と構成

遺跡名	滝ノ沢Ⅰ遺跡　同Ⅱ遺跡　駒坂袋Ⅰ遺跡　同Ⅱ遺跡
遺跡所在地	秋田県河辺郡雄和町椿川字滝ノ沢及び駒坂袋
調査期間	昭和56年４月６日～５月２日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	富樫泰時　柴田陽一郎　高橋忠彦　（秋田県教育庁文化課） 庄内昭男　（秋田県立博物館）
調査補佐員	鈴木功　高橋修　高橋学　三嶋隆儀　佐藤雅子
事務補助員	佐藤真智子
調査協力機関	雄和町教育委員会
発掘調査参加者	嘉藤貞勝　黒崎茂治　佐々木上男　佐藤一　高橋吉左エ門　長谷部源蔵 長谷部貞治　藤原貫一　藤原倉之助　星川八十郎　堀井勇

伊藤キヨ　伊藤テツヨ　伊藤トシ　伊藤ハナ　伊藤ヒデ　伊藤ミツ
伊藤ミナ　嘉藤ミエ　嘉藤ヤエ　鎌田タカ　京極エイ　京極カネヨ
京極スギ　黒崎ミネ　小助川慶子　佐々木キエ　佐々木遺美子
佐々木キミヨ　佐々木シヲ子　佐々木テイ　佐々木トミエ　佐々木ミツ子
佐々木盛　佐々木良子　佐藤ウメ　佐藤キヲ　佐藤ハナヨ　雫石テル子
杉山隆子　杉山チヨ　高橋友江　舟山桂子　堀井清子　堀井ヒサ子
山内トミ　渡辺裕子

遺物整理協力者　石上尚子　大沢晶子　木村ひさ子　佐藤真智子　杉原敬子　保坂千秋
松本淳子　松本千秋　三浦るり子

土地所有者　佐藤幸政　佐藤繁光　黒崎治助



1 滝ノ沢Ⅰ遺跡　3 駒坂袋Ⅰ遺跡　5 風無台遺跡
2 滝ノ沢Ⅱ遺跡　4 駒坂袋Ⅱ遺跡

0　1.0km

第1図　遺跡位置図

第３節　立地と環境

遺跡は国鉄奥羽本線和田駅の南側約３㎞に位置し、駅から南西に向い、戸嶋集落を抜けて南に行くと台地がある。台地上の林業センター前から東に向うとほどなく一段高い段丘がある。その右手に、本遺跡群がある。

地形的に出羽丘陵は多くの段丘が発達しているが、本遺跡群は雄和町と河辺町の境界付近にあり、北は岩見川があり、太平山系を近くに望むことができ、南は安養寺川にはさまれた、西に舌状にのびる標高80ｍの台地上にある。周囲は南側から小さな谷がいくつか入りこみ、ゆるやかな起伏を形成している。

遺跡の現況は、各遺跡とも牧草地で牛の放牧地ともなっている。遺跡の基本層位は以下の通りである。

第Ⅰ層　黒褐色土（表土－10ＹＲ$^{2}/_{3}$）で牧草地改良の際の撹乱がみられる。

第Ⅱ層　黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{3}$）で焼土と炭化物の粒子が混じる。

第Ⅱ′層　暗褐色土（漸移層－10ＹＲ$^{3}/_{3}$）で地山ブロックが混じる。

第Ⅲ層　明黄褐色ローム（地山－10ＹＲ$^{6}/_{8}$）である。

Ⅰ層から10～15㎝ほど下のⅡ層が遺物包含層であるが、遺構の確認は30㎝ほど下のローム面でなされた。

周辺には多くの遺跡が点在している。岩見川対岸の段丘上の北西側には縄文時代中期の下堤遺跡、同中期から晩期、そして古代の小阿地遺跡群や縄文時代中期の御所野Ｃ遺跡、同時代晩期の地方遺跡、縄文時代と弥生時代の複合遺跡の地蔵台Ｂ－５遺跡が存在し、北東側には縄文時代中期、後期の堂平遺跡、古代の野田遺跡がある。隣接した遺跡として、縄文時代中期、晩期の風無台遺跡、古代の長者森遺跡がある。

他には西側段丘端の雄物川両岸に、縄文時代や古代の遺跡が点在しており、当遺跡との関連性がうかがわれる。

第４節　発掘調査の概要

１　調査の方法

発掘調査は、各遺跡とも４ｍ×４ｍのグリッドを設定して実施した。遺跡のほぼ中央に任意の基準点を設け、そこから磁北によって東西南北の基線を求め杭打ちを実施した。

グリッドの呼称は、南北線には南から北へアルファベットを、東西線には西から東へ数字を

用い、その交点である東南隅の点をそれとした。（例　A－1、C－1）尚駒坂袋Ⅰ遺跡では、遺構の広がりから西に①・②・③の拡張グリッドを設けた。

2　調査経過

調査は、4月26日から5月2日まで行なわれたが調査に先立ち4月3日にグリッド設定作業と機材の搬入、プレハブの設置を行なった。

4月6日　調査員・補佐員・作業員を2班に分けて駒坂袋Ⅰ・Ⅱ遺跡同時に調査に入る。

4月8日　駒坂袋Ⅰ遺跡では、N－12、Ⅰ－10グリッドで黒褐色の落ち込みを確認し、それぞれＳＫ０１、ＳＫ０２とする。さらにＨ－７グリッドを中心に炭化物の広がりがみられ、遺構の存在が予想される。

4月10日　駒坂袋Ⅰ遺跡Ⅰ－７グリッドで住居跡（ＳＩ０１）Ｆ－10グリッドを中心に配石群が検出される。駒坂袋Ⅱ遺跡では、Ｇ－７、Ｆ－８グリッドで２つの土壙を確認しそれぞれＳＫ０１、０２とする。

4月13日　駒坂袋Ⅰ遺跡では、先に検出された配石群の精査と調査区中央の焼土遺構を中心に精査が進められる。駒坂袋Ⅱ遺跡では、Ｈ－７グリッドでピット郡が検出され、ＳＩ０１とし、さらにＳＫ０３、０４、０５の土壙を検出した。

4月15日　駒坂袋Ⅱ遺跡Ⅰ－６グリッドを中心にピット群が検出されＳＩ０２とし、先に検出の遺構とともに実側図の作成に取りかかる。

4月17日　駒坂袋Ⅰ遺跡ではＣ－０グリッドで複式炉、調査区西端でＳＩ０２を確認する。駒坂袋Ⅱ遺跡では２軒の住居跡と５基の土壙の実測を完了し、写真撮影して調査を終了する。

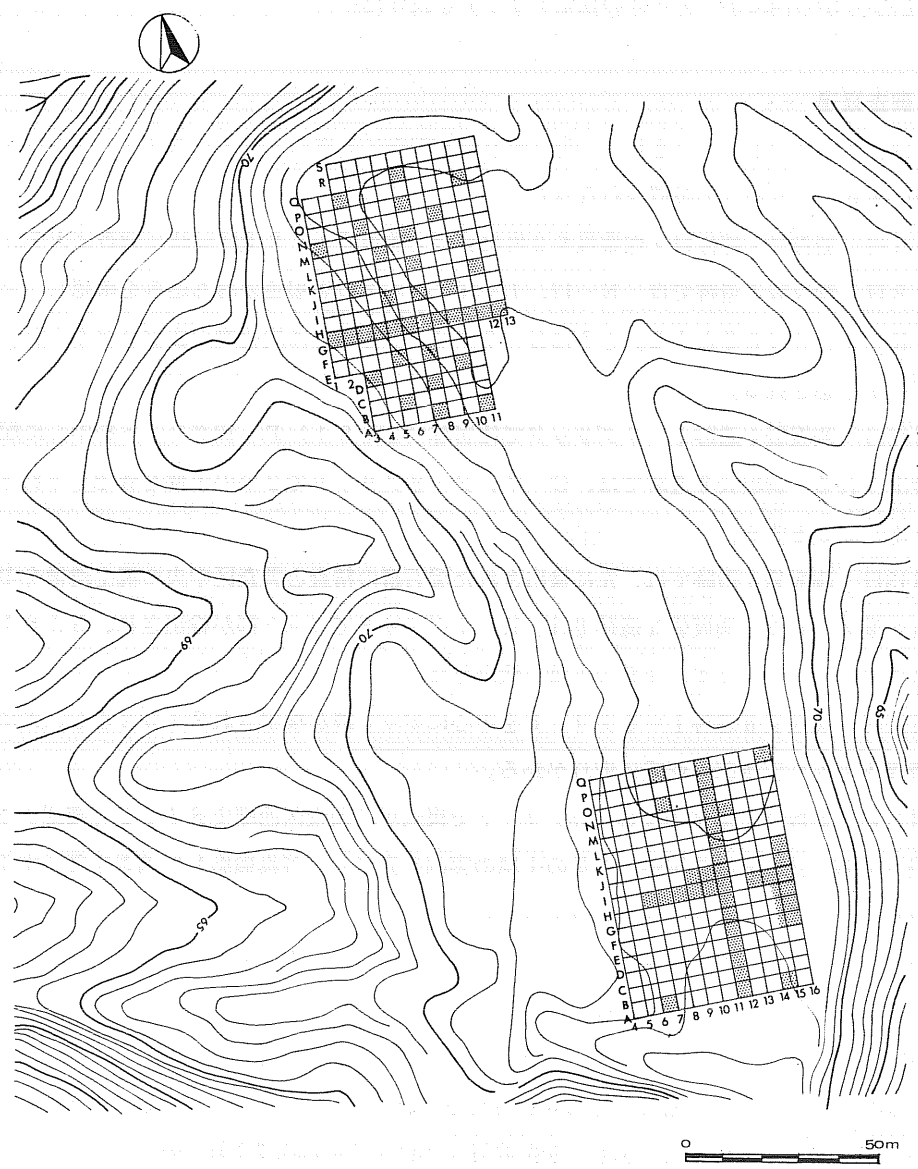
4月18日　滝ノ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査に入る。

4月20日　滝ノ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡からは、わずかに縄文土器片が出土したにすぎない。

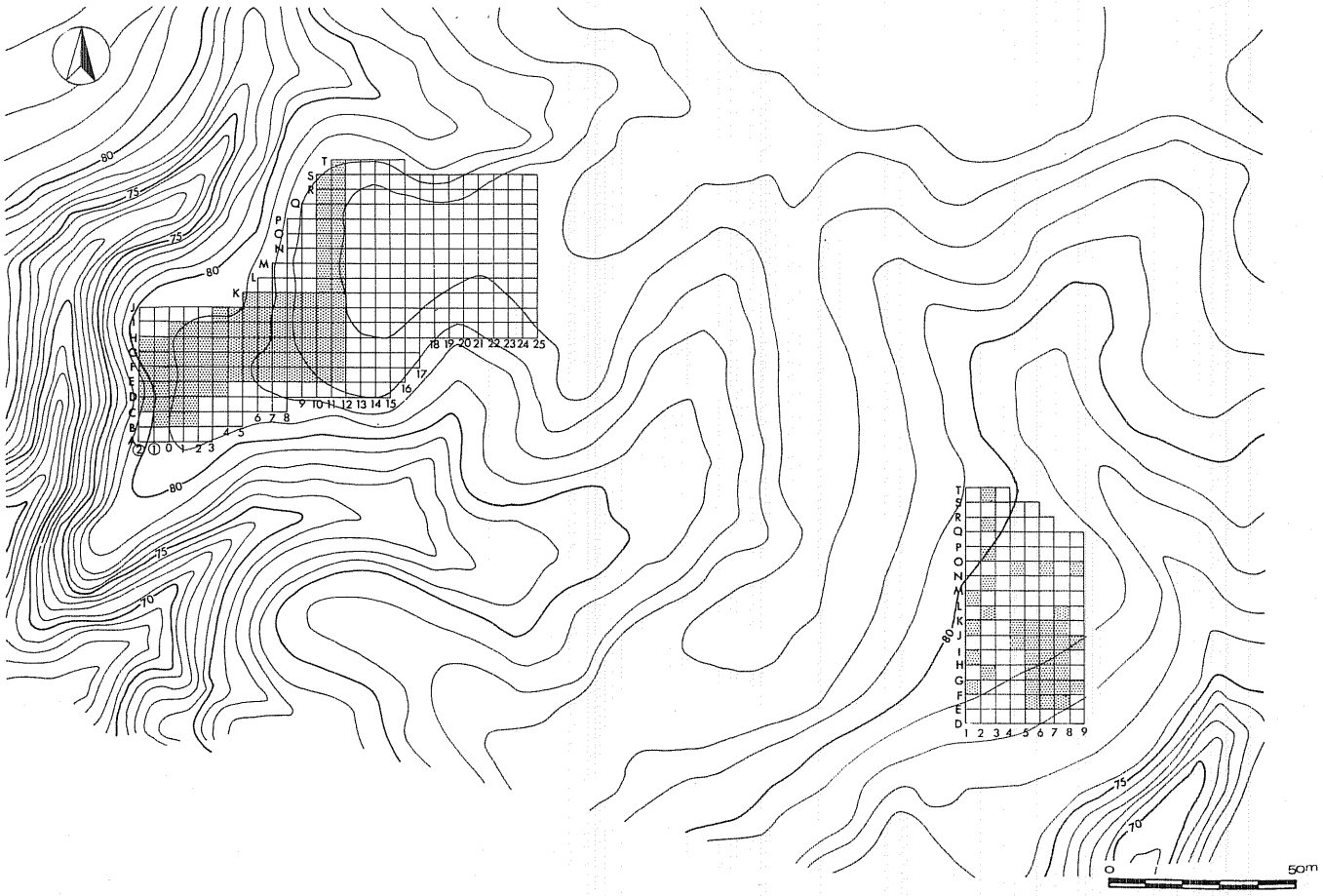
4月27日　滝ノ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡ともに遺構はなく遺物もわずかである。
駒坂袋Ⅰ遺跡では、ＳＩ０２の実測と写真撮影を行い、調査を終了した。

4月28日　滝ノ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡とも基本土層図を作成し、写真撮影を行い調査を終了した。

5月2日　遺構の一部を埋め戻し、発掘機材を徹収し、発掘調査を終了した。



第2図　滝ノ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡グリッド配置図



第３図　駒坂袋Ⅰ・Ⅱ遺跡グリッド配置図

滝　ノ　沢　Ⅰ　遺　跡

遺　跡　記　号　　ＵＳＺＡ

所　　在　　地　　秋田県河辺郡雄和町椿川字滝沢

調　査　面　積　　６０８㎡

第 2 章　滝ノ沢Ⅰ遺跡

＜現　況＞

標高74～80ｍの南北に馬の背状に伸びる丘陵の北端に位置しており、北西にゆるやかに傾斜する所である。現在は牧草地となっている。

第 1 節　検出遺構

遺構は確認されなかった。

第 2 節　出土遺物　（第１図　図版１）

調査で出土した遺物は、土器片20点、石器・フレイクが11点である。

1　土　器　（第１図１～９）

１は、外反する口縁部破片で、一段の隆帯を有する。胎土、焼成ともに良好である。２も外反する口縁部破片であろう。やはり一段の隆帯を有する。隆帯より上には、上部に半截竹管状工具による刺突文があり、その下に沈線による山形文がみられる。隆帯上にも刺突文が施されている。焼成は良好であるが、胎土には砂粒を含む。３は、太い沈線によって文様が作出されたものである。文様帯以下にはＬＲ縄文が付される。胎土、焼成とも良好な朱塗りの土器である。４～９は縄文のみの土器片である。

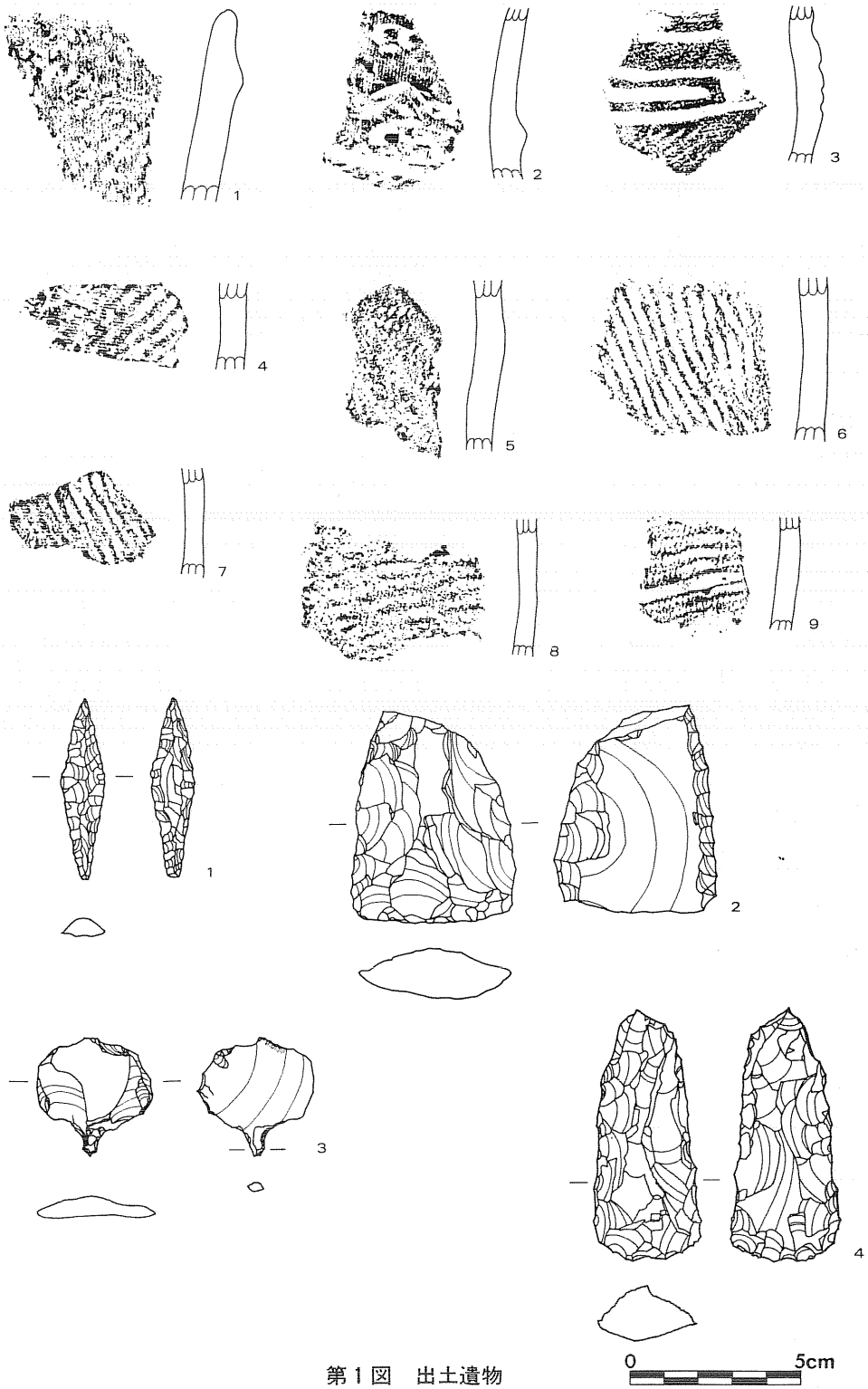
2　石　器　（第１図　１～４）

１は、石鏃である。両面から細かな剥離を加えているが、背面の中央部は粗く剥離されている。断面はカマボコ型を呈する。２は、石ベラ状の石器である。主要剥離面の側辺部には細かな剥離が施され、打瘤痕はけずられている。３は、石錐の未完成品であろう。４は石ベラである。断面はカマボコ型で、粗い剥離を操り返し、先端部にやや細かな剥離が操り返されるだけで、一部に自然面を残す。石質は全て頁岩である。

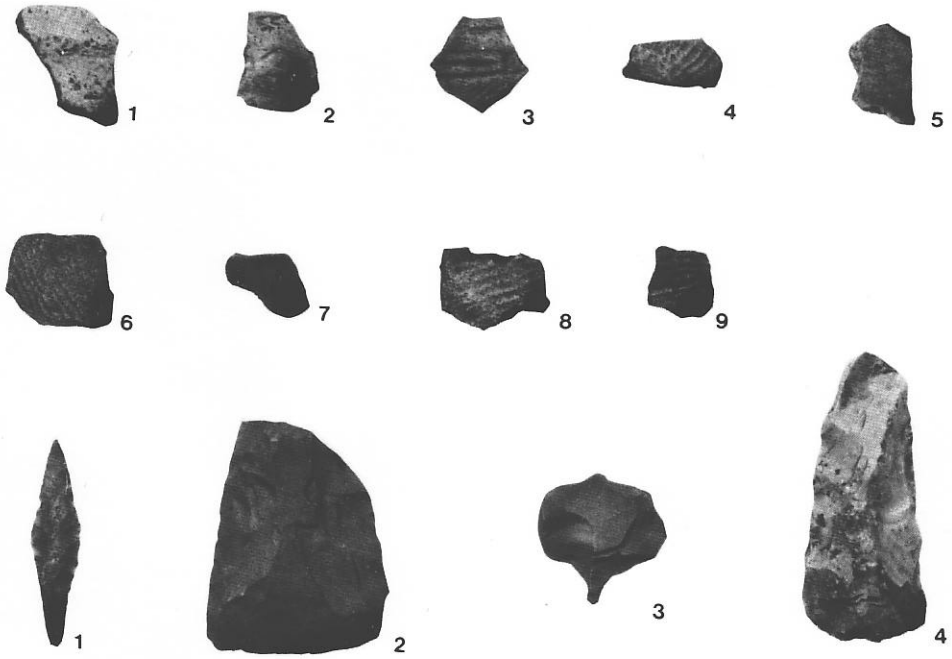
第3節　まとめ

調査では、遺構は検出されなかったが、これは昭和40年代の初めごろ、それまで雑木林であったところを地山面までけずって牧草地に転換したということであり、その時すでに包含層・遺構とも破壊されたものと考えられる。

出土遺物から、土器は円筒下層ｄ式（第１図１・２）あるいは大洞Ａ式（第１図３）などがみられる。



第１図　出土遺物



図版1　　上　遺跡全景　下　出土遺物

滝　ノ　沢　Ⅱ　遺　跡

遺　跡　記　号　　ＵＳＺＢ

所　　在　　地　　秋田県河辺郡雄和町椿川字滝ノ沢

調　査　面　積　　８８８㎡

第 3 章　滝 ノ 沢 Ⅱ 遺 跡

＜現　況＞

滝ノ沢Ⅰ遺跡と同一丘陵上の南端に位置し、標高76ｍ前後で三方が沢に囲まれた平坦な場所である。

第 1 節　検出土構

遺構は確認されなかった。

第 2 節　出土遺物　（第１図　図版１）

調査で出土した遺物は、土器片13点、石器・フレイクが６点である。

1　土　器　（第１図１～３）

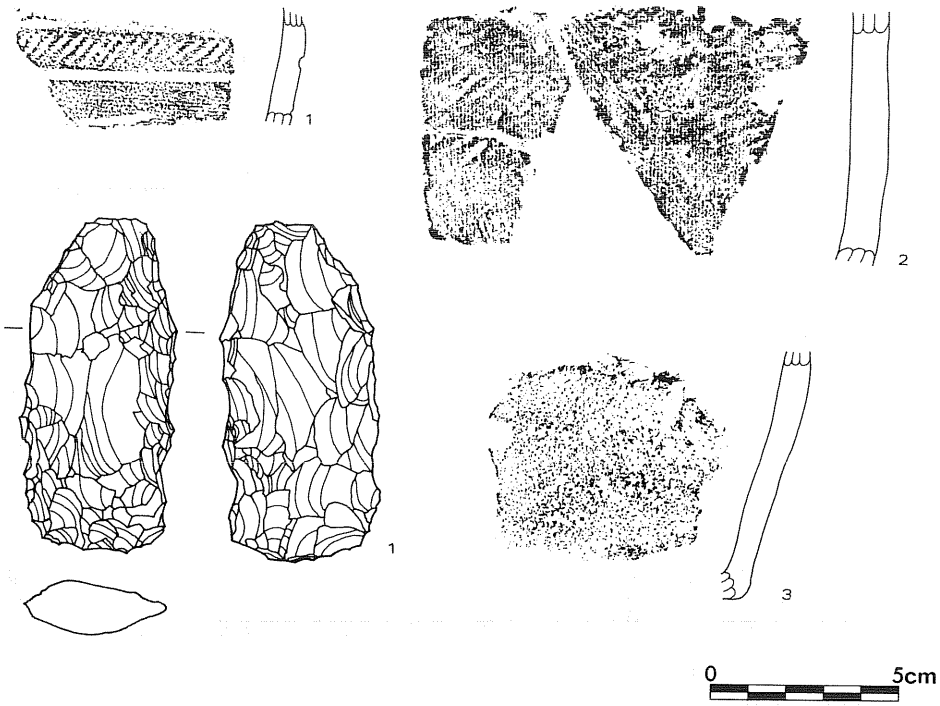
１は、摩消手法のみられる土器で胎土・焼成ともに良好である。胎土中にキラキラ光る雲母状の粒子が多い。２・３は縄文・無文の土器である。いずれも胴部下半の破片で、胎土・焼成とも良好である。

2　石　器　（第１図１）

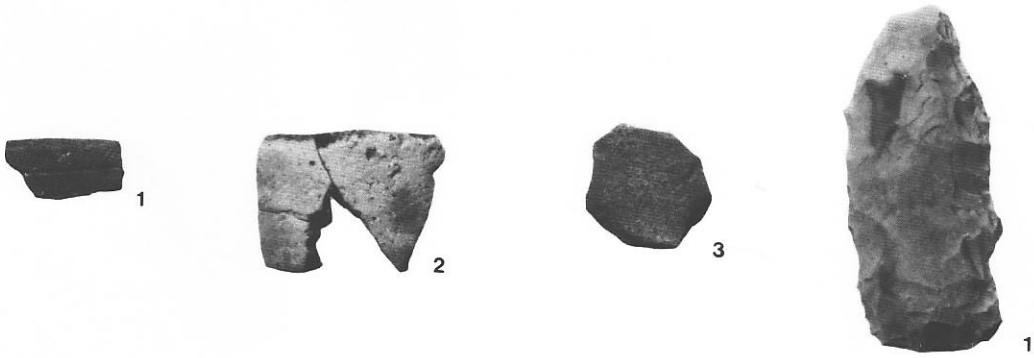
石ベラ状の石器である。両面を粗く剝離した後に先端部に丁寧な加工を施したもので、頁岩製である。

第 3 節　まとめ

当遺跡と滝ノ沢Ⅰ遺跡とは距離にして200ｍほどしか離れておらず、同一遺跡として扱うべきであろうが、範囲確認調査で個々の遺跡として取り扱っており、今回の調査・報告でもそれに従ったものである。当遺跡も牧草地への転換の際に破壊されたものであろうが、数少ない土器片の文様や胎土・焼成からみて、縄文時代後期の遺跡と考えられるが詳細は不明である。又調査では、0.8ｍ×1.6ｍほどの長楕円形の浅い掘り込みで底面が焼けて、埋土中に多量に炭化物を含んだものを６基確認している。これは戦中から戦後にかけて地元住民が使用した簡便な炭焼き用の施設であり、本報告には記載しなかった。



第１図　出土遺物



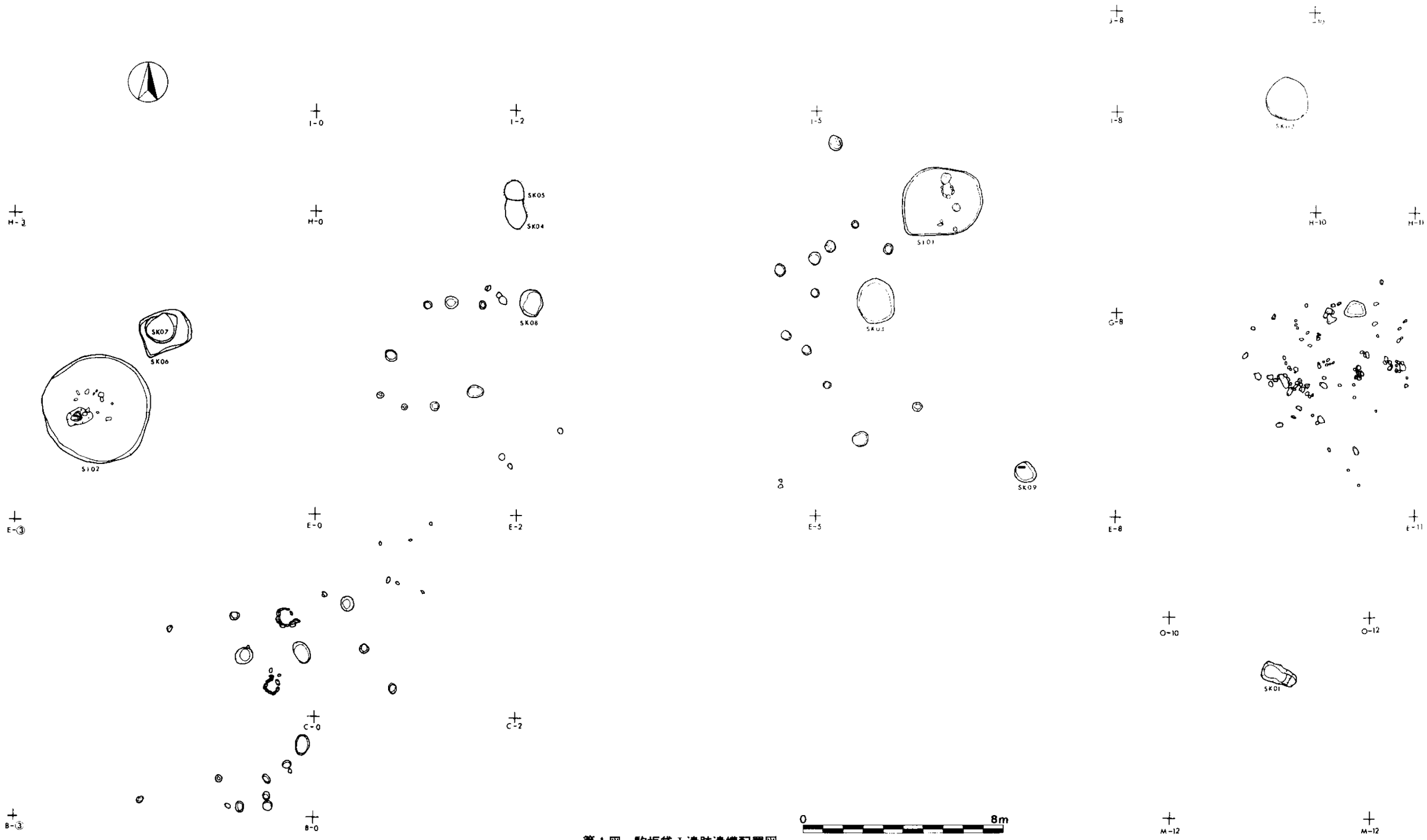
図版１　　上　遺跡遠景　下　出土遺物

駒　坂　袋　Ⅰ　遺　跡

遺　跡　記　号　　ＵＳＺＣ

所　　在　　地　　秋田県河辺郡雄和町椿川字駒坂袋

調　査　面　積　　1，６３２㎡



第１図　駒坂袋Ⅰ遺跡遺構配置図

第４章　駒坂袋Ⅰ遺跡

＜現　況＞

採草地及び放牧地として使用されていた。遺跡中央部は標高83ｍで、西と南に緩やかに傾斜して比高差10ｍの沢となる。西の沢には湧水地点がある。

第１節　検出遺構と遺物

検出された遺構は竪穴住居跡２軒、炉跡２基、土壙９基、配石遺構１基である。

１　住居跡

ＳＩ01　竪穴住居跡　（第２図、図版３）

〔位置〕　Ⅰ－７グリッドにありⅡ層上面で確認された。

〔平面形〕　不整楕円形で、長軸は3.25ｍ、短軸2.63ｍである。

〔壁・床面〕　壁は東側で19㎝、西側で７㎝を計り、垂直に立上る。床面はやや平坦で締りがある。

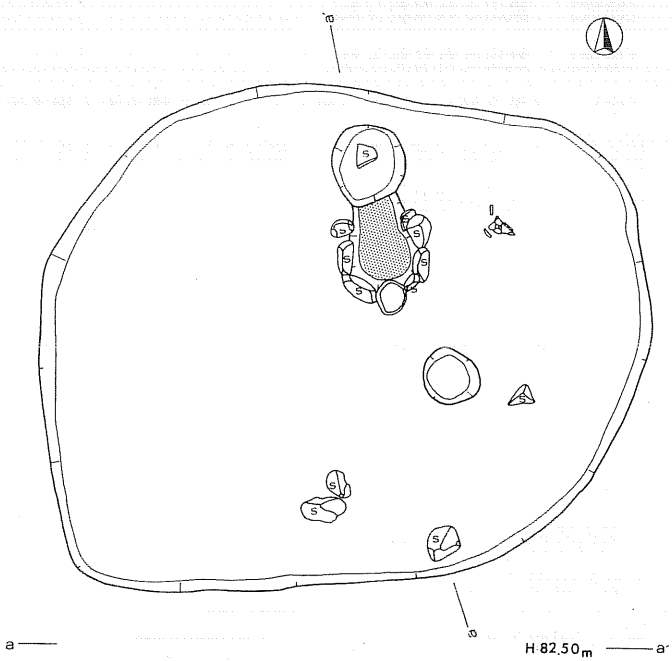
〔柱穴〕　炉の南側に径30㎝ほどのピットがあるだけで、住居跡内外に柱穴は認められない。

〔周溝〕　検出されなかった。

〔炉〕　石囲い部の外に埋設土器を伴うもので、複式炉である。石囲い部の中には厚さ10㎝の焼土がある。また石囲い部の北側に隣接して深さ40㎝のくぼみを設けている。石や埋設土器も加熱を受けて赤変している。長軸方向はN10°Wである。

〔炉埋設土器〕　（第15図２）

器形は内湾の胴部から、強く内湾する口縁部に至る小形の深鉢形土器である。器高15㎝を計る。



第２図　SI 01竪穴住居跡　0　1m

全体にＲＬ縄文を施すが、口縁部と胴部下端は無文である。底部は穿孔され、器面は加熱を受けて赤変している。

〔その他〕　Ⅱ層（黒褐色土）まで下げた段階で炭化物・焼土粒が多く散布し遺構の存在が予想されたが、その面では判然とせずⅡ′層（暗褐色土）まで下げた段階で検出された。

出土遺物　（第15図１、第16図１～９　図版７・９）

第15図１は、床面出土の小形の粗製鉢形土器で、器高は15cmである。全体はＬＲ縄文で口縁部と胴部下端は無文である。第16図１～３は、沈線で文様帯を区画するものである。１は口縁部を磨消して無文とし、その直下にＲＬ縄文を充填した楕円形文か「Ｕ」字状文を施すものと思われる。５、６は全体にＬＲ縄文を施すが口縁部は無文帯としている。時期は縄文時代中期末に比定される。

ＳＩ 02　竪穴住居跡　（第４図　図版３・４）

〔位置〕　西側の台地縁辺部で検出された。

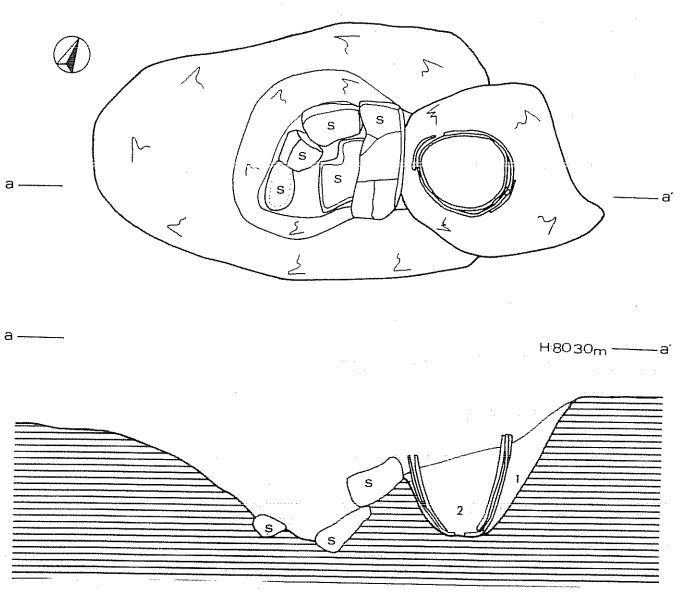
〔平面形〕　ほぼ円形で直径は東西4.45m南北4.30mである。

〔壁・床面〕　壁は東側で80cmと高くほぼ垂直である。西側は斜面ぎりぎりで、10cmである。床面は炉から東側が極めて硬く、炉周辺は比較的軟かい。

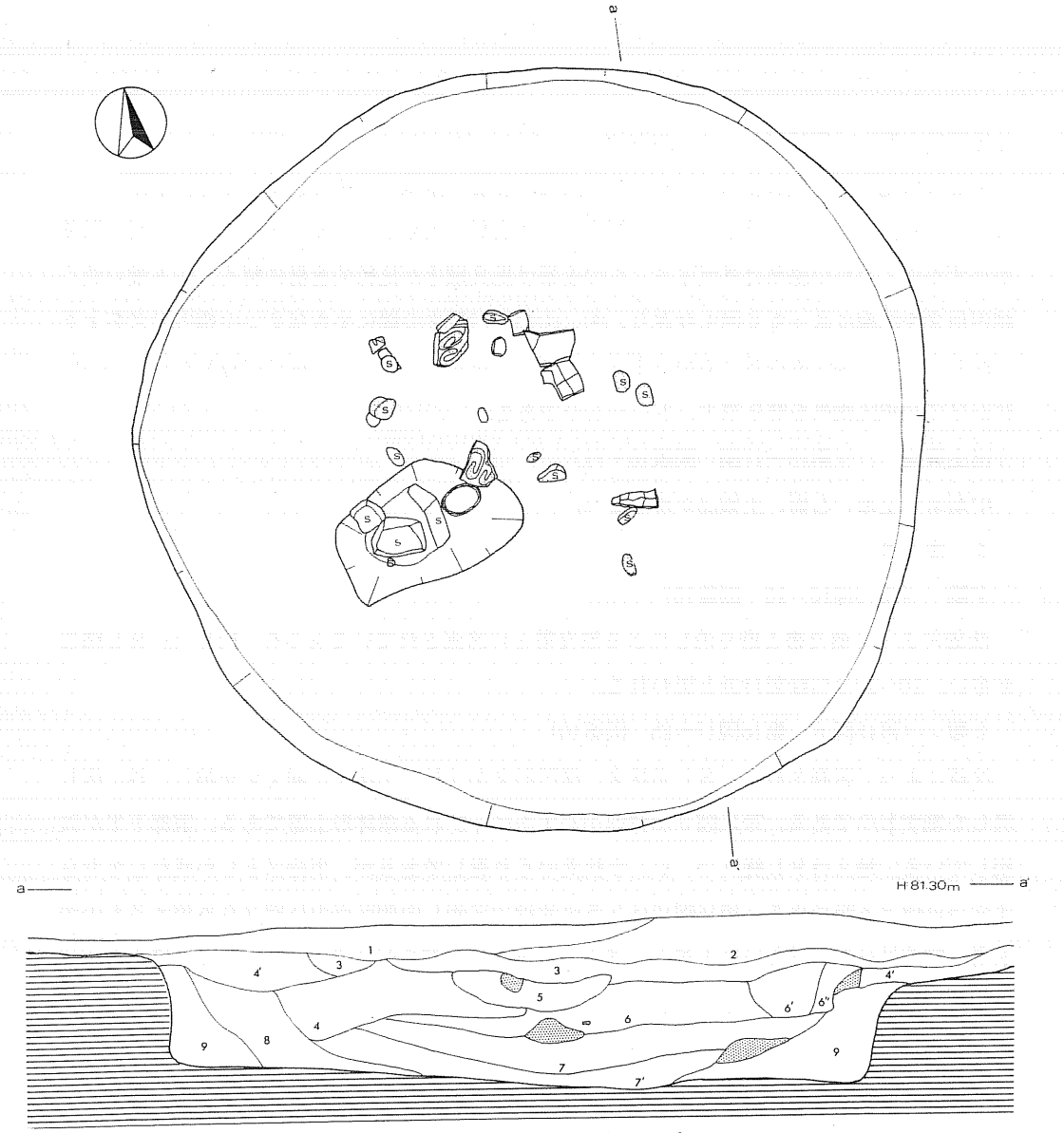
〔柱穴〕　検出されなかった。

〔周溝〕　検出されなかった。

〔炉〕　（第３図）　石囲い部の外に土器を埋設する複式炉である。石囲い部は埋設土器の西側を30cmほど掘り下げ、緩やかな傾斜をもつくぼみを作って、落ち際に長方形の凝灰岩を据え、その上に３個の河原石を配している。南側に河原石はないが抜き取られたものであろう。埋設土器周辺の地山は加熱を受け赤変して硬くなっていて、炉石の内側も焼けている。炉の長軸方向はN65°Ｅである。土器埋設部の土層断面は、第１層が暗褐色（５ＹＲ3/6）粘質土で加熱を受けボロボロしている。第２層が暗褐色土（10ＹＲ3/3）で炭化物と焼土粒子が混入し、軟かくボソボソし



第３図　SI 02竪穴住居跡炉　0　50cm



第４図　SI　02竪穴住居跡　0　2m

ている。

〔土層〕　断面の土層を観察するとレンズ状に堆積しており、床面から35～60cmのところで遺物が多く出土する。その傾向は東側に顕著である。

第１層　褐色土（表土―10ＹＲ4/4）で撹乱されている。第２層　黒褐色土（10ＹＲ2/3）で炭化物粒子を含む。第３層　褐色土（10ＹＲ4/6）。第４層　黒褐色土（10ＹＲ2/2）で炭化物粒子含む。第５層　黒褐色土（10ＹＲ2/3）で炭化物粒子が多い。第６層　黒褐色土（10ＹＲ3/2）で炭化物粒子、地山粒子が混入する。第７層　黒褐色土（10ＹＲ3/2）で焼土、炭化物、地山粒子が多く混じる。遺物を多く含む。第８層　褐色土（10ＹＲ4/4）で炭化物が多い。遺物を多く含む。第９層　褐色土（10ＹＲ4/4）で地山ブロックが混入している。

〔炉埋設土器〕（第15図３・４　図版12）

３と４は重なって埋設されていた。３は内側の土器で粗製の深鉢形土器である。全体にＲＬ縄文を施し口縁部を磨り消している。器高27㎝で底部は欠損している。４は外側の土器で頸部がわずかにくびれ口縁部は外反する。この土器は施文順序が比較的容易に判る。①下端の開く楕円形文を沈線によって６回くり返し、②、①の楕円形文の間に小さな２つの楕円形文を上下に配し、③、沈線区画内及び胴部下半にＬＲ縄文を縦に施文、④、最後に口縁部から胴部中位にかけて沈線区画外を磨り消す、というものである。

出土遺物　（第15～17図　図版10・11）

中期末の土器、石器、土製品が出土した。

１　土　器

１類　（第16図10～16　図版10）

沈線によって縄文帯と磨り消しによる無文帯とに区画されているものを一括した。ＲＬ縄文が多い。10～13は口縁部付近と思われる。

２類　（第15図５　第16図17～28　図版10）

沈線によって区画された「Ｓ」字状文、楕円形文か「Ｕ」字状文に縄文を充填し、外に磨り消しを施すものである。第15図５は頸部がわずかにくびれる深鉢形土器である。胴部下半が欠損している。地文はＲＬ縄文で「Ｃ」字状文のくり返しであるが、半分ほどしか残存しておらず文様単位は不明である。第16図17は２条の沈線で区画し内側区画内に縄文を充填するものである。20～23は幅のせまい無文部と、縄文の充填された部分が二重になって渦文を描くものであろう。24～27は「Ｕ」字状文と思われる。

３類　（第16、17図29～34　図版11）

口縁部に無文帯があり、頸部から胴部にかけて縄文を沈線で区画するものである。口縁は平縁が多いが、31のように波状をなすものもある。

４類　（第17図35～42　図版８）

施文を粘土紐貼付による隆帯と調整のための沈線で行なうものである。隆帯が広いものとせまいものがある。35～37はＬＲ縄文で褐色を呈すもので同一個体である。

５類　（第17図43　図版11）

口縁部に粘土紐を貼付して口縁部に沿う隆帯と渦巻状の文様で、縄文帯を区画するものであろう。

６類　（第15図６　第17図44　図版11）

６はキャリパー形の浅鉢で頸部に粘土紐を貼付し、段を有する無文帯の平縁の口縁部を作り出している。胴部上半は隆帯による無文帯に区画された「Ｕ」字状文が12回くり返されるもの

と思われるが下半が欠損しているため全体の文様は不明である。44は口縁部に丹念なミガキが施される。

7類　（第17図45、46）

45、46は同一個体。大きく外反する口縁部からゆるやかにくびれる頸部に至り、胴部中位から下半にかけてやや膨らみ底部ですぼむ深鉢形土器である。口縁は平縁で磨り消し縄文である。「U」字状文で囲まれた中には下方からの刺突が施されている。器外面には煤状炭化物の付着が見られ、焼成は普通である。

8類　（第15図7　第17図47～52）

縄文だけのものと口頸部を無文帯としているものである。7は深鉢の粗製土器で胴部上半でややくびれる。平縁口縁であるが部分的に小さく山形状を呈する。全体に撚糸文が施され、口縁部は無文である。47は胴部上半から口縁部にかけて緩やかな曲線を描いて内向ぎみに立上る。48は波状口縁で胴部上半は緩やかな曲線で口縁部は外反している。49～51は口縁部が無文で平縁である。

2　石　器　（第18図1～5　図版12）

本住居跡からは計13点の石器が出土した。そのうち小さい剥片を除く6点を取り扱った。石質はいずれも頁岩である。

石匙　（1、5）

1は横形で背面に細かい剥離を行ない、主要剥離面はつまみ部周辺にのみ剥離を施すものである。5は背面の全周縁を剥離して、つまみ部の周辺には主要剥離面にも剥離を施すものである。

ヘラ状石器　（2、3）

いずれも背面に細かな剥離を施し、主要剥離面は両側縁にのみ刃部を作り出すもので、1次剥離面を残している。3は⅓が欠損している。

4は縦長の剥片で断面は三角形を呈し、両面にあらい剥離を施している片側の刃部にアスファルトが付着している。

3　土　製　品　（第18図7～9　図版12）

ミニチュア土器　（7、8）

7は上部が欠損している。内外とも横位にミガキが施されているが、器面はデコボコしている。内部には部分的に指痕が残る。8は器高4㎝のコップ形を呈すもので、胴部の周囲に粘土紐を貼付して把手を作り出して穴をあけている。把手は2ケ所で1対になるものだが1ケ所は欠損している。器内外面に朱が付着している。

円盤状土製品　（9）

1点のみで、土器片を円形に加工して再利用したものである。

2　炉跡

1号炉　（第5図　図版5）

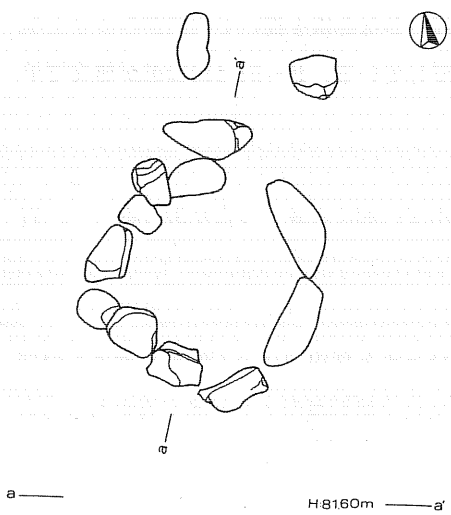
〔位置〕　D－0グリッドで検出された。

〔形態・規模〕　石囲炉である。10～27cmの河原石を用いてほぼ円形に配している。径は50cmで中は加熱を受け赤変している。焼土の厚さは10cmである。

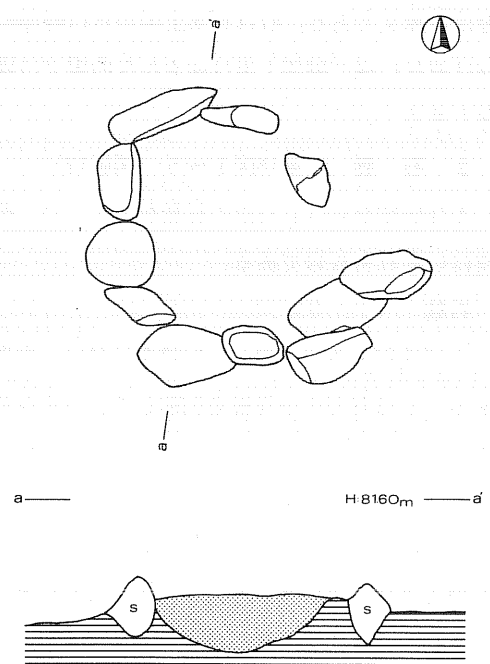
2号炉　（第6図　図版5）

〔位置〕　D－0グリッド検出された。

〔形態・規模〕　石囲炉である。プランは楕円形で長軸の径は46cmである。17～30cmの円形及び長方形の河原石を配している。炉内に焼土があり、その厚さは8～15cmである。



第5図　1号炉　0　50cm



第6図　2号炉　0　1m

3　土壙

SK 01　土壙　（第7図）

〔位置〕　遺跡の北東端　O－12グリッド検出された。

〔形態・規模〕　不整楕円形で、長径1.45m、短径0.75mである。西側は深さ0.55mで壁はほぼ垂直で、東側は緩やかに立上る。

〔出土遺物〕　出土しなかった。

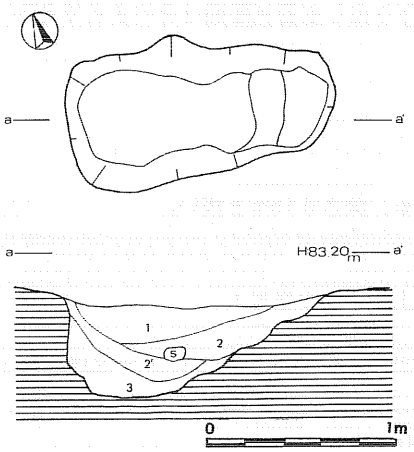
〔土層〕

第１層　黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{3}$）炭化物粒子、地山粒子混入。

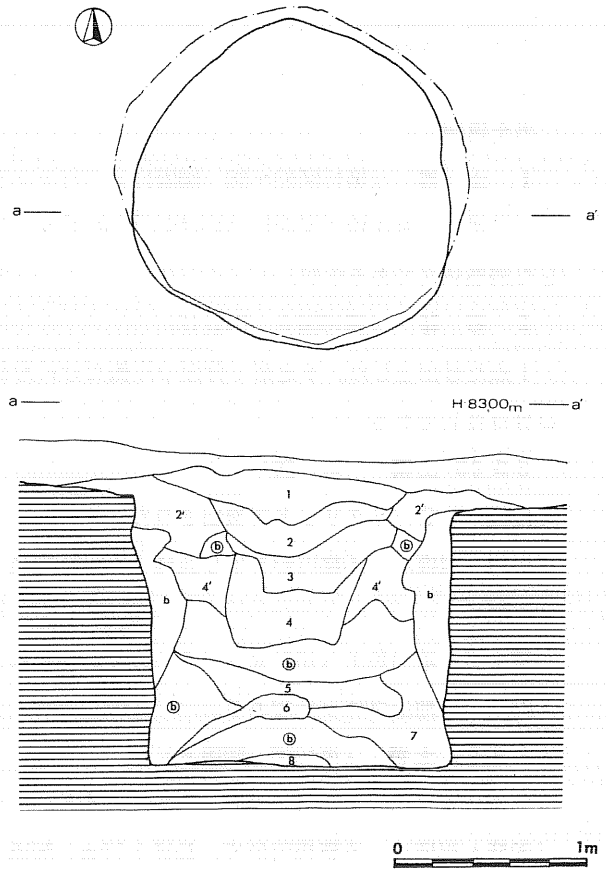
第２層　黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{2}$）軟かく地山粒子の混入が多い。

第2′層　２とほぼ同じだが、２より地山粒子の混入が多い。

第３層　黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{1}$）水気を多く含み軟かい。



第７図　ＳＫ01土壙



第８図　ＳＫ02土壙

ＳＫ02　土壙　（第８図）

〔位置〕　Ｉ―10グリッドで検出された。

〔形態・規模〕　不整円形で径が1.70ｍ、深さ1.45ｍで底面の径は1.80ｍとやや広がりフラスコ状を呈す。土層断面で２度の地山の崩壊が観察され、本来は上部の壁がもっと張り出していたと思われる。

〔土層〕

第１層　黒色土（10ＹＲ$^{2}/_{1}$）軟かい。

第２層　黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{3}$）硬くしまり、炭化物粒子が小量混入。

第2′層　２とほぼ同じだが地山粒子が密に混入。

第３層　暗褐色土（10ＹＲ$^{3}/_{4}$）炭化物粒子と焼土ブロック混入。

第４層　暗褐色土（10ＹＲ$^{3}/_{3}$）軟かく炭化物、焼土粒子まばらに混入。

第4′層　４とほぼ同じだが、地山粒子とブロックがしま状に混入。

第５層　黒褐色土（10ＹＲ$^{3}/_{2}$）軟かく炭化物少量で地山ブロック多い。

第６層　黒褐色土（10ＹＲ$^{3}/_{2}$）やや硬く、炭化物がブロック状に混入。

第７層　黒褐色土（10ＹＲ3/2）きわめて軟かく、地山粒子の混入少ない。

第８層　黒褐色土（10ＹＲ3/2）軟かく、炭化物、地山の粒子の混入少ない。

ⓑ　　地山ブロックである。

出土遺物

１　土　器　（第17図53～56　図版11）

53は撚糸文を沈線で区画し、無文部に縦位の「Ｓ」字状の沈線を施す。55は撚糸文を沈線で区画した渦巻状文であろうか。

２　石　器　（第18図６　図版12）

１点だけ出土した。不定形で背面の片側だけに刃部を作り出し主要剥離面はそのままである。石質は頁岩である。

ＳＫ03　土壙　（第９図）

〔位置〕　Ｇ－６グリッドで検出された。

〔形態・規模〕　不整円形を呈し長径1.80ｍ、短径1.40ｍ、深さ0.15ｍと浅い。

〔土層〕

第１層　暗褐色土（10ＹＲ3/3）やや硬く、炭化物や地山粒子が少量混入。

ⓑ　　地山ブロックである。

ＳＫ04　土壙　（第10図　図版８）

〔位置〕　Ｈ－２グリッドの周辺にあり、ＳＫ05により切られている。

〔形態・規模〕　不整楕円形で、長径1.15ｍ、短径0.80ｍで底部がやや広くなり、フラスコ状を呈するものである。

〔土層〕

第１層　暗褐色土（10ＹＲ3/4）軟かく、地山、焼土粒子混入。

第２層　にぶい褐色土（10ＹＲ5/4）土質は第１層と同じである。

第３層　褐色土（10ＹＲ4/4）やや硬く、地山粒子の混入が多い。

第４層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）軟かく、地山粒子の混入が多い。

第４層　褐色土（10ＹＲ4/4）軟かく、壁が崩落したものである。

ⓑ　　地山ブロックである。

ＳＫ05　土壙　（第10図）

〔位置〕　Ｈ－２グリッド周辺にあり、ＳＫ04を切っている。

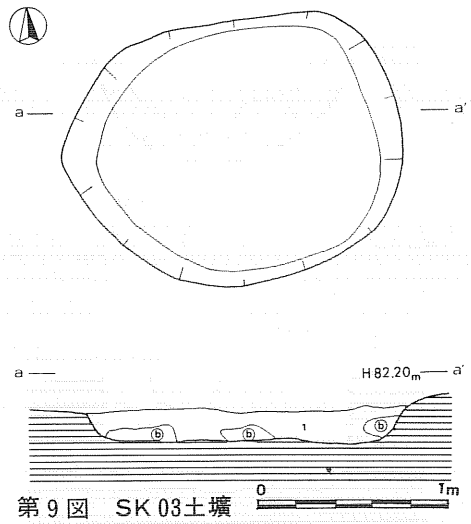
〔形態・規模〕　不整楕円形で長径0.77ｍ、短径0.70ｍで、深さ0.30ｍと浅い。

〔土層〕

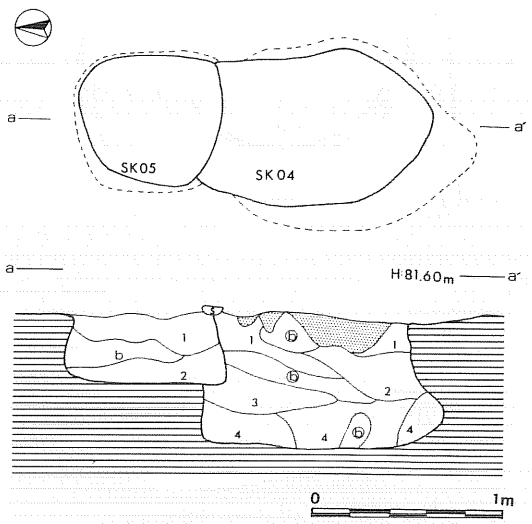
第１層　褐色土（10ＹＲ3/2）炭化物・地山粒子混入。

第２層　褐色土（10ＹＲ3/2）炭化物粒子・地山ブロック混入

ⓑ　　地山ブロックである。



第９図　ＳＫ03土壙



第10図　ＳＫ04・05土壙

ＳＫ06　土壙　（第11図　図版８）

〔位置〕　Ｆ―①にあり、ＳＫ07を掘り下げてから確認されたものでＳＫ07より古い。

〔形態・規模〕　不整円形を呈し、壙口部が1.10ｍで中位でふくらみ底面で1.40ｍを計る。フラスコ状の土壙である。

ＳＫ07　土壙　（第11図　図版８）

〔位置〕　Ｆ―①グリッドにあり、ＳＫ06の上面で確認された。

〔形態・規模〕　隅丸長方形で、短径1.50ｍ、長径2.00ｍ、深さ0.15ｍと非常に浅い。

〔土層〕

第１層　暗褐色土（10ＹＲ3/4）やや硬く、炭化物粒子、地山粒子多く混入。

第２層　暗褐色土（10ＹＲ3/3）第１層に比べ炭化物粒子、地山粒子の混入の度合いが少ない。

第３層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）軟かく地山粒子がブロック状に混入。

第４層　褐色土（10ＹＲ4/4）炭化物粒子、地山粒子が少量ながら混入。

ＳＫ08　土壙　（第12図　図版８）

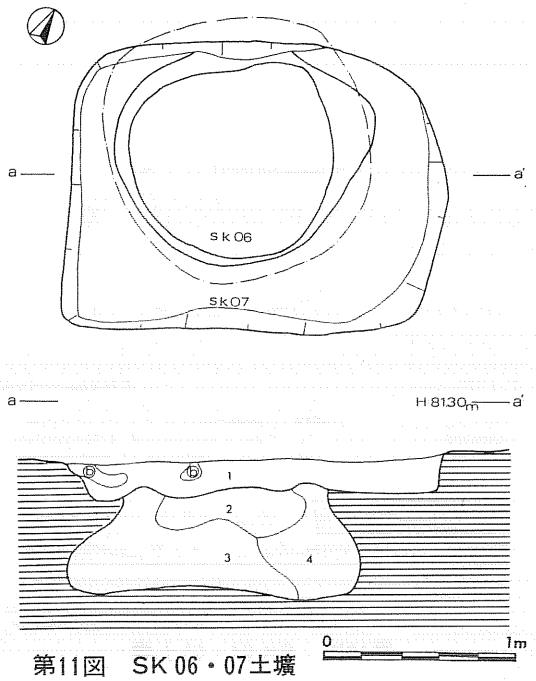
〔位置〕　Ｈ―３グリッドにあり、ＳＫ04、05の南側にある。

〔形態・規模〕　不整楕円形で、長径1.05ｍ、短径0.85ｍ、深さ0.50ｍの円筒形を呈す。底面はほぼ平らである。

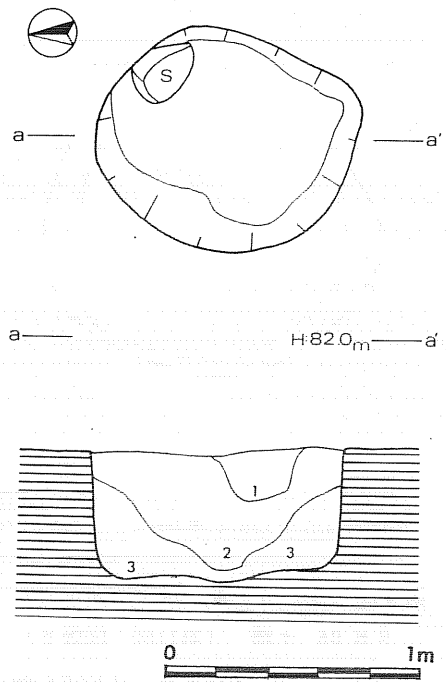
〔土層〕

第１層　暗褐色土（10ＹＲ3/4）軟かく、地山粒子、炭化物粒子微量に混入。

第２層　褐色（10ＹＲ4/4）粘質土。良く締まり地山と暗褐色土が混じりあっている。



第11図　SK 06・07土壙



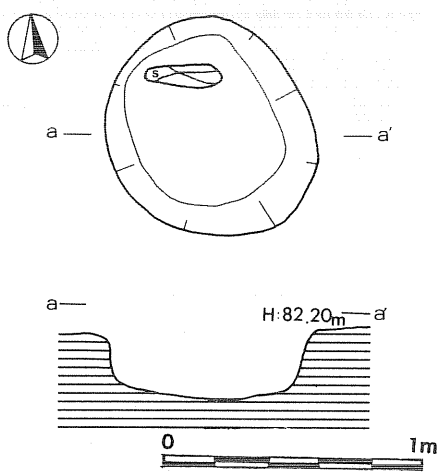
第12図　SK 08土壙

第３層　褐色（10ＹＲ⅚）粘質土。大変硬く締まり地山に暗褐色土が混じる。

ＳＫ 09 土壙　（第13図）

〔位置〕　Ｅ－８グリッドにある。

〔形態・規模〕　楕円形で長径 0.90m、短径 0.78mで深さ 0.28mと浅い。床面は平らである。



第13図　SK 09土壙

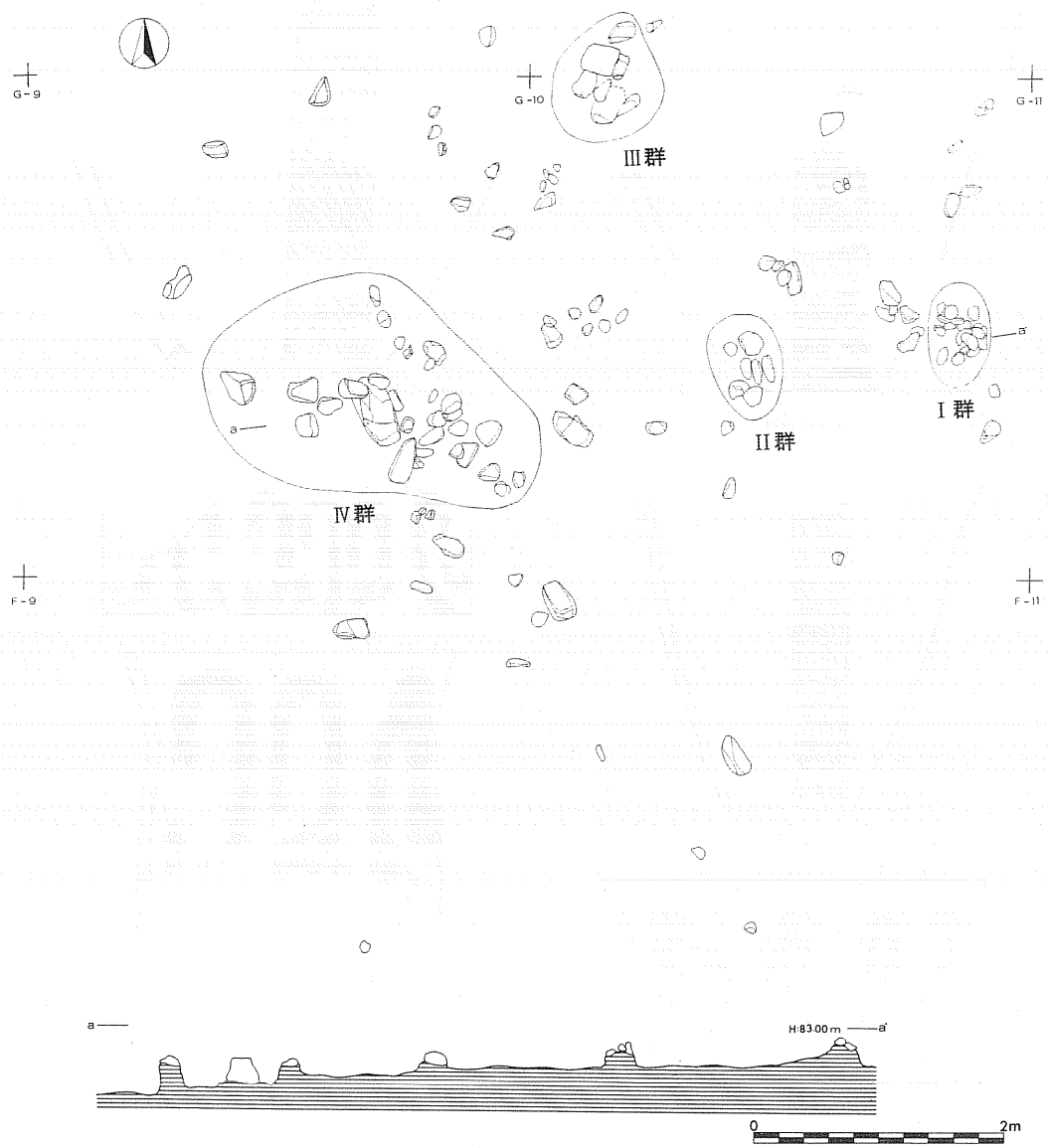
4　配石遺構　（第14図　図版４）

〔位置〕　東側のＧ－10、Ｇ－11グリッドを中心にしてまとまりを持ち、Ｆ－10、Ｇ－11グリッドにも散在する。

〔検出状況〕　Ｉ層の表土を剥いだ段階で検出された。一部、地山に埋っているものもあるが、ほとんどは地山面より上にある。

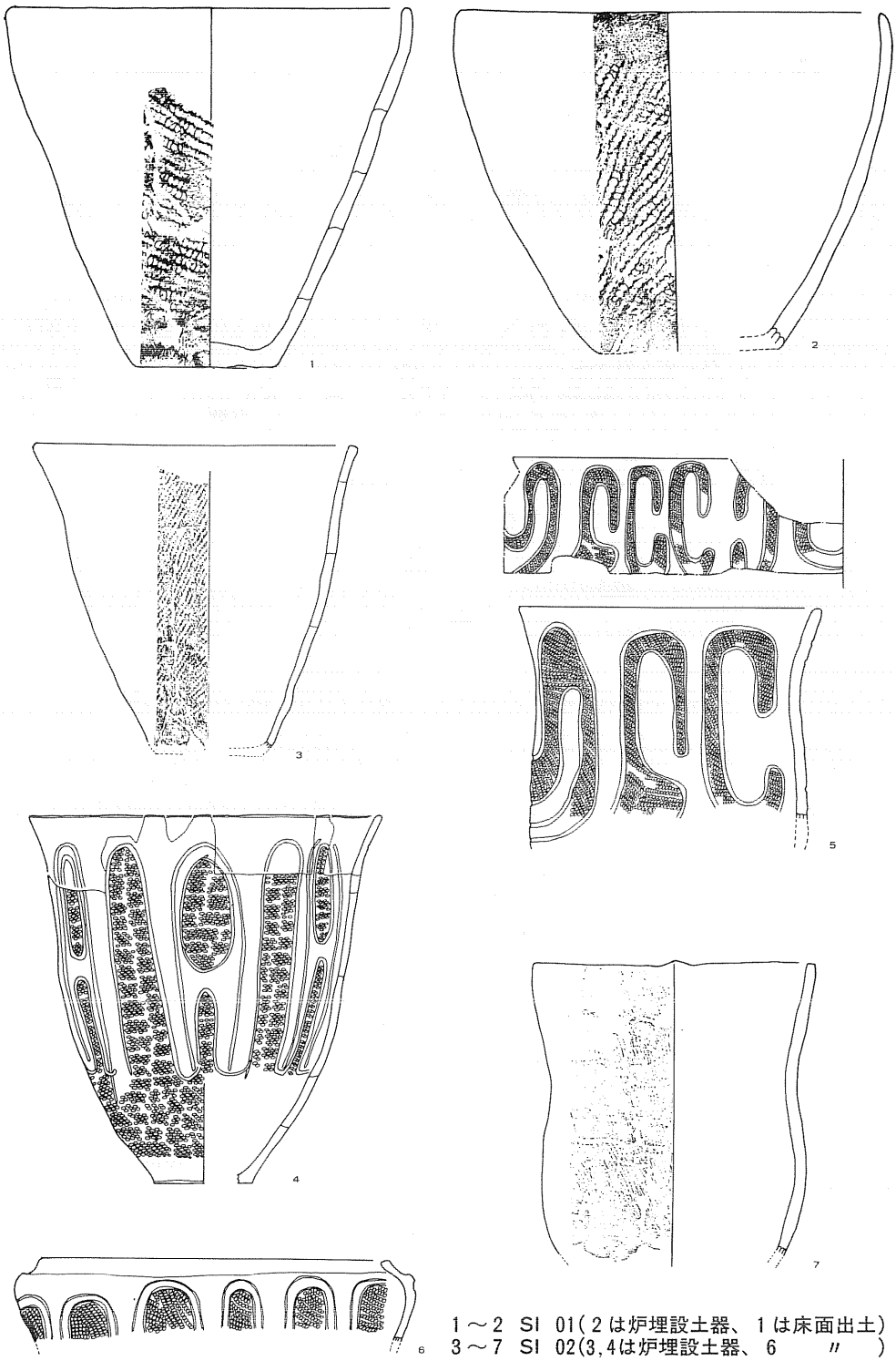
配石群は４グリッドにまたがって分布しているが、特にＧ－10とＧ－11グリッドを中心に４つのまとまりが見られる。便宜上Ｉ～Ⅳ群に分けた。

〔形態・規模〕　礫の大きさは14～30cmの楕円形か長方形のものが多い。部分的に石が重ねられている所もある。Ⅰ群、Ⅱ群は比較的小さい礫で構築されそのまとまりの範囲は狭い。Ⅲ、Ⅳ群の礫はやや大きいものが多く、Ⅳ群はまとまりの範囲が 2.50mと広い。Ⅰ～Ⅳ群とも礫の



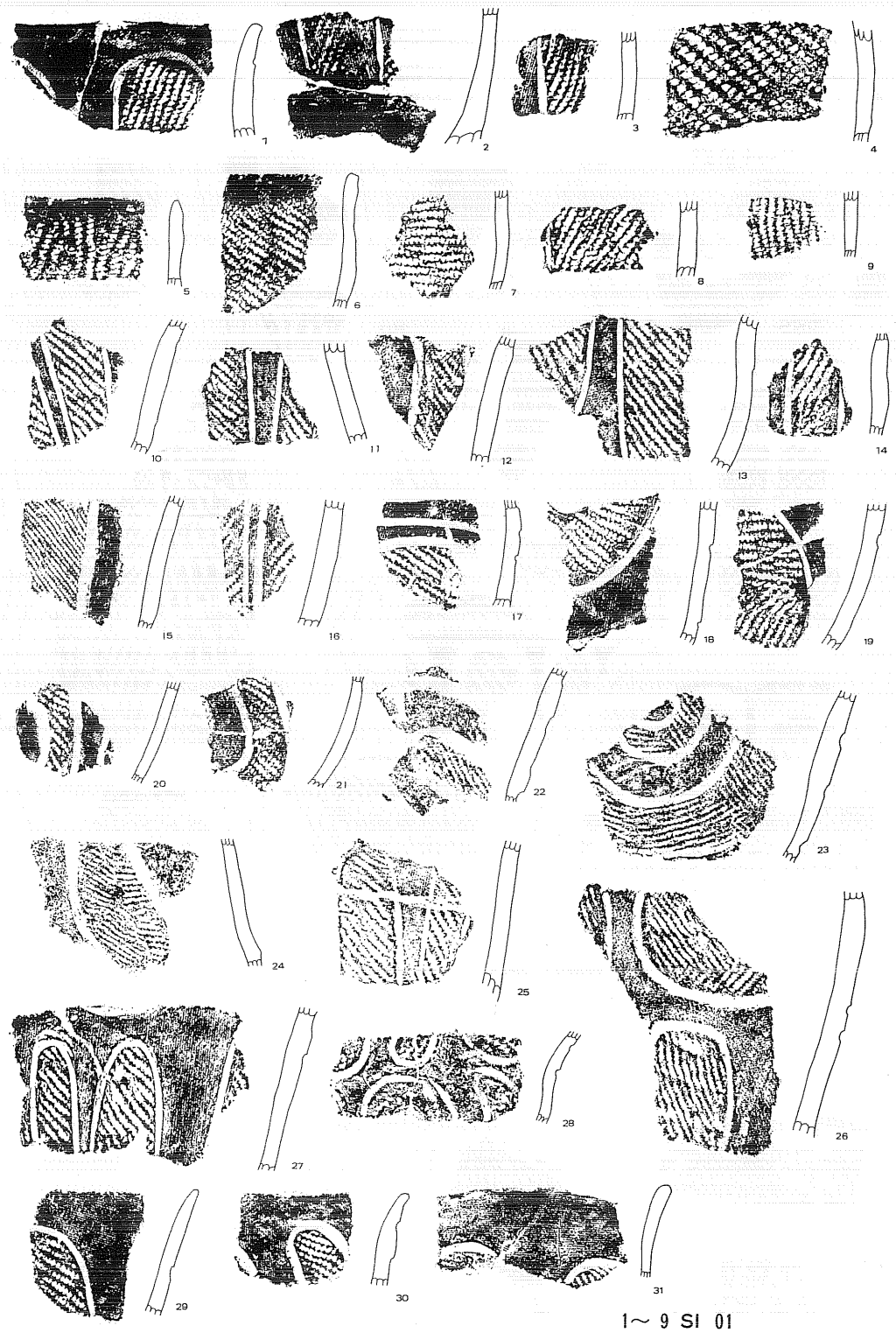
第14図　配石遺構

形、大きさは一定しておらず配置の方向も規格性がない。礫を除去して下を精査したが遺構は検出されなかった。



1～2　SI　01(2は炉埋設土器、1は床面出土)
3～7　SI　02(3,4は炉埋設土器、6　〃　)

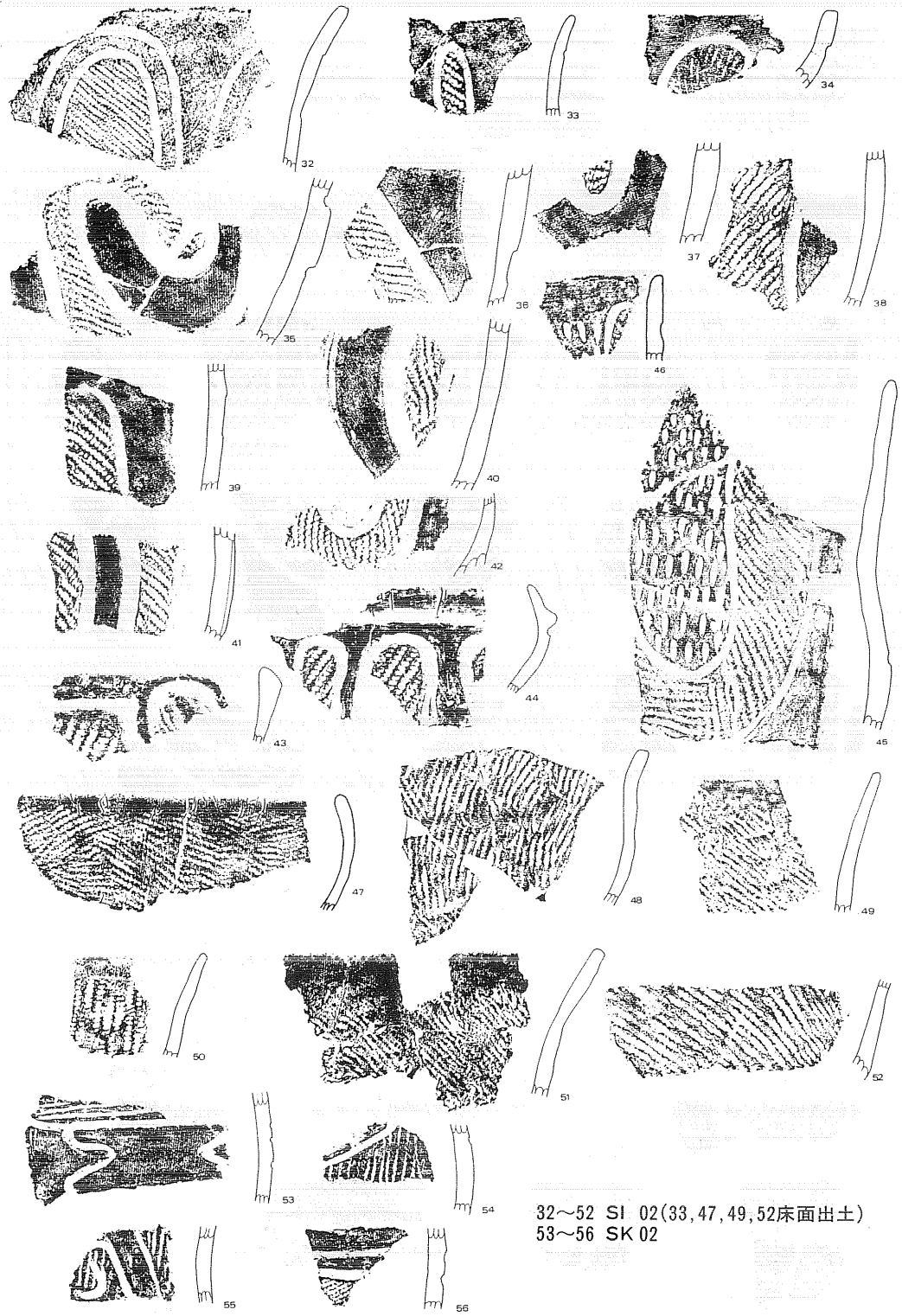
第15図　住居跡内出土遺物（1.2は1/3）　0　20cm



1～ 9 SI 01
10～31 SI 02(26,27床面出土)

0 10cm

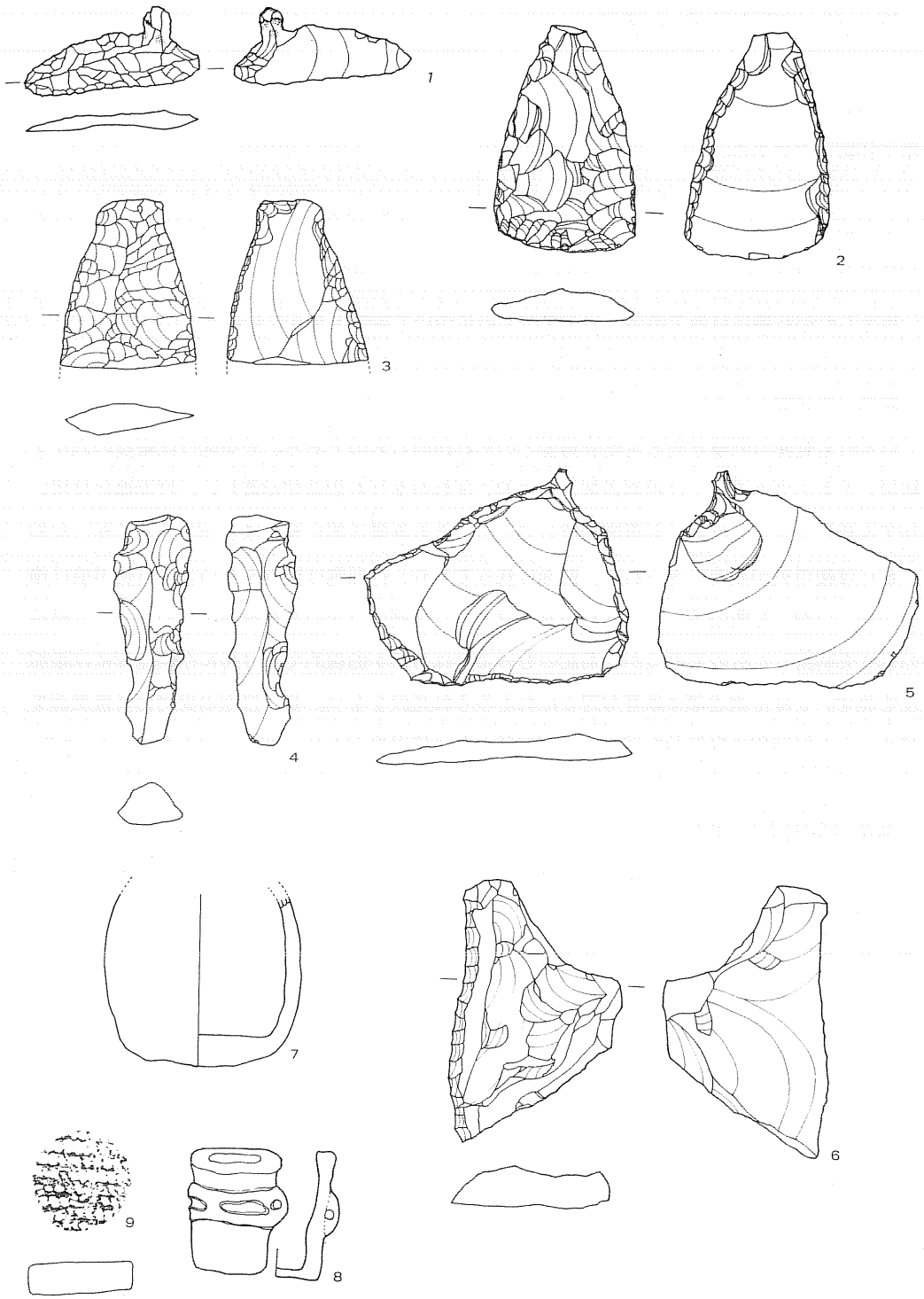
第16図　住居跡内出土遺物



32～52 SI 02(33,47,49,52床面出土)
53～56 SK 02

第17図　遺構内出土遺物

0　10cm



第18図　遺構内出土石器・土製品　0　5cm

第２節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、旧石器と縄文中期後半の土器が中心である。その数量は、整理箱で10箱ほどである。

１　旧石器（第19図　図版13）

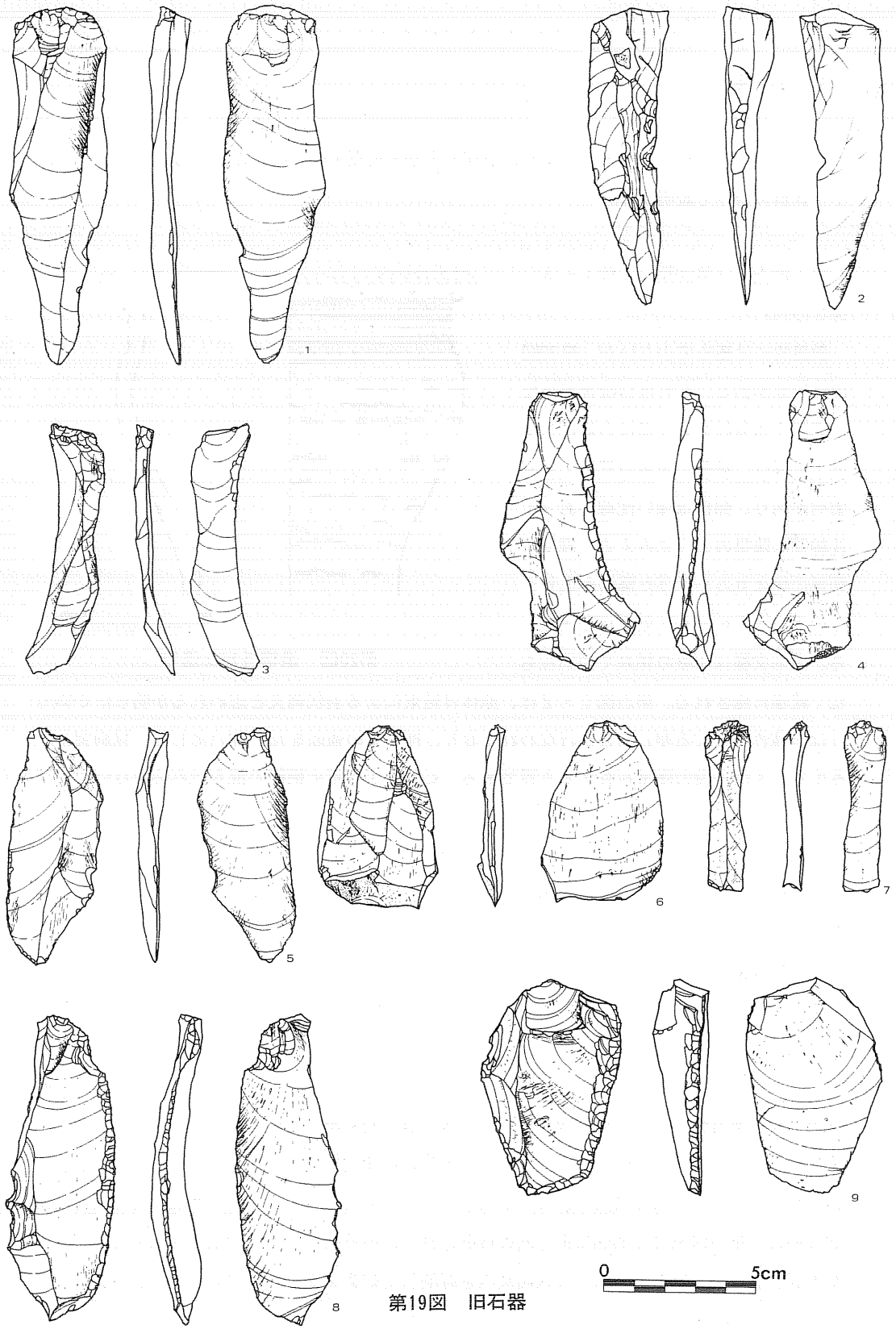
出土した旧石器は11点である。以下主なものについて説明を加えたい。

石刃（第19図１～７）

いずれも背面の剥離方向と主要剥離面とのそれが同じものである。６を除けば縦長の剥片を利用したものである。１は両側辺部ともに刃こぼれがあり右側辺部が著しい。打面側には粗い加工を施しており、打面にも再度加撃している。２も両側辺部に刃こぼれがみられるが、左側辺部には使用痕が顕著にみられる。打面は残っており、打面側は厚みをもつ。３は使用痕は確認出来ないが、左側辺部に刃こぼれがみられる。打面側には粗い剥離を加えている。４も縦長の剥片を利用したものであるが、前記のものよりは刃部が曲線的であり特に左側辺部には細加工を施す。５は左側辺部に顕著な刃こぼれがみられ光沢をもつ。６は打面の反対側に自然面を残す。７も打面側に自然面を残すが両側辺部ともに使用痕があり一部に光沢をもつものである。

掻器（第19図８・９）

８はサイドスクレイパーで縦長の剥片の右側辺部に細加工を施している。打瘤を削るため、加撃が行われている。刃こぼれが著しい。９は、側辺部、先端部ともに加工を施しているが、側辺部の細加工に比べて先端部の加工は粗い。



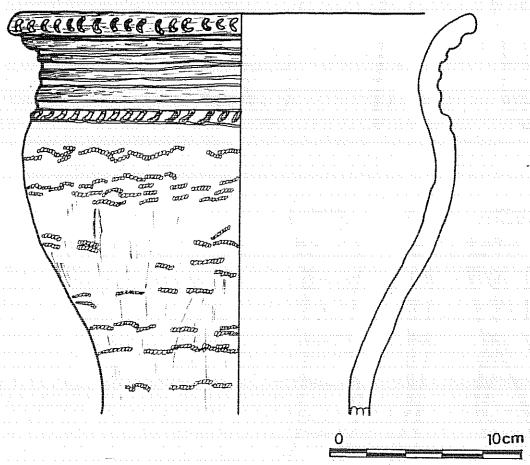
第19図　旧石器

2　土　器

調査によって得られた土器は縄文時代前期・中期・後期・晩期のものである。それぞれを、Ⅰ～Ⅳ群に分けて説明する。

第Ⅰ群土器（第20図・21図1～4　図版の14）

数量的には極めて少ないが、第20図の完形品がある。これは口縁部が外反し肥厚するもので最大径は口縁部にある。文様は口縁部に半截竹管による刺突列があり、頸部は深い沈線があって沈線間は隆帯のようにみえる。胴部と頸部の境に丸みを帯びた隆帯があり、この上にさらに斜めに刻み目が施される。胴部文様は不整の撚糸で規則性もなく縦横に施される。第21図1・2は、原体は結束による羽状縄文と思われるが明らかでない。3は半截竹管による押し引きが行なわれており、押す力の強弱を互い違いにして一見刺突文にみえる。4は一段の隆帯を有する土器である。これら土器群に繊維の混入はみられない。



第20図　遺構外出土遺物

第Ⅱ群土器（第21図5～32　22図33～37　図版11の5～37）

隆起線や沈線によって縄文の区画文が作出されるものを本群とした。

第1類（第21図8・13・14）

隆起線による渦巻文の変形したものである。隆起は断面が三角形となり14のごとく一部低くなるものもある。

第2類（第21図5・6・10～12・15～17・19・21・22・24～32）

沈線によって縄文が区画されるものを本類とした。沈線は太い棒状工具によって幅の広いものとなっている。口縁部は無文となっており（5・6・11・12・21・22）沈線による縄文区画文は縦長の楕円区画文で器面に縦方向に展開されるのを特徴とする。磨消手法もみられ、区画文の間を磨消している。一部には区画文内を磨消して刺突を加えたものもある（15～17）。

第３類（第21図７・18・20・23　第22図33～37）

沈線による縄文の区画文が曲線的なものである。第２類同様、縄文帯の間は磨消されているが区画文は曲線的で「S」字状、横「S」字状など胴部に横方向へ展開される。33は縄文帯が細くなり、先端部は弧状を呈する。34～35は沈線がゆるやかな曲線でもって引かれる。

第Ⅲ群土器（第22図38～56　図版14の38～56）

「S」字状沈線や曲線状沈線によって文様が描かれるもの。

第１類（第22図37～41・45・46・51）

「S」字状沈線が施文されるものである。特に40・41は磨消縄文の上に縦方向に沈線を引いている。37・38は第Ⅱ群第３類に近似するものであるが、37のごとく入組文風の文様を有するものもある。51は撚糸文を地文として平行沈線を引いただけのものである。

第２類（第22図42～44・56）

口縁部が波状を呈し粘土紐貼付の行なわれるものである。42は口縁部が肥厚して波状を呈するが波状に沿って刺突文や沈線が施される。43は突起状の口縁部下にボタン状の粘土を貼りつけたもので44ではその貼付された隆帯上に刺突が行なわれる。56は波状の口縁部下に粘土紐が貼付され口頸部文様は沈線によって横方向に、体部で縦方向に描かれる。

第３類（第22図47～50・52～55　第23図１）

縄文あるいは撚糸文のみのものである。縄文だけ施文された土器で47・48は口縁部が波状を呈して外反し、口縁部下は無文帯となる。53は網目状の撚糸文である。

第Ⅳ群土器（第22図57　図版14の57）

縄文晩期の土器はこれ１点である。口縁部に３～４条の沈線をめぐらし、その下に２個一対の突起を作っている。

3　土　製　品　（第23図２～４　図版15）

蓋（第23図２）

⅓が現存するものであるが全体的に細い沈線によって渦巻文が配される。渦巻文は６個でつ

まみ部は沈線を引いたものと同じ工具で刺突と沈線が引かれている。

小形土器（第23図３）

いわゆる手捏ね土器で、焼成の段階で一部粘土が器内にくずれている。

土偶（第23図４）

板状土偶で頭部は省略され、胸部には穴が穿たれている。首から腹部にかけては粘土貼付により隆帯を作り出している。背面には浅く広い溝がある。焼成、胎土とも良好である。

4　石　器　（第24図１～11　第25図12～17　第26図18～21　図版16）

石鏃（第24図１）

断面が菱形に近く先端部もそれほど丁寧には作り出していない。背面には一次加工面を残している。

石匙（第24図２～８）

縦形のものが５点（２・３・４・５・７）で横形のものが２点である。８は未完成品であろう。いずれも頁岩である。７にはつまみ部にアスファルトが付着している。

石錐（第25図９～11）

９・11は両面から錐部を作り出しているが片面のみ加工を加えている。

ヘラ状石器（第25図13～15）

13・14は主要剥離面にほとんど加工が施されず、特に14は先端部が上向きになる。15は両面ともやや粗い加工を行なっている。

磨製石斧（第25図16・17）

いずれも基部・刃部とも破損しているが、16は薄く幅の広いものである。

石皿（第26図18・19）

18・19ともに安山岩製のもので、18は裏面を凹石に転用している。19は円形のものであろう。断面をみると中央部に行くほど薄くなっている。裏面に何条かの溝が不規則に走る。

凹石（第26図20）

中央部がわずかながら凹んでいる程度で片面使用されたものである。

磨石（第26図21）

石の中央部をわずかながら平坦に磨いた程度で、片面だけである。

第3節　ま　と　め

1　土器について

駒坂袋Ⅰ遺跡の第Ⅰ群土器は縄文時代前期中葉に位置づけられると思われる。次の第Ⅱ群土器は、第1・2類が大木9式と考えられる。特に隆起線の断面形が三角形になり縄文区画も縦長になるのが大きな特徴であろう。第3類土器としたものは、縄文区画文が曲線的になり横への展開を示すことからも大木10式と考えられる。しかしながら本資料中大木10式としたものには体部文様帯が明確なものが少なく、又いわゆる「C」・「U」字状文という文様は見ることが出来なかった。わずかにＳＩ02出土の土器から体部文様帯がわかるが、これによると第15図5の土器には「C」字状文の未発達なものと考えられる文様が施文されており、又同図4の土器では楕円区画文の沈線が胴部下半で孤状に楕円区画文間をつないでおり、横への文様展開が期待される土器である。従って本類土器はこうした文様が横に展開される初期のころのものと思われ大木10式の古い方になるものと考えられる。第Ⅲ群土器としたものは、後期初頭に位置づけられる。

2　遺構について

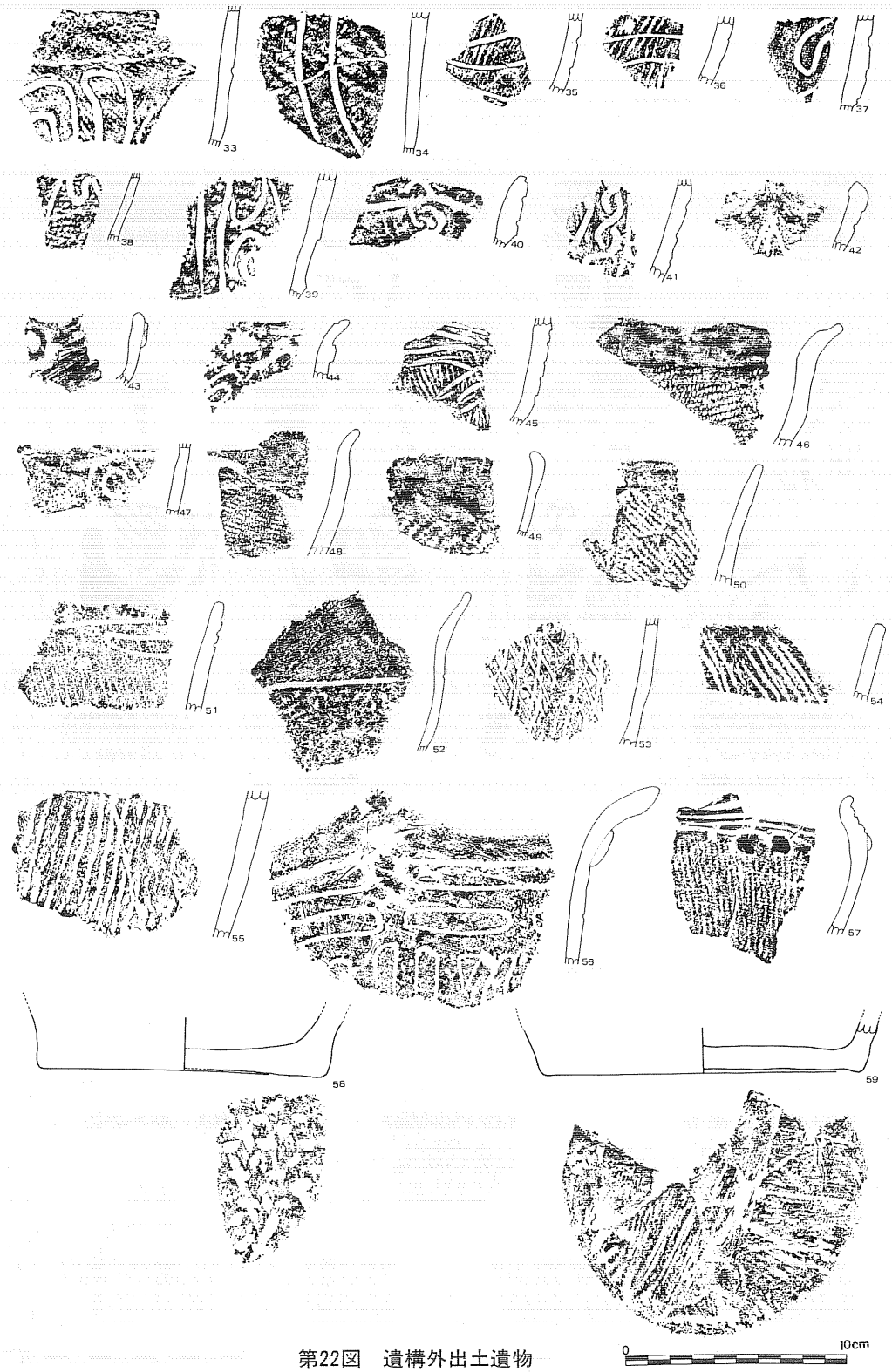
遺跡は東西に長い広大な台地の南東側で、舌状にわずかにのびた先端部にある。この遺跡から住居跡は2軒検出された。その大きさは、1号住居跡が不整楕円形で長径3.25 m、2号住居跡がほぼ円形で直径4.45mである。県内で発見された縄文時代中期の住居跡として2号住居跡は中ぐらいの部類に属する。いずれの住居跡も柱穴は確認されず、炉の位置は壁寄りにあり、その構造は石囲い部の外に埋設土器があるいわゆる複式炉である。2号住居跡の炉はかなりしっかりした造りで、石囲い部は石組みと呼ぶにふさわしいものである。壁については1号住居跡は7～19cmと浅いが、2号住居跡は台地の西側縁辺部の斜面ぎりぎりに占地しており、床面を水平にするため西側は10cmほどと浅いが、東側ではロームを80cmも掘り込んでいる。入口について1号住居跡は明瞭な痕跡は認められない。2号住居跡は炉の東側付近全体の床面が非常に堅緻であるが、前記のように壁高が80cmもあり出入口とは考え難い。北側か南側が出入口であったと推測される。時期はいずれも縄文時代中期末で、2号住居跡は炉に使用された土器から大木10式期に比定される。

住居跡以外では炉跡が2基検出された。いずれも石囲い炉で、柱穴等は確認されなかったが住居跡と同じく縄文中期と考えられる。

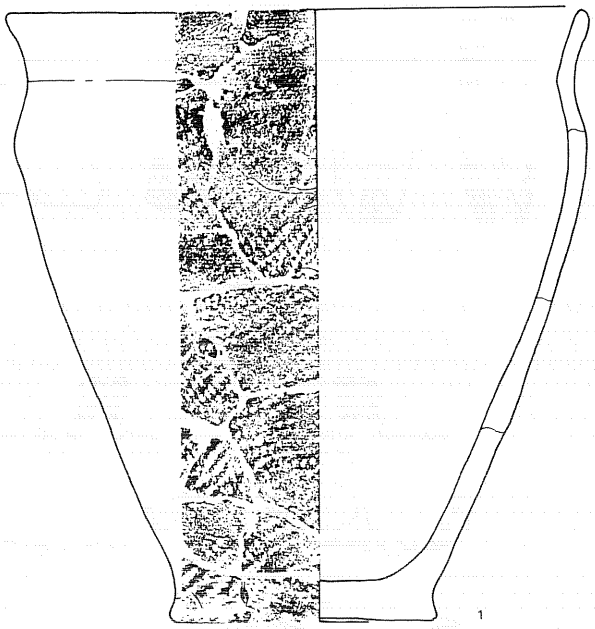
土壙は全部で9基確認された。規模は径が、0.70m～1.70mで、形態は袋状やフラスコ状に

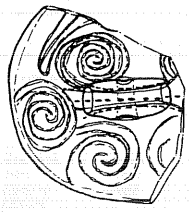
きちっと掘り込まれているものや、径が0.78m～2.00mで比較的浅い皿状のものや、垂直に掘り込まれているものなどがあり規則性がない。いずれも出土遺物はほとんどないが、2号土壙からは縄文時代中期末の遺物がわずかに出土している。

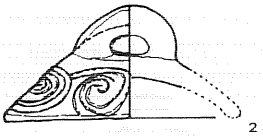
第21図　遺構外出土遺物

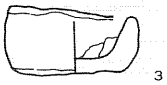


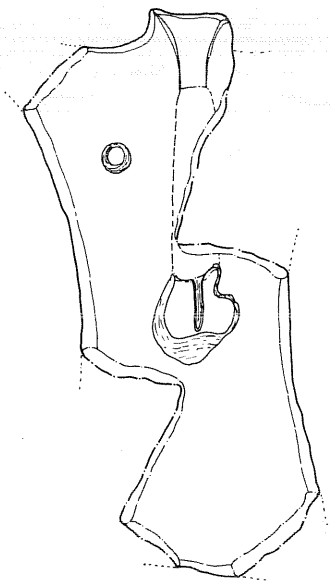
第22図　遺構外出土遺物

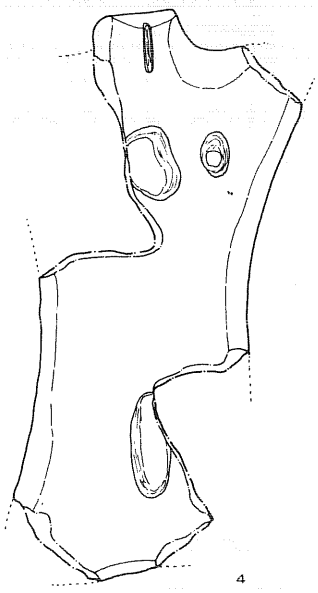


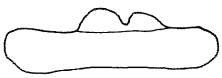




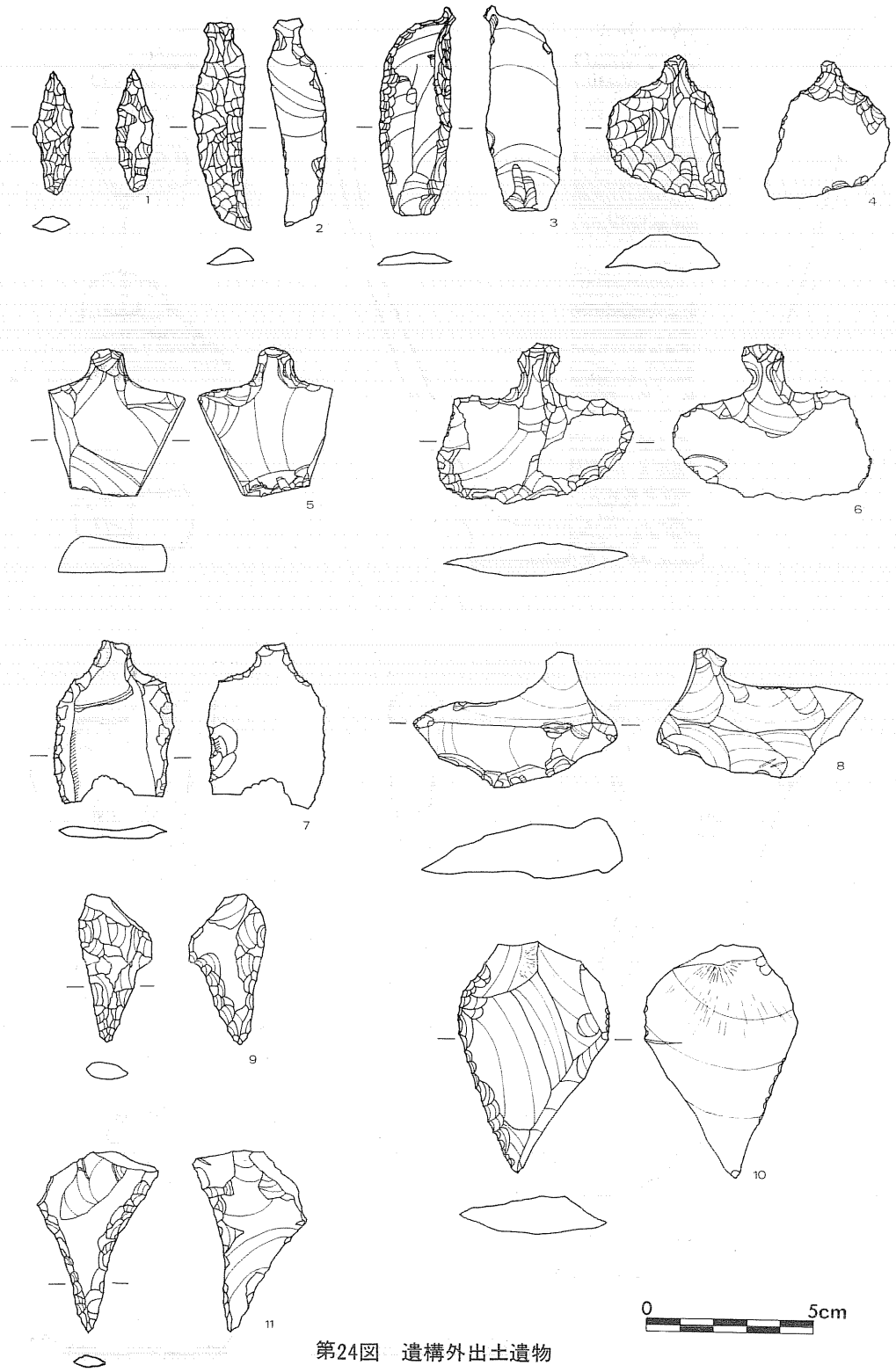




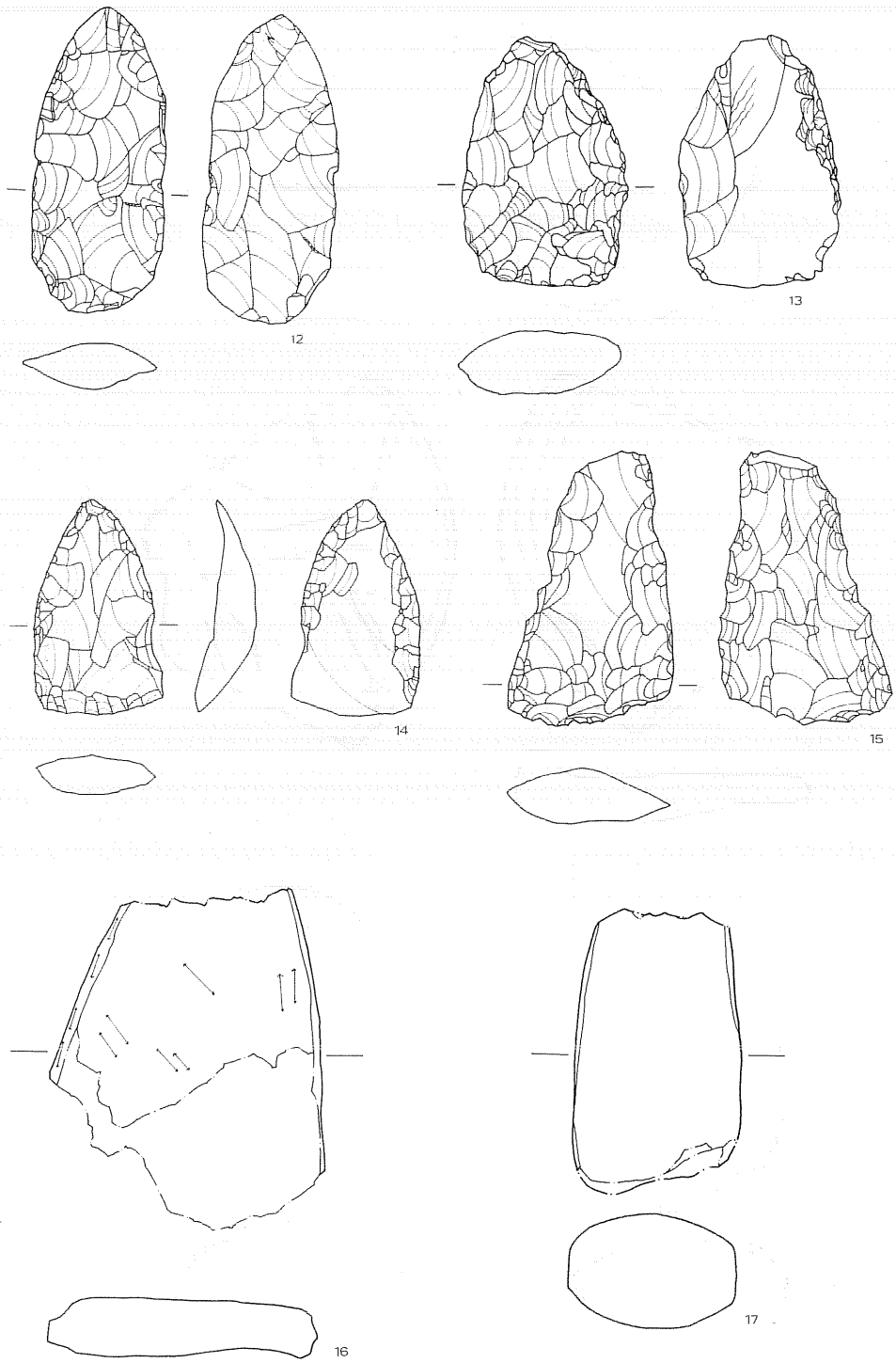




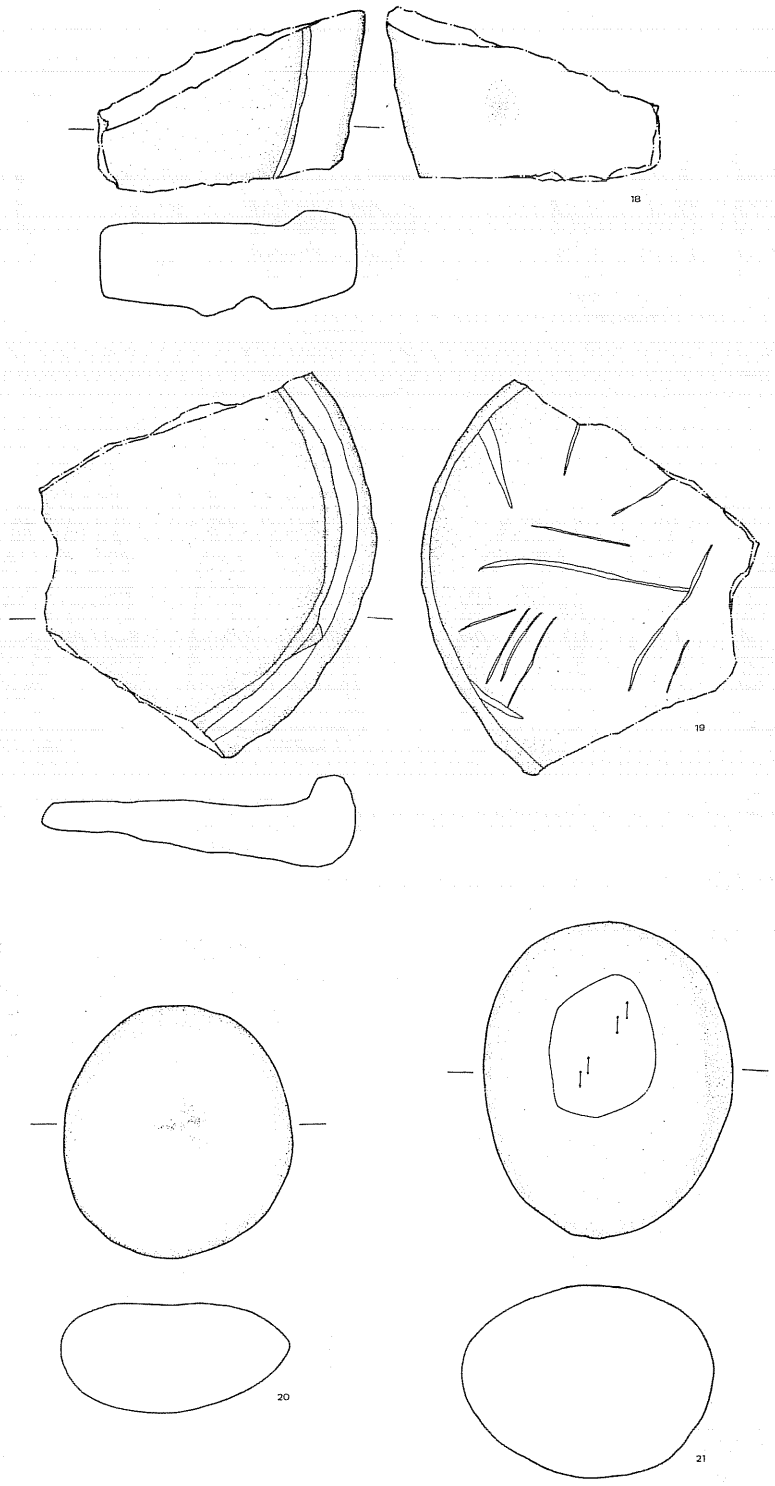
第23図　遺構外出土遺物



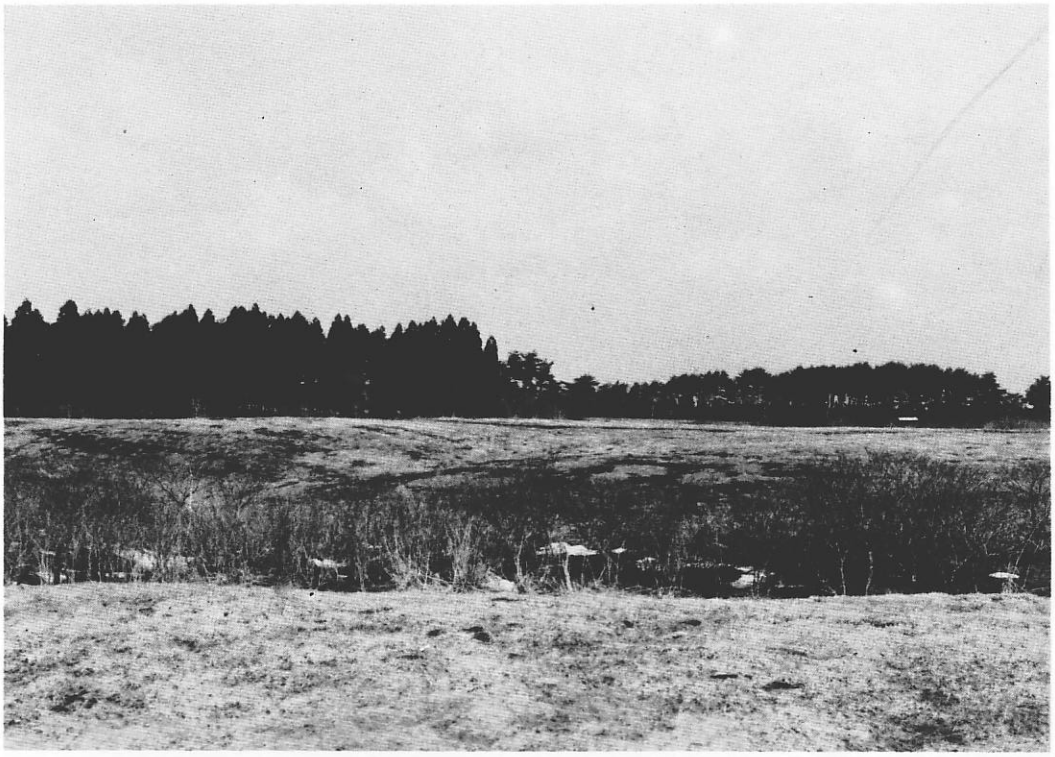
第24図　遺構外出土遺物

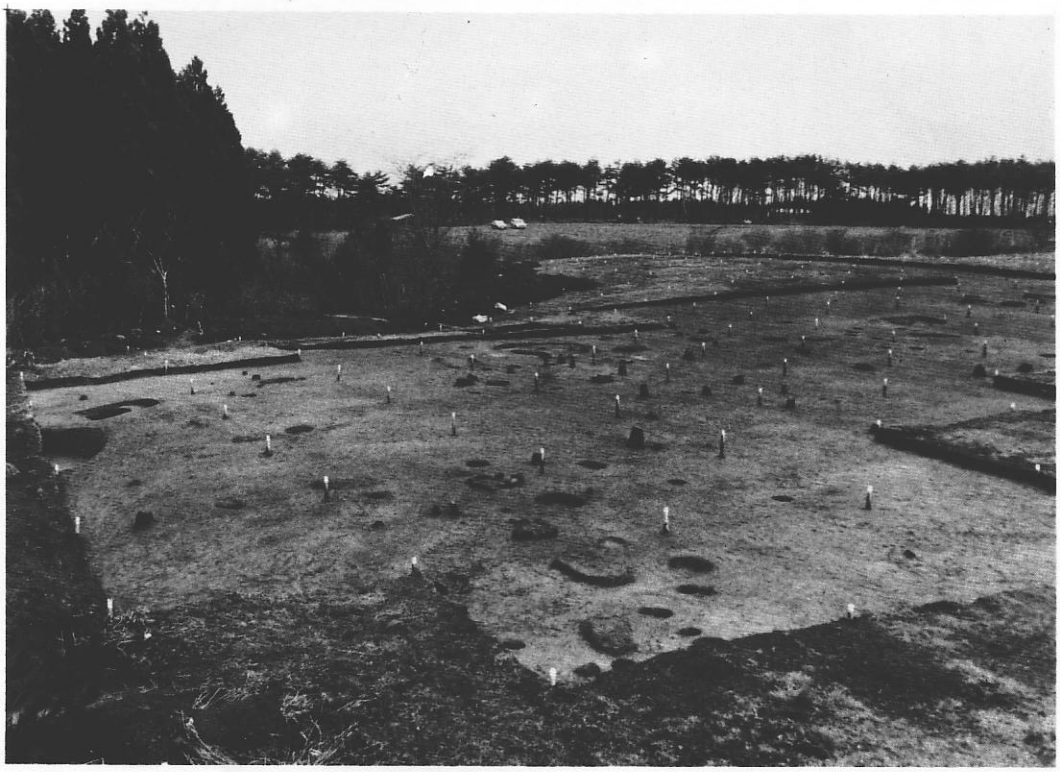


第25図　遺構外出土遺物　0　5cm

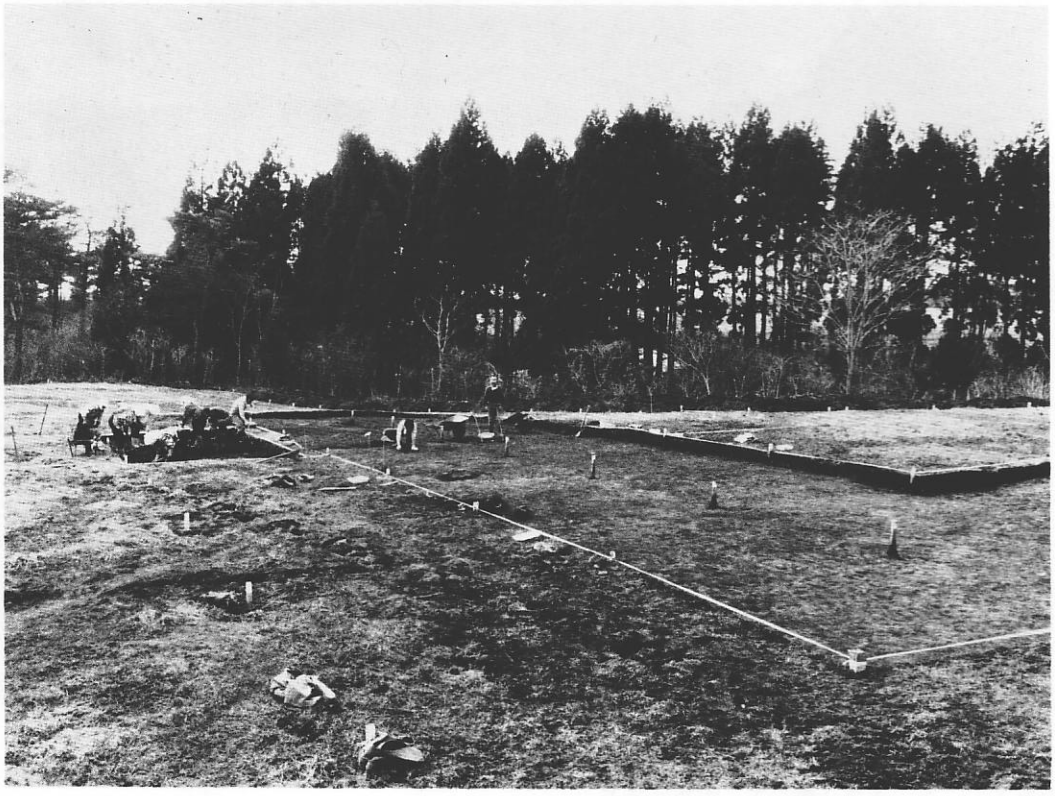


第26図　遺構外出土遺物　0　10cm





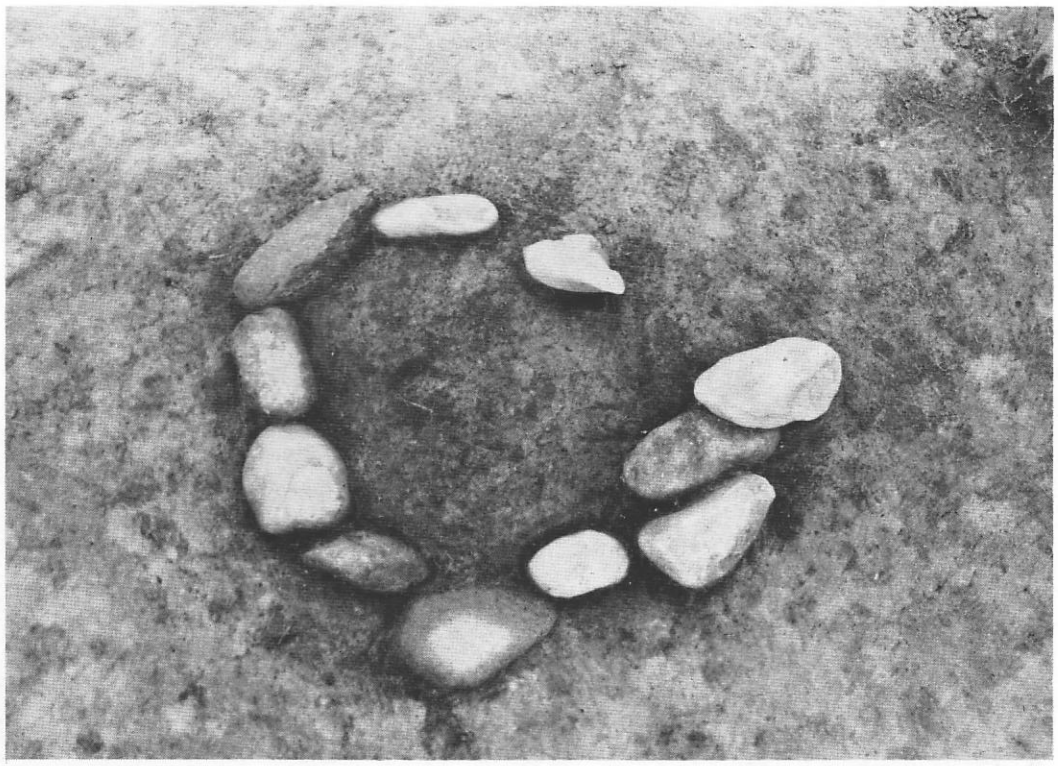
図版１　　上　遺跡全景　下　調査区近景



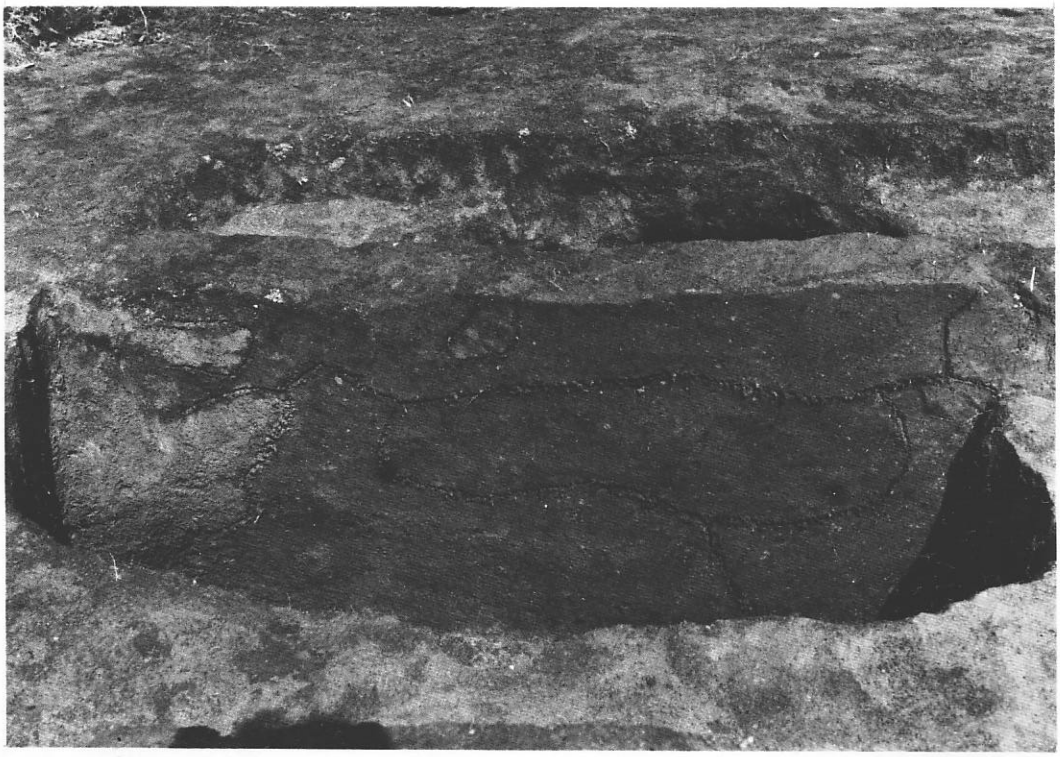
図版２　　上　発掘作業風景　下　同上

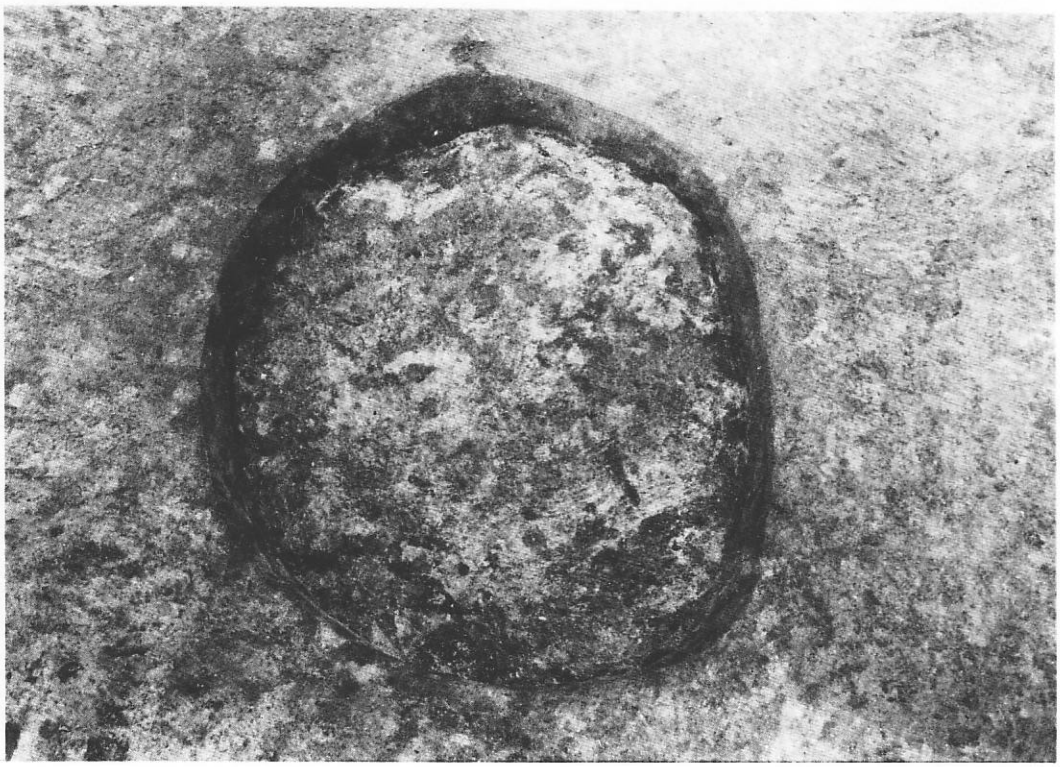
図版３　　上　SI 01　竪穴住居跡　下　SI 02竪穴住居跡

図版 4　　上　SI 02竪穴住居跡炉　下　配石遺構

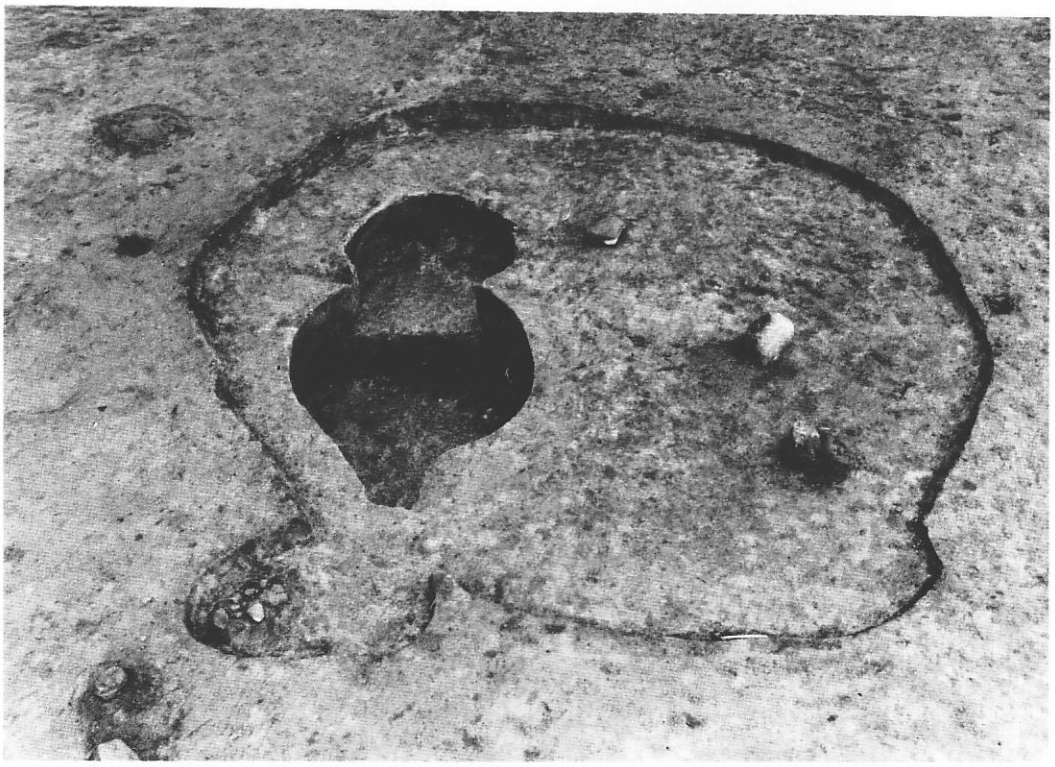


図版５　　上　１号炉　下　２号炉

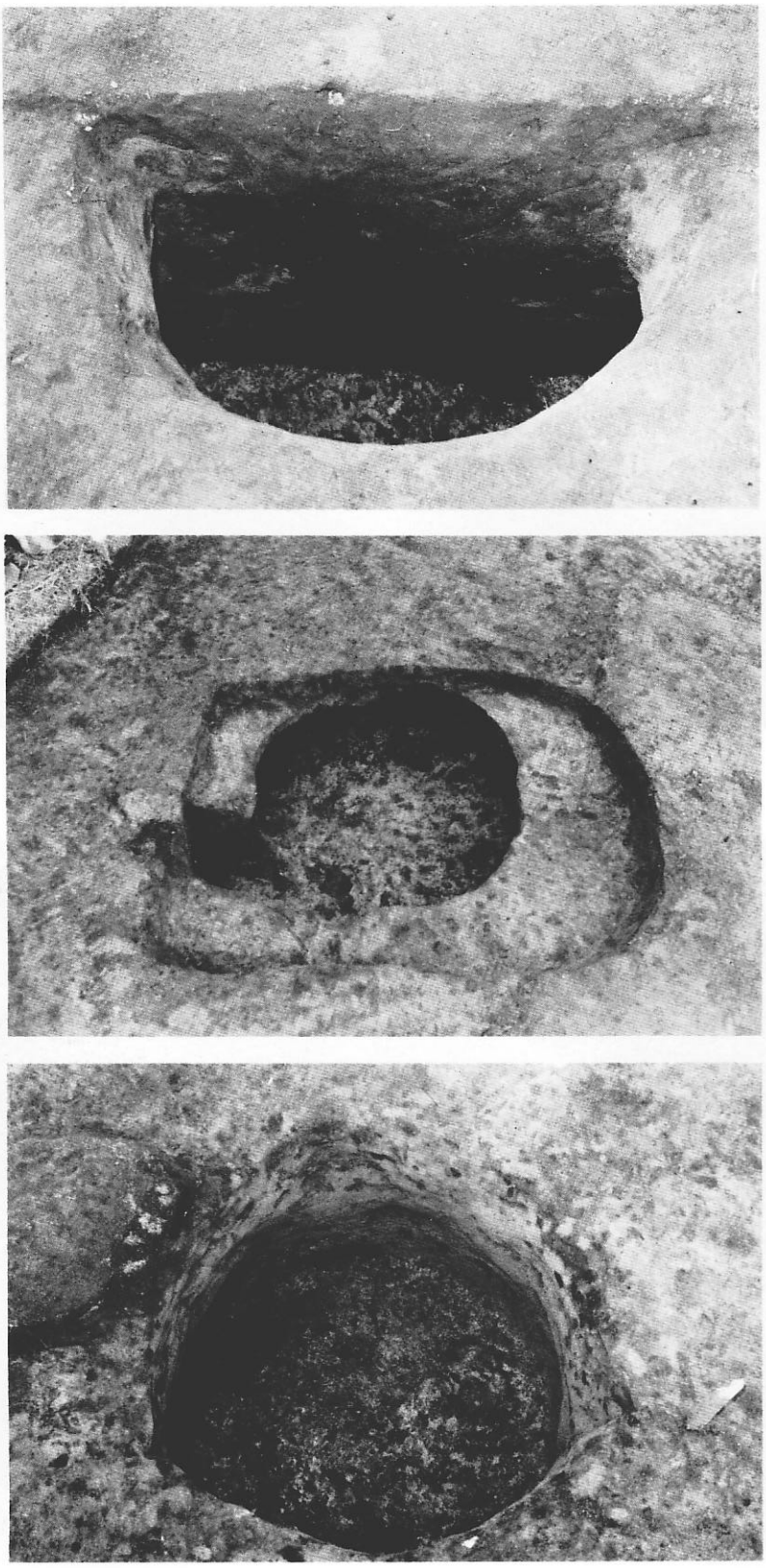




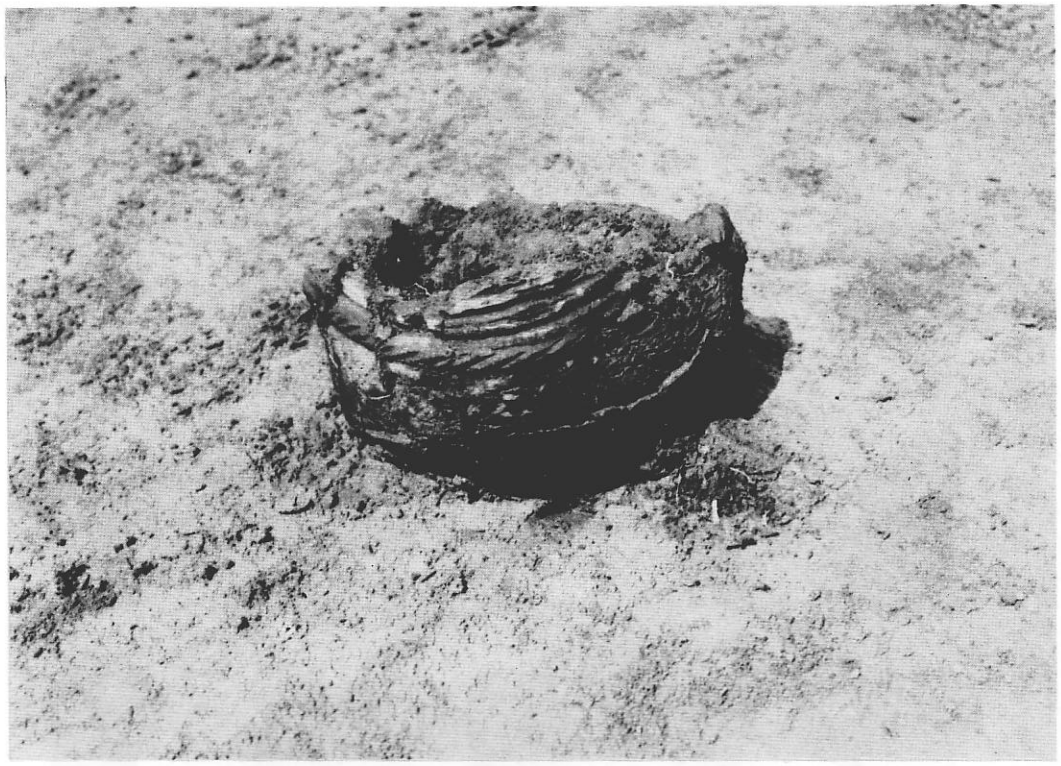
図版 6　　上　SK 02　下　SK 03上壙

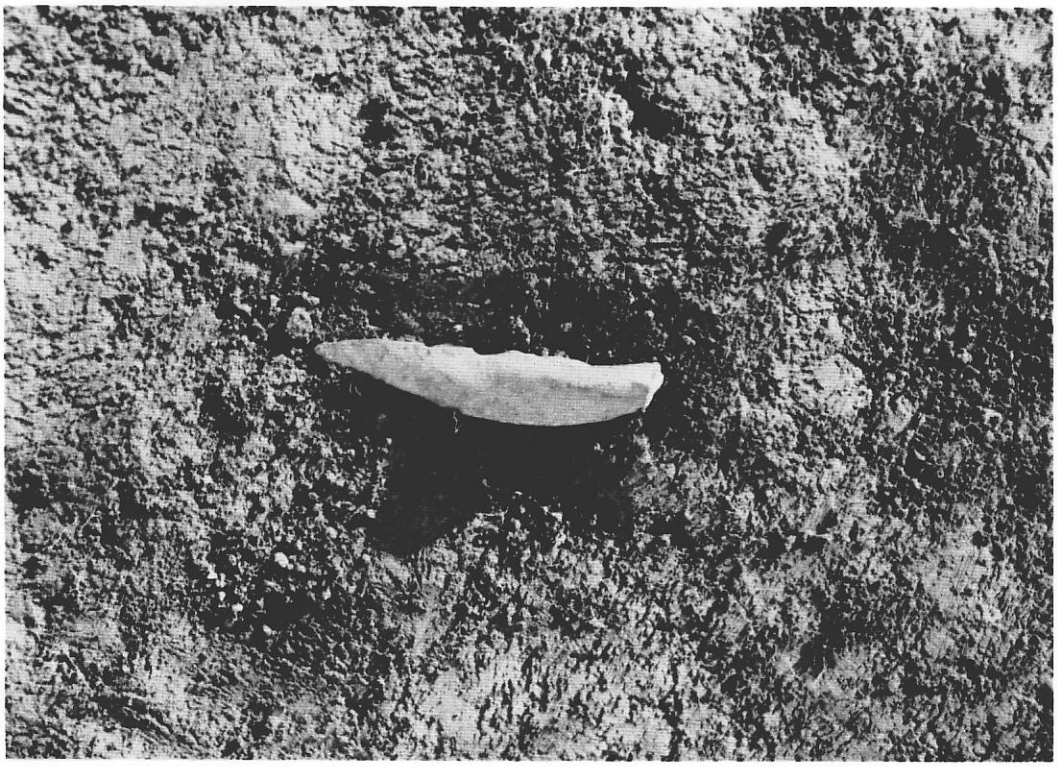


図版7　　上　SK 04,05　下　同上土壙

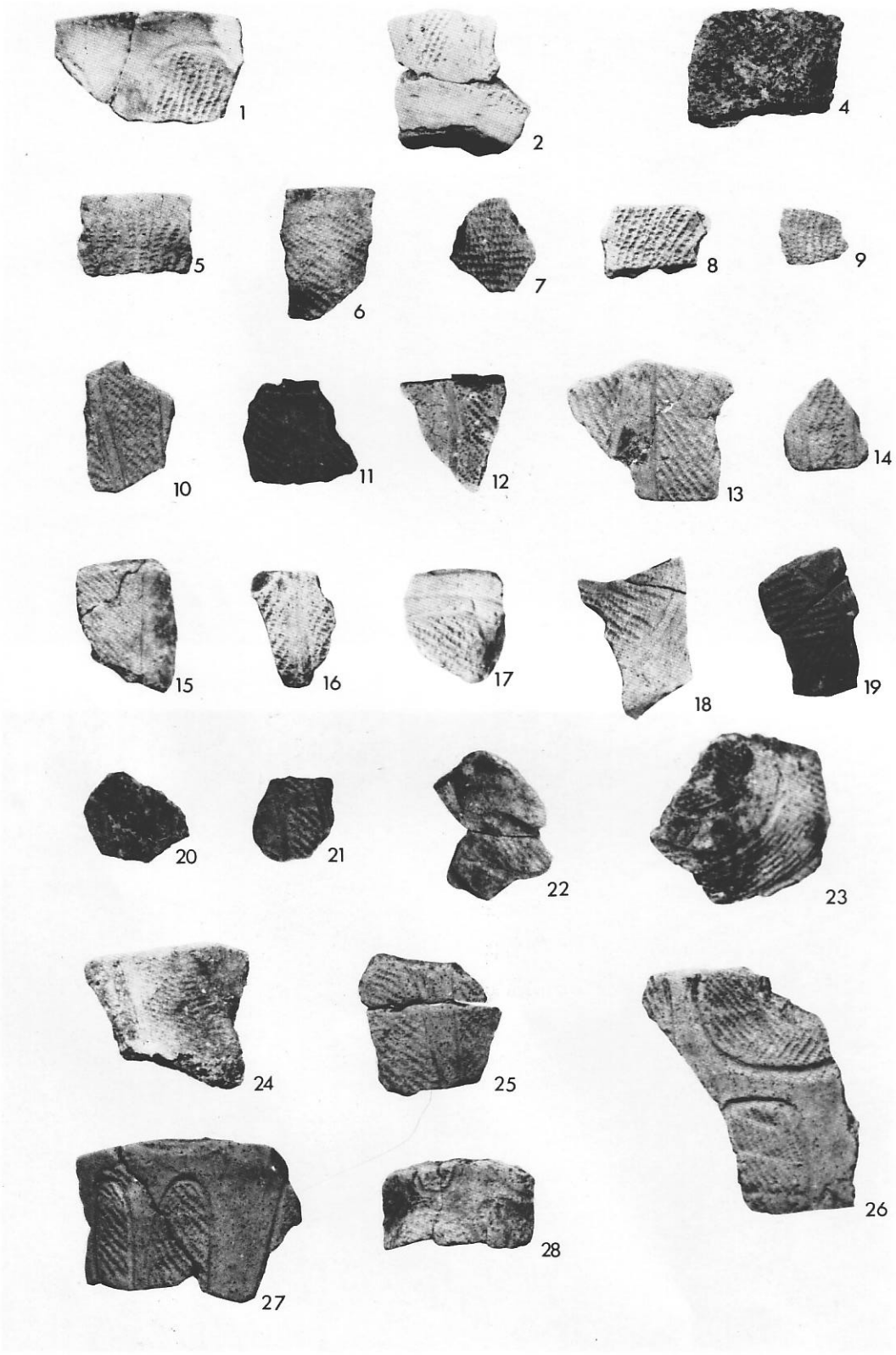


図版 8　　上　SK 04　中　SK 06, 07　下SK 08土壙

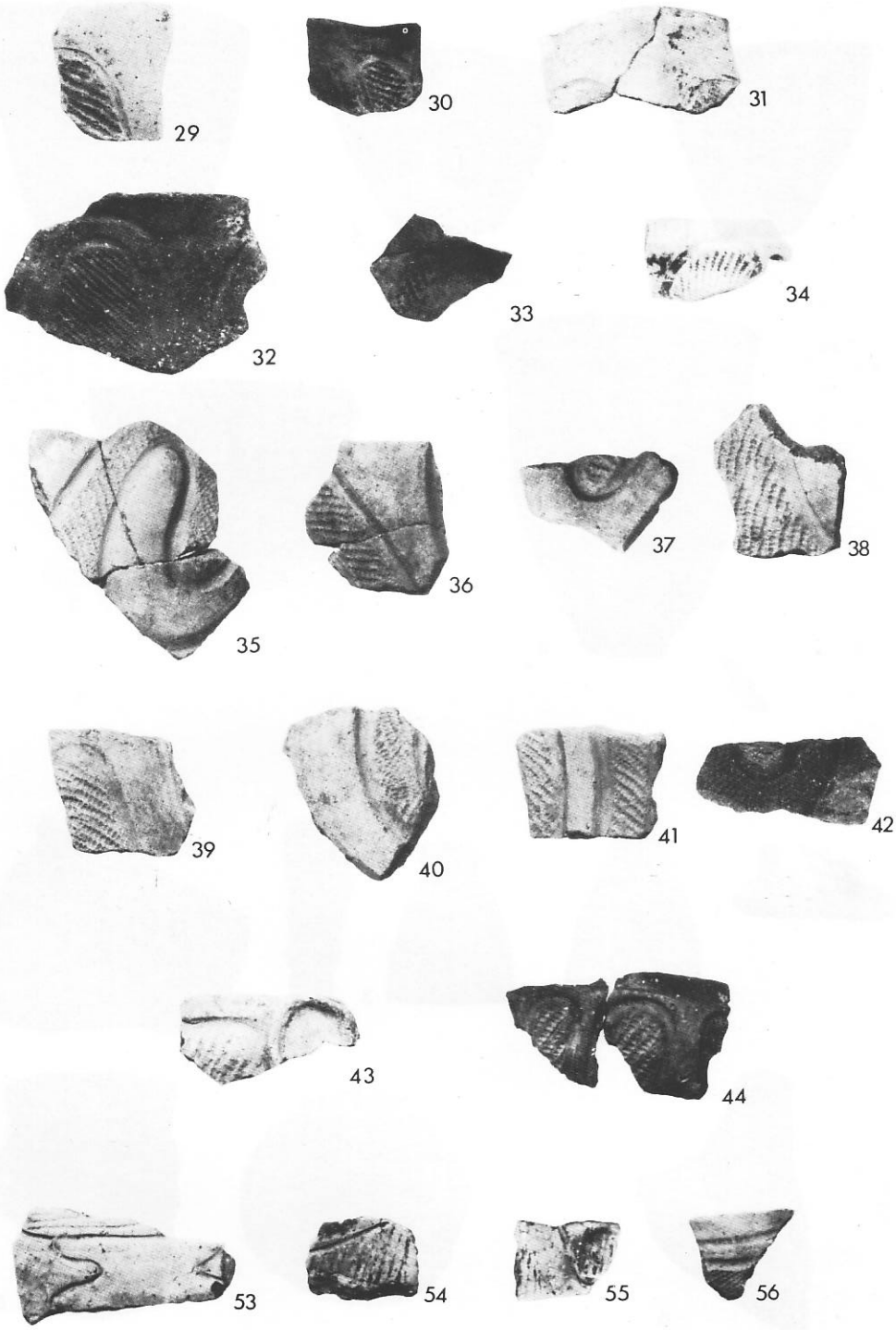




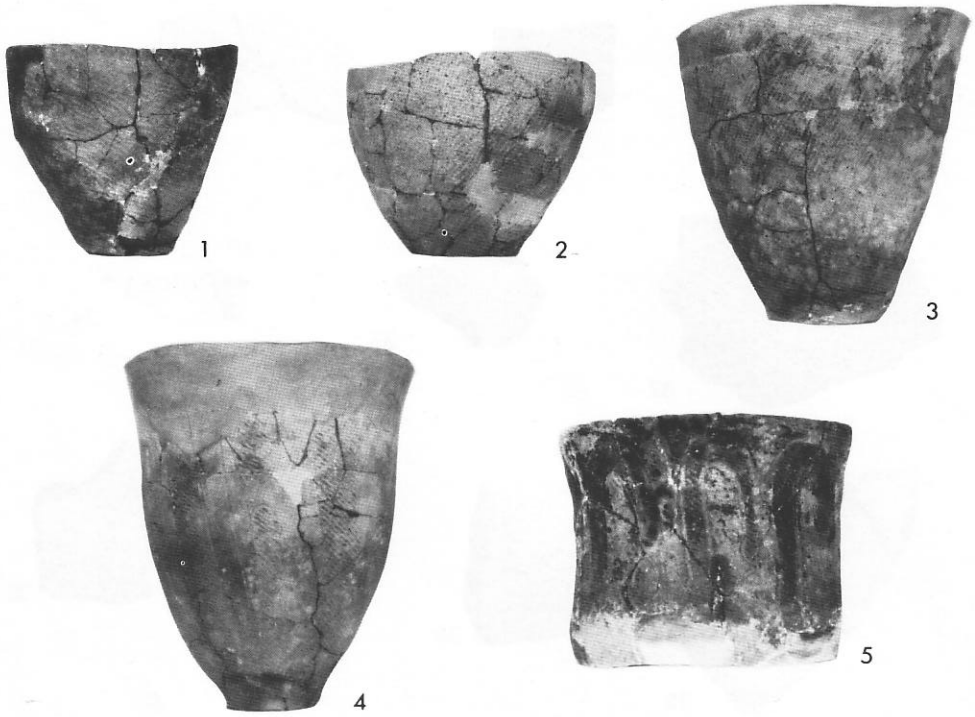
図版 9　　上　土器出土状況　下　石器出土状況

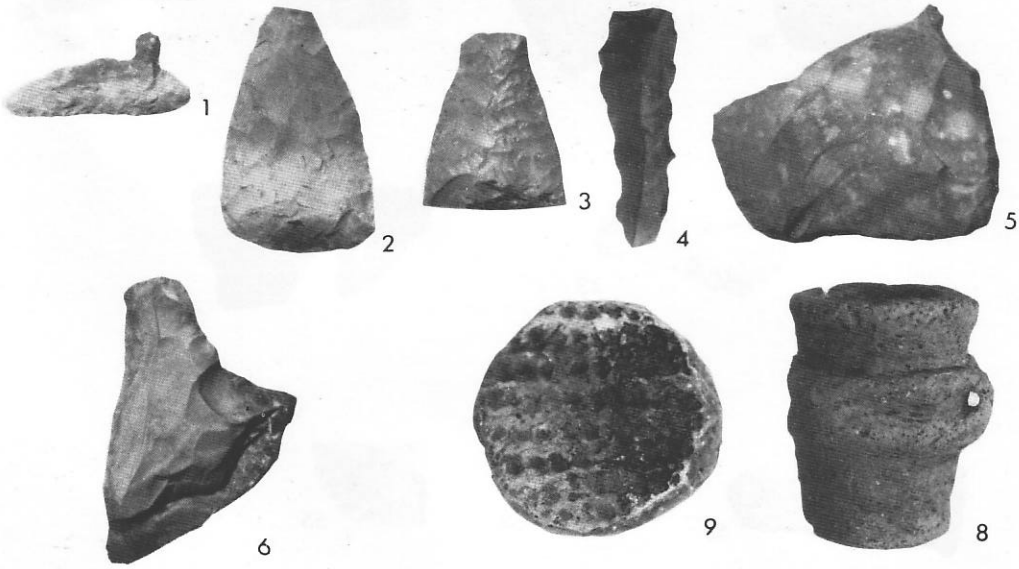


図版10　住居跡内出土遺物

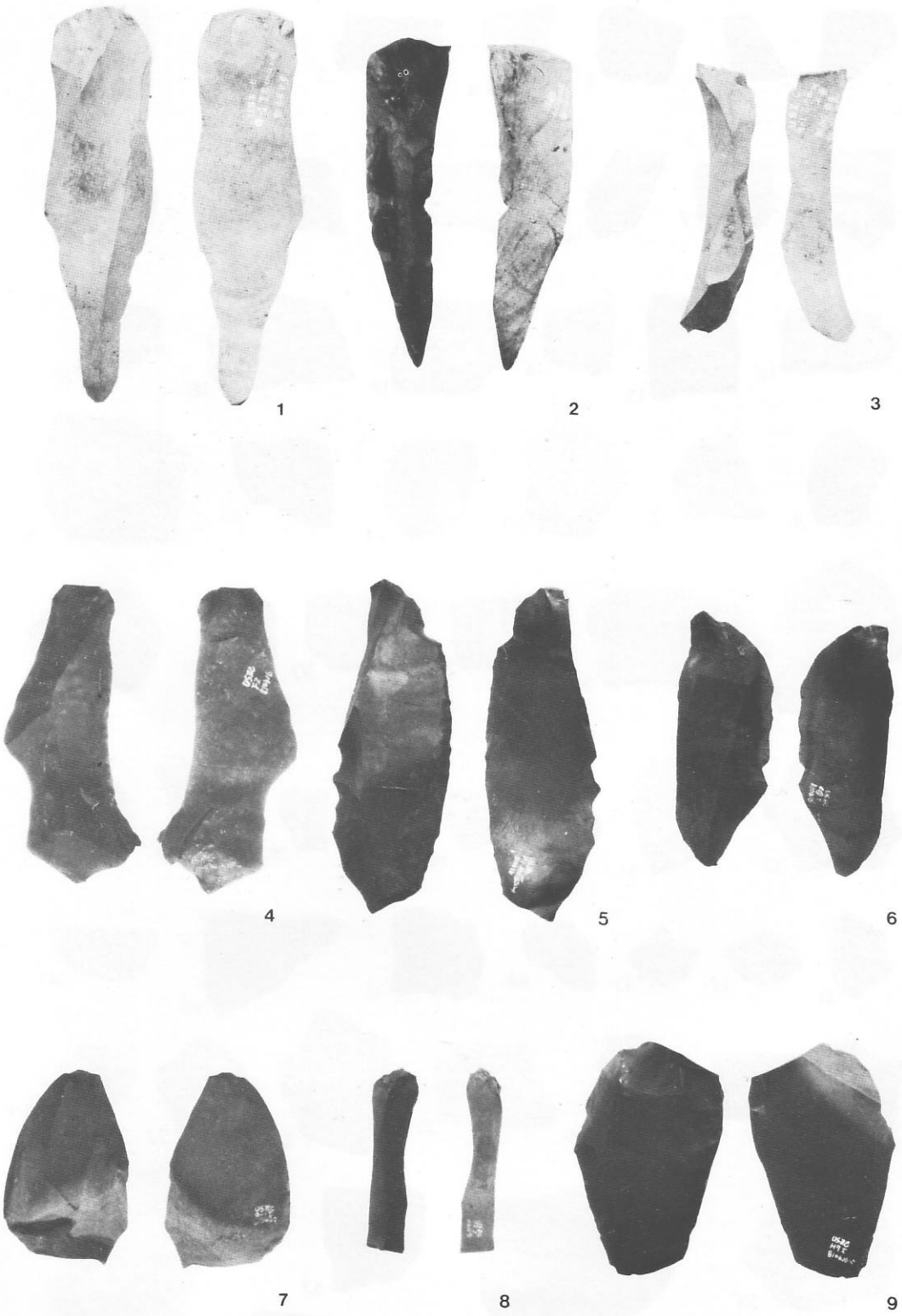


図版11　遺構内出土遺物

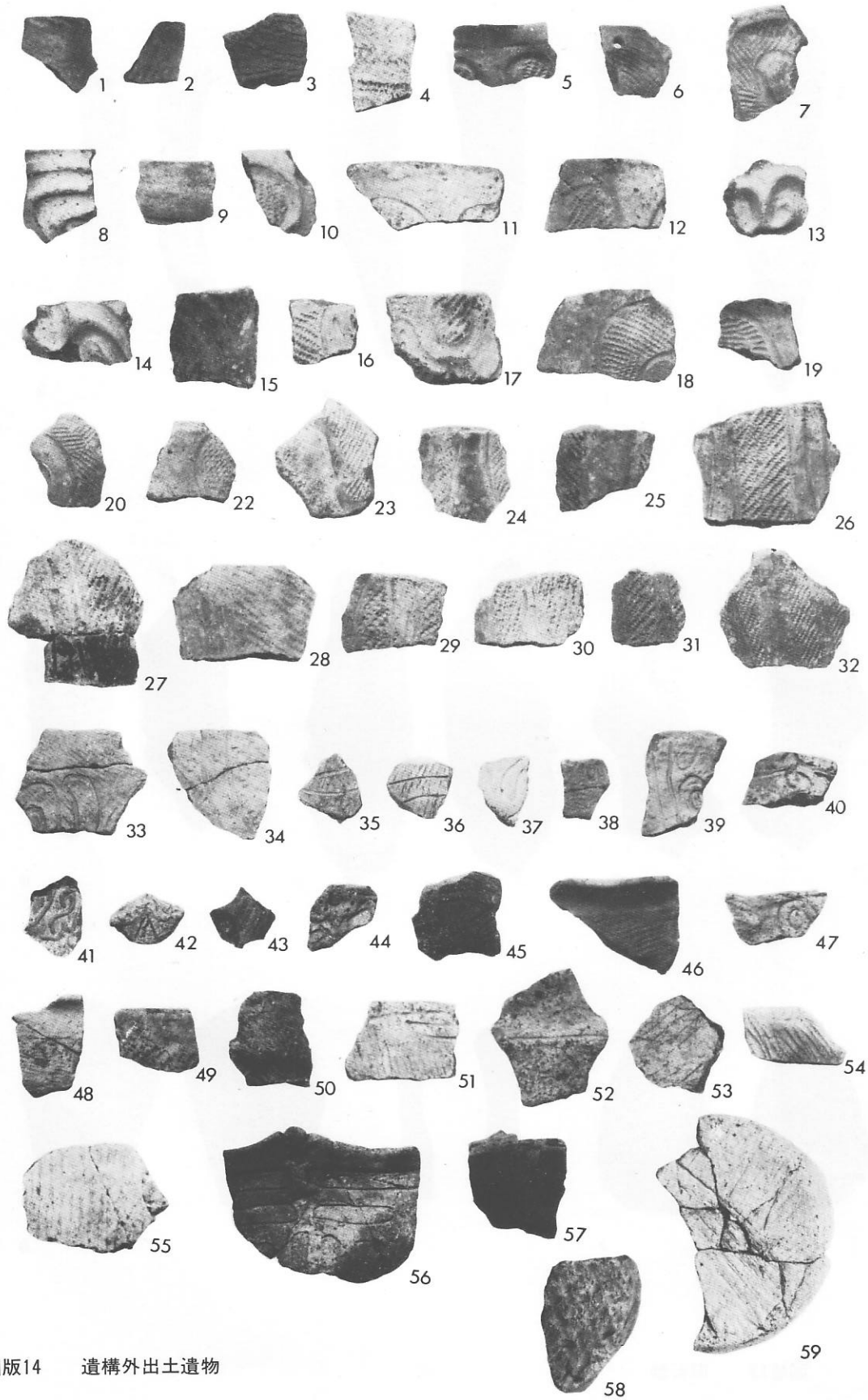




図版12　遺構内出土遺物



図版13　旧石器



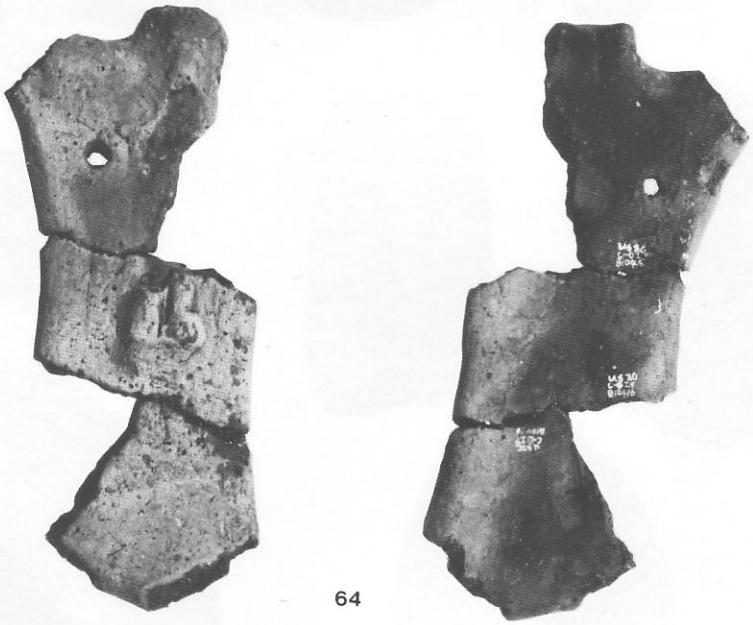
図版14　遺構外出土遺物

60

61

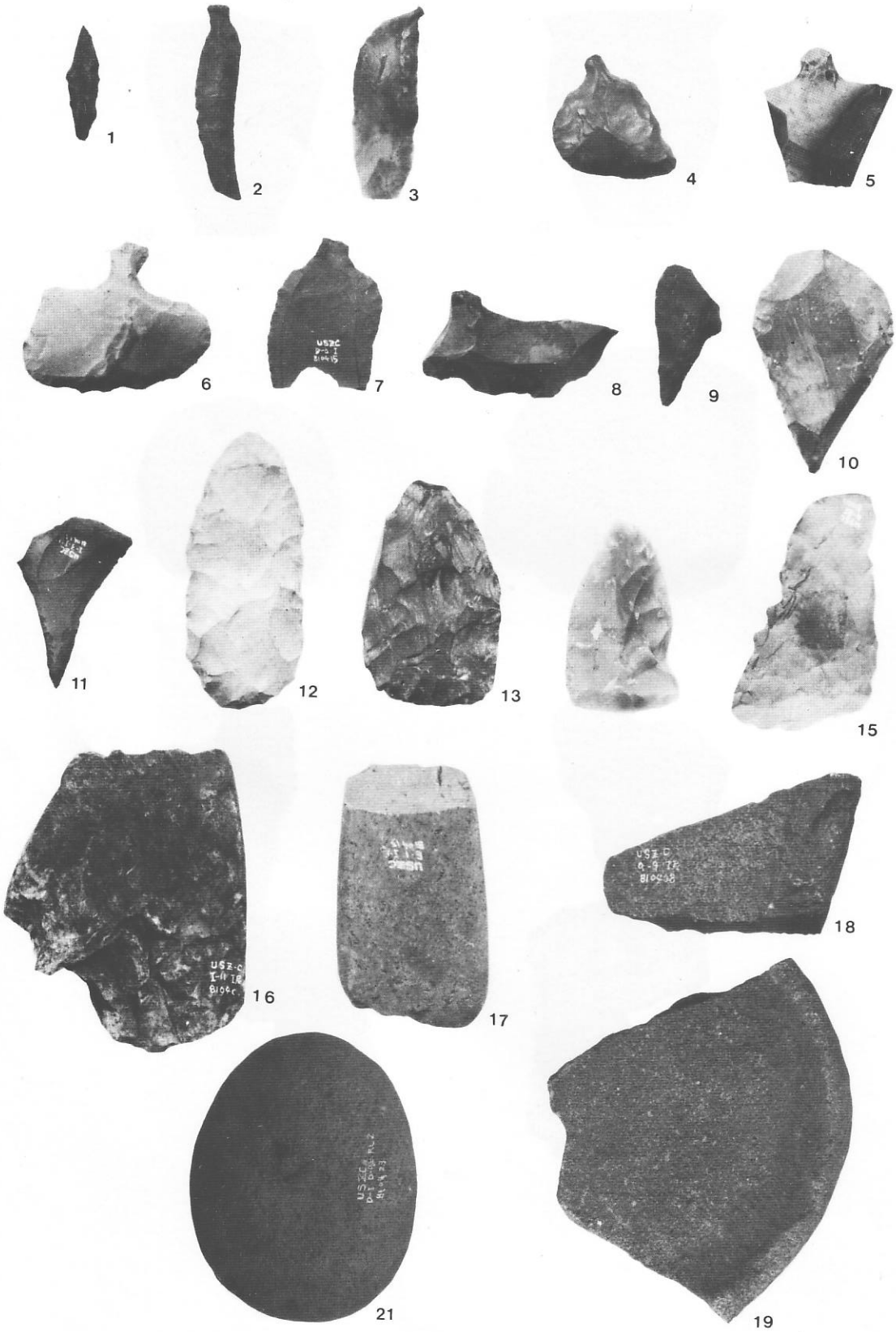
62

63



64

図版15　遺構外出土遺物



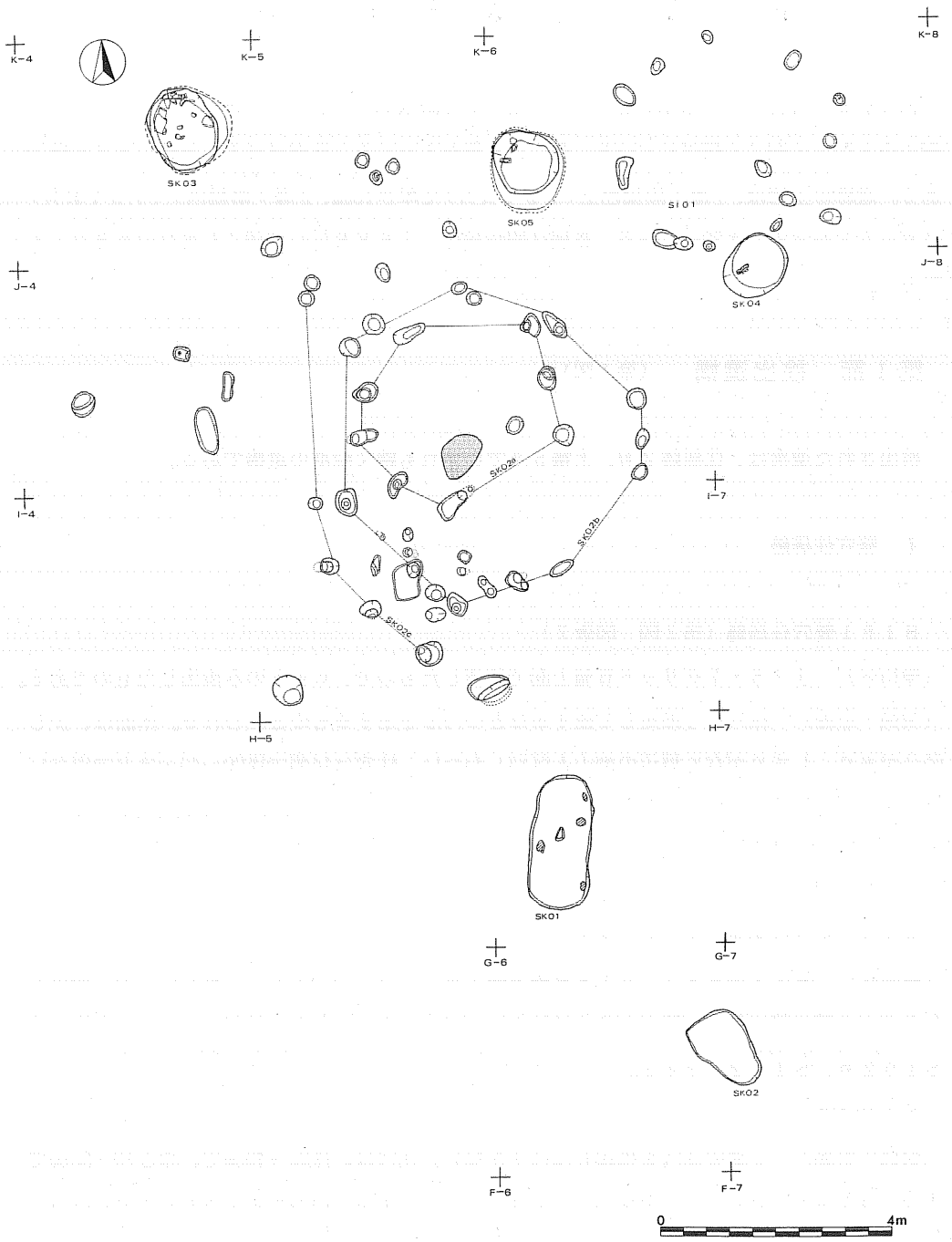
図版16　遺構外出土石器

駒　坂　袋　Ⅱ　遺　跡

遺　跡　記　号　　ＵＳＺＤ

所　　在　　地　　秋田県河辺郡雄和町椿川字駒坂袋

調　査　面　積　　５７６㎡



第１図　駒坂袋Ⅱ遺跡遺構配置図

第 5 章　駒坂袋Ⅱ遺跡

＜現　況＞

駒坂袋Ⅱ遺跡は、同Ⅰ遺跡の東側200ｍほどの丘陵斜面に位置する。標高は、76ｍほどで東側の小さな沢に向って傾斜している。南側にも沢が入りこみ、北側はゆるい起状のある丘陵である。遺跡の土層は、Ⅰ層：黒褐色土（7.5ＹＲ3/1）で厚さ10cm、Ⅱ層：暗褐色土（7.5ＹＲ3/3）でカーボンを含み厚さ20cmである。Ⅲ層は明暗褐色（7.5ＹＲ5/6）で硬くしまりのあるロームである。

第１節　検出遺構　（第１図）

検出された遺構は、住居跡２軒、土壙５基でいずれも縄文晩期の遺構である。

１　竪穴住居跡

ＳＩ０１竪穴住居跡（第２図　図版２）

〔検出区〕　Ｊ－８・７グリッドⅢ層上面で確認したもので、ピットのみ検出したものである。

〔規模・形態〕　柱穴から推定して径４ｍほどの円形を呈するものと思われる。床面は、少し凹凸があり、しまりがなく周辺の地山と区別しがたい。柱穴は14個で径20～40cmほどで円ないしは楕円形を呈する。柱穴の深さは、10～20cmで埋土は、カーボンを含む暗褐色土（7.5ＹＲ3/3）である。焼土・遺物はなかった。

ＳＩ０２竪穴住居跡（第３図　図版２）

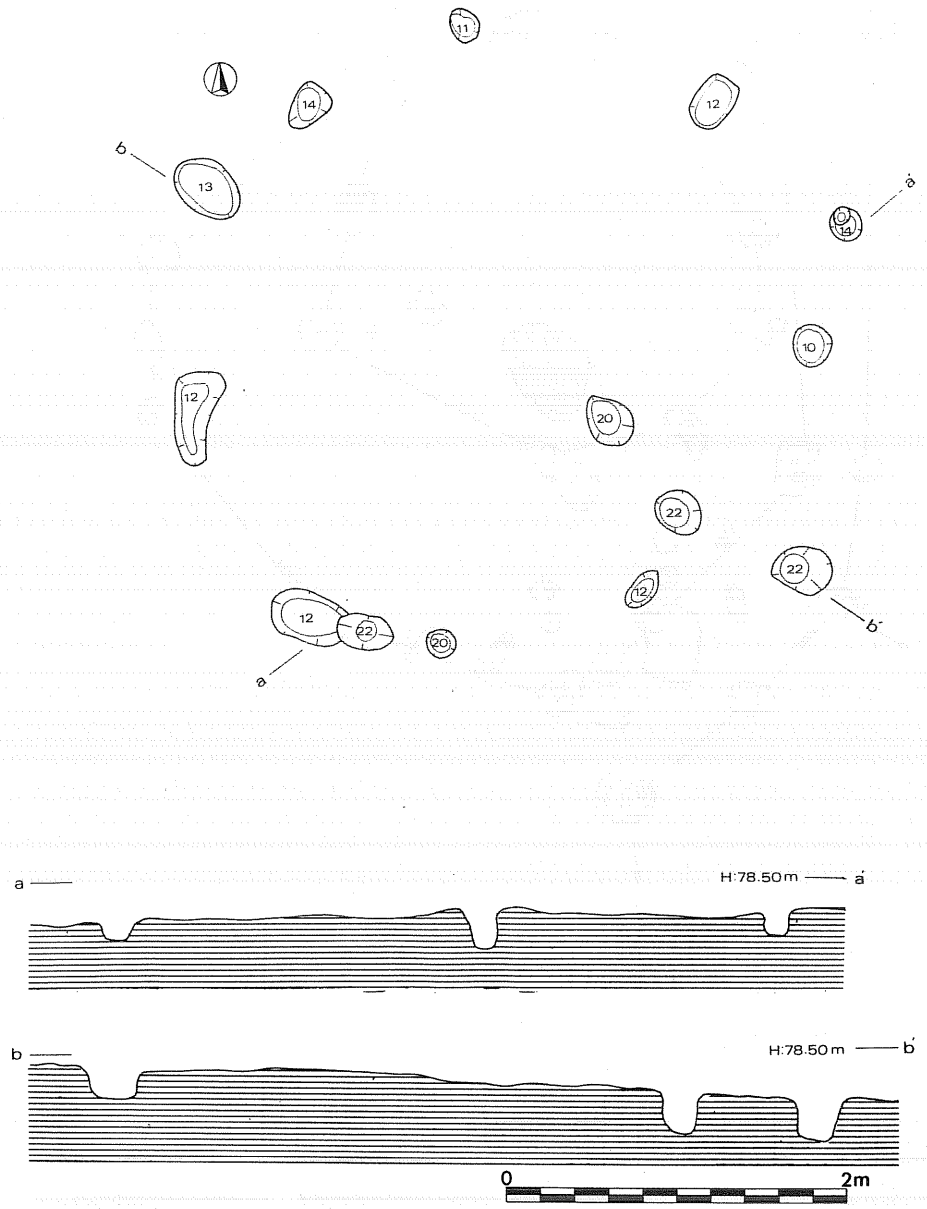
〔検出区〕　Ｈ・Ｉ－６・７グリッドⅢ層上面で確認したものである。これも柱穴のみ検出したもので２回の建て替え（縮少あるいは拡大）が考えられる。大きい住居跡からＳＩ０２ａ、ＳＩ０２ｂ、ＳＩ０２ｃとする。

ＳＩ０２ａ

〔規模・形態〕　６個の柱穴を確認したにすぎない。柱穴は、径25～40cmで、深さ10～50cmである。埋土はカーボンを含む暗褐色土（7.5ＹＲ3/3）である。円形を呈するものと思われる。

ＳＩ０２ｂ

〔規模・形態〕　径30～50cm、深さ10～50cmの円形ないしは楕円形を呈する柱穴で構成される。

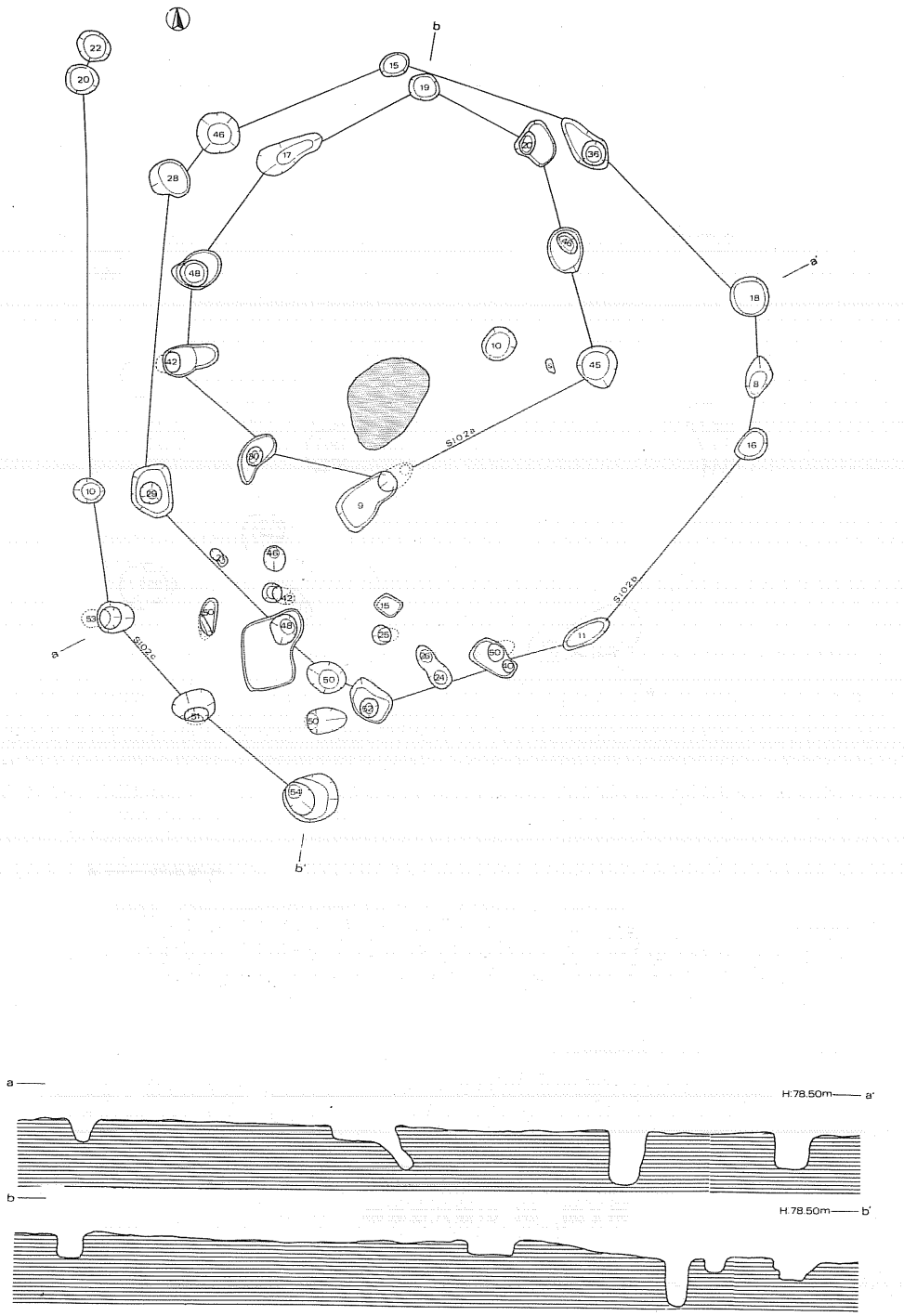


第２図　SI 01竪穴住居跡

柱穴は径５ｍのほぼ円形を呈して並んでいるが東側に少しふくらみをもつ。

ＳＩ０２ｃ

〔規模・形態〕　深さ20～40㎝、径30～40㎝の円形の柱穴が径3.3ｍほどの円形を呈し並んでいる。柱穴内の埋土は暗褐色土（7.5ＹＲ3/3）である。住居内南側には暗赤褐色（５ＹＲ3/4）

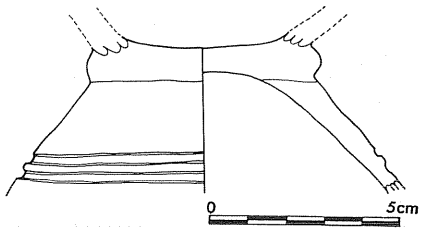


第3図　SI 02a·b·c 竪穴住居跡

の焼土が厚さ５㎝で広がっている。

出土遺物（第４図　図版５の１）

ＳＩ０２ｃの柱穴内より出土した台付鉢形土器の台部であろう。台部と胴部接合面には粘土紐貼付による隆帯があり、台部下半には２条の深い沈線がめぐる。胎土・焼成とも良好で器面は赤褐色を呈する。



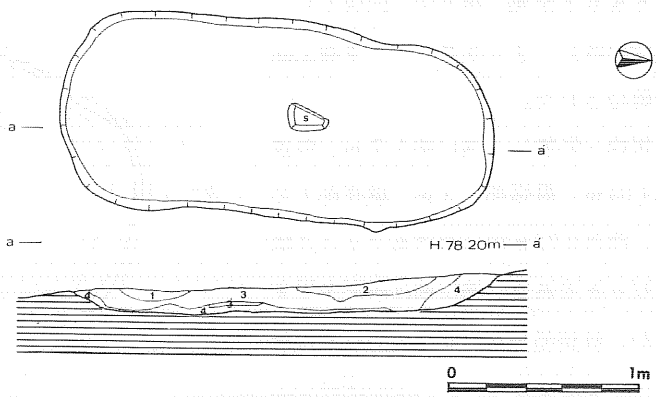
第４図　SI 02出土土器

2　土壙

ＳＫ０１土壙（第５図）

〔検出区〕　Ｇ－７グリッドの西側でⅡ層下面で確認されたものである。

〔規模・形態〕　2.3ｍ×1.1ｍの楕円形を呈し、深さ20㎝ほどで壁はスリ鉢状に立ち上る。南北の壁と底面は焼けて硬くなっている。底面には炭化物の広がりがみられる。



第５図　SK 01土壙

第１層　黒褐色土（7.5ＹＲ2/2）

第２層　暗褐色土（7.5ＹＲ3/3）

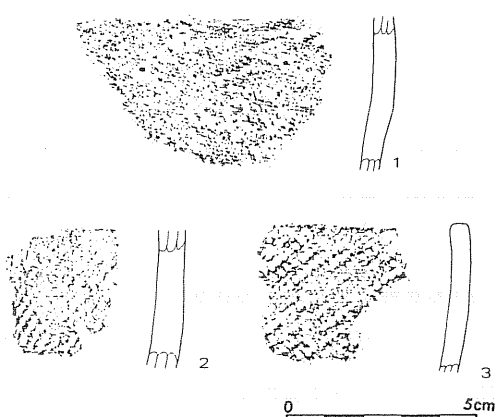
第３層　黒色土（10ＹＲ1.7/1）

第3′層　炭化物

第４層　褐色土（1.5ＹＲ4/4）

出土遺物（第６図　図版６の２～４）

いずれも縄文の施文された土器片である。３は内わんし平縁の口縁部である。３点ともに胎土・焼成とも良好である。

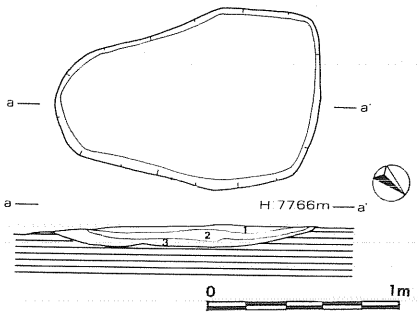


第６図　SK 01出土土器

ＳＫ０２土壙（第７図）

〔検出区〕　Ｆ－７グリッドⅡ層下面で確認したものである。

〔規模・形態〕　1.4ｍ×1.0ｍで北が若干ふくらみ楕円形を呈する。深さ10cmほどで壁はスリ鉢状に立ち上がる。壁と底面は焼けて硬くしまっている。



第７図　ＳＫ02土壙

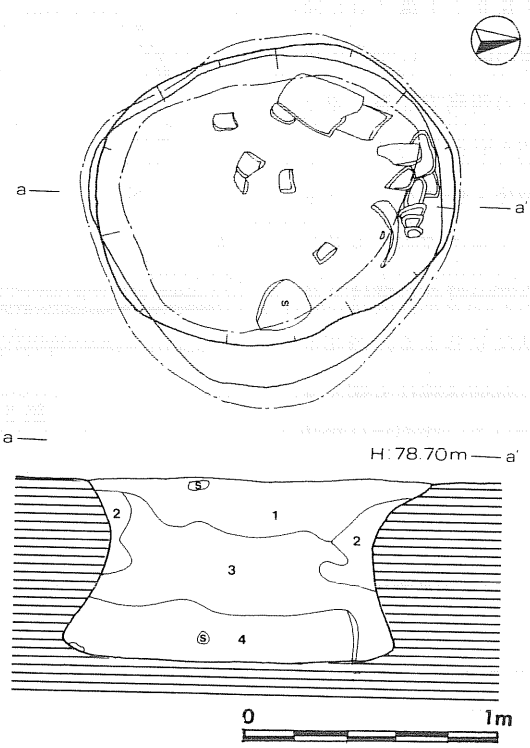
第１層　暗褐色土（10ＹＲ3/4）

第２層　黒褐色土（7.5ＹＲ2/2）炭化物多く焼土も混入　第３層　褐色土（7.5ＹＲ4/6）

ＳＫ０３土壙（第８図　図版４）

〔検出区〕　Ｊ－５グリッドⅢ層上面で確認された。

〔規模・形態〕　壙口部1.7ｍ、最狭部1.04ｍ、最張部1.3ｍ、壙底部1.2ｍ、深さ0.72ｍのいわゆるフラスコ状のピットである。壙口部は円形を呈するが、最狭部から壙底部にかけては東側にふくらみをもつ。大形の深鉢形土器の１個体分が壙底部から、北壁に接するようにして出土した。



第８図　ＳＫ03土壙

第１層　暗褐色土（7.5ＹＲ3/4）

第２層　明褐色土（7.5ＹＲ5/8）

第３層　極暗褐色（7.5ＹＲ2/3）

第４層　黒色土（7.5ＹＲ3/1）

出土遺物（第９図・図版６の５）

大型の粗製深鉢形土器である。高さ50cm口縁部径40cmで器厚１cmである。全体にＬＲ縄文が施される。口縁部は胴部上半からわずかに内わんし、断面形は先端が細まり尖っている。胎土焼成とも良好で粘土紐の巻き上げ痕が明瞭である。

ＳＫ０４土壙　（第10図　図版５）

〔検出区〕　Ｉ－８グリッド北西隅でＳＩ０１の南側に位置する。

〔規模・形態〕　壙口部径１ｍ、壙底部径0.９ｍの円形を呈する。壁はスリ鉢状にゆるく立ち上がり３層中に台付鉢形土器が含まれる。埋土には、カーボン・焼土が混入する。第１層　褐色土（7.５ＹＲ4/4）

第２層　暗褐色土（7.５ＹＲ3/3）

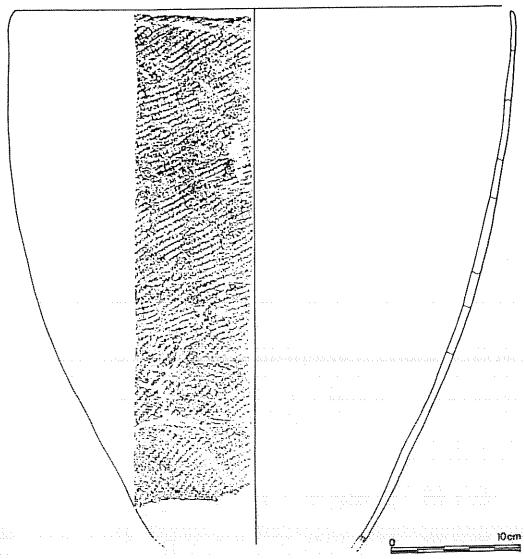
第３層　黄褐色土（10ＹＲ5/6）

第４層　明赤褐色焼土（2.５ＹＲ5/8）

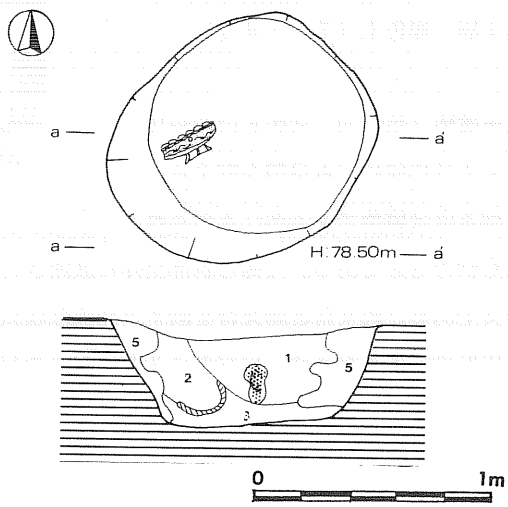
第５層　明褐色土（7.５ＹＲ5/6）

出土遺物（第11図　図版６の６）

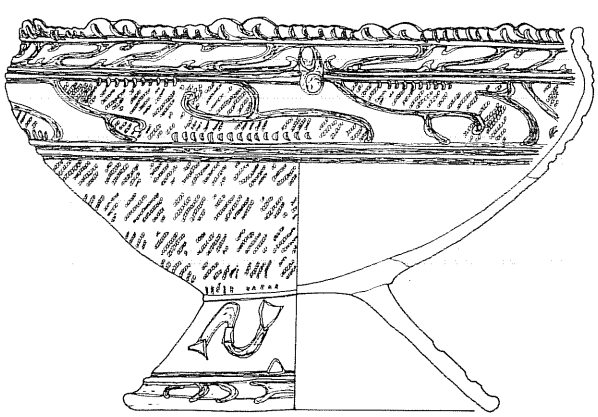
台付鉢形土器である。口唇部は２個１対の突起をもち、突起の間はゆるやかな波状を呈する。口縁部器内面に一条の沈線がめぐる。文様帯は口頸部と胴部上半に分けられる。口頸部は沈線によって文様が描かれるが、胴部上半の文様帯は沈線によって区画された中に縄文を残している。台部は「Ｓ」字状の沈線の起点と中間それに終点に三角形ないし四角形の穴が彫られる。台部下半には２条の沈線が引かれる。特に下の沈線内にはさらに逆「く」の字状の刻みが施される。器表面には煤状炭化物が付着しているが台部は褐色を呈している。ＳＫ０４出土の土器はこの１個体だけである。



第９図　ＳＫ03出土土器



第10図　ＳＫ04土壙



第11図　ＳＫ04出土土器

ＳＫ０５土壙（第12図　図版５）

〔検出区〕　Ｊ－８グリッドⅢ層上面で確認したものである。

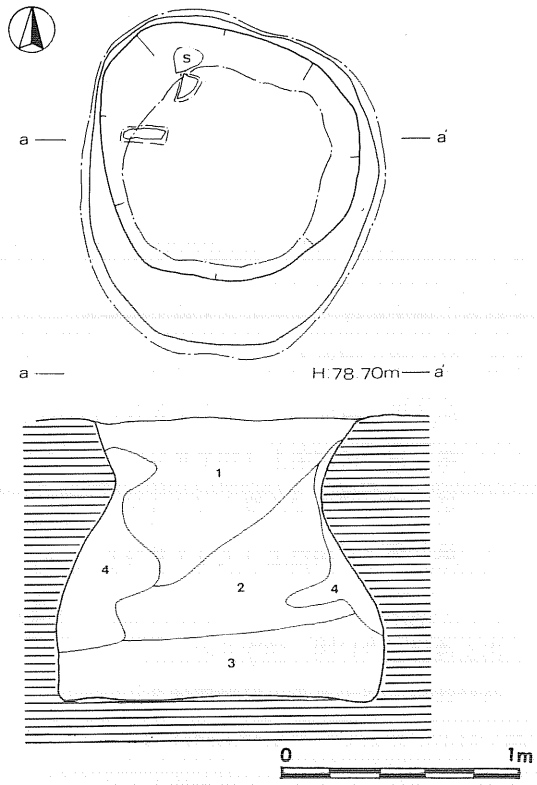
〔規模・形態〕　壙口部1.1ｍ、最狭部0.85ｍ、最張部1.4ｍ、壙底部1.3ｍ、深さ1.2ｍのフラスコ状ピットである。床面は比較的平坦である。埋土中には炭化物が混入し、底面から土器片が出土した。

第１層　黒褐色土（7.5ＹＲ2/2）

第２層　極暗褐色土（7.5ＹＲ2/3）

第３層　暗褐色土（7.5ＹＲ3/3）

第４層　褐色土（7.5ＹＲ4/4）



第12図　ＳＫ05土壙

出土遺物（第13図　図版６の７～10）

３・４は口縁に刻み目帯を有する。３の刻み目は縦型であるが、４のそれは爪形状のものである。文様は胴部全体に展開されるであろう。文様は、入組文風のものと太腿骨文である。縄文帯と無文帯を画する沈線は起点・終点が鋭くなるものもある。５は口頸部に半円形文をくりかえす。口縁部に２個１対の突起がつくり出される。６は口縁部が内わん気味に立ち上るものである。口縁部文様帯には羊歯状文に刻み目が使用される。羊歯状文の末端はかみ合わない。３～６はいずれも鉢形土器の破片であろう。１は壺型土器、２は粗精の深鉢形土器である。

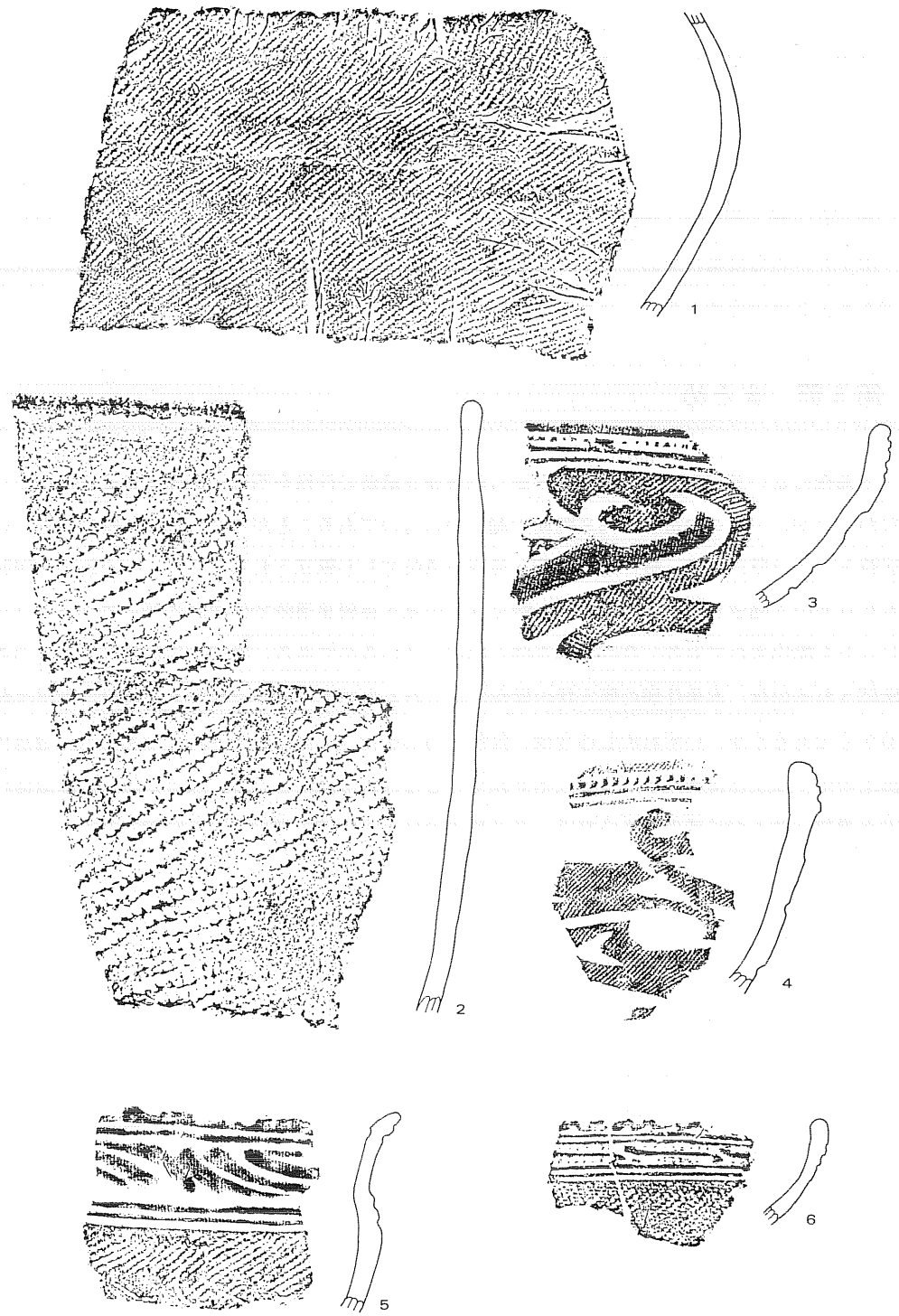
第２節　遺構外出土遺物

１　土　器（第14図　図版６）

出土した土器はわずかであるが文様と時期的関係から次の３類に分類した。

第１類（第14図１～６）　縄文中期後半に考えられる土器である。沈線で文様が描かれるものや隆帯の上下に沈線を施すものがある。

第２類（第14図７～14）　縄文晩期に考えられる土器である。７・８のように口頸部にのみ文様帯を有するものである。７は羊歯状文の変形文、８は半円形状文である。９・12は羊歯状



第13図　SK 05出土土器

文と刻み目が併用されたもので、口縁部は小波状をくりかえす。10・11・13～15は粗精土器破片である。11・14は平縁の口縁である。

第３類（第13図16～19）　弥生時代の土器片である。16・17は横に撚糸文が施され、18・19は、縦方向に施される。いずれも赤褐色を呈する。

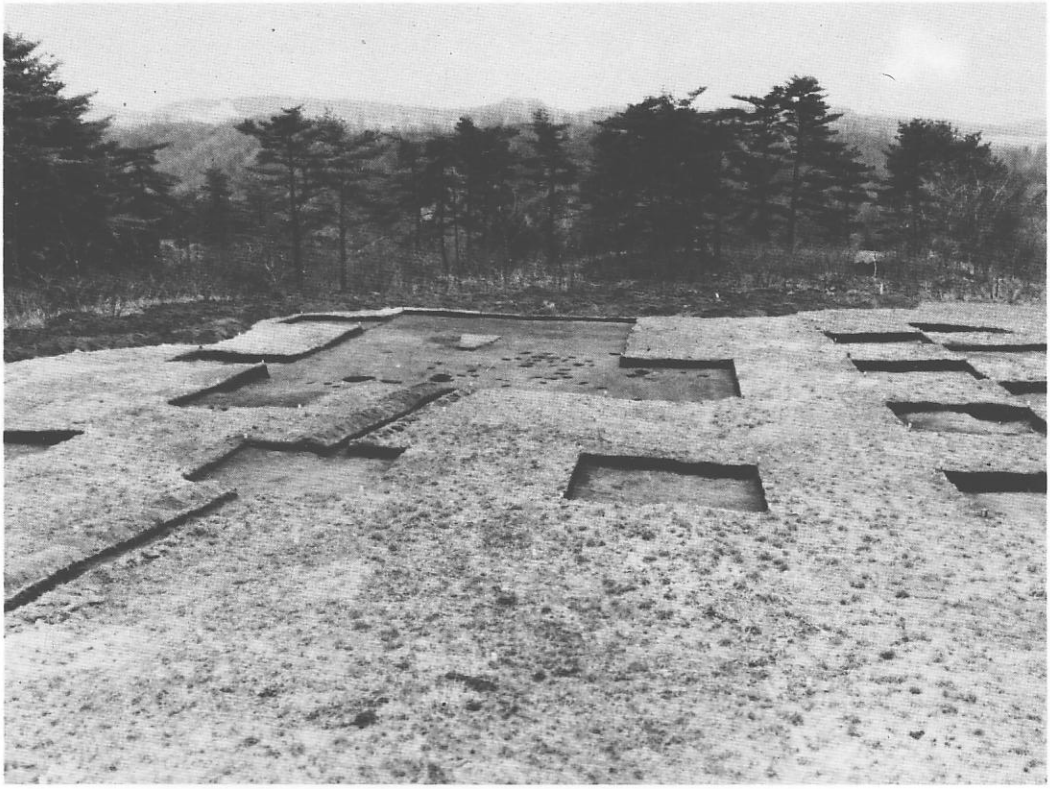
2　石　器（第14図　図版６）

出土した石器は第14図の１・２だけである。１はフレイクを利用した石錐で片面加工のものである。２は両面加工を施した石ベラ状の石器である。

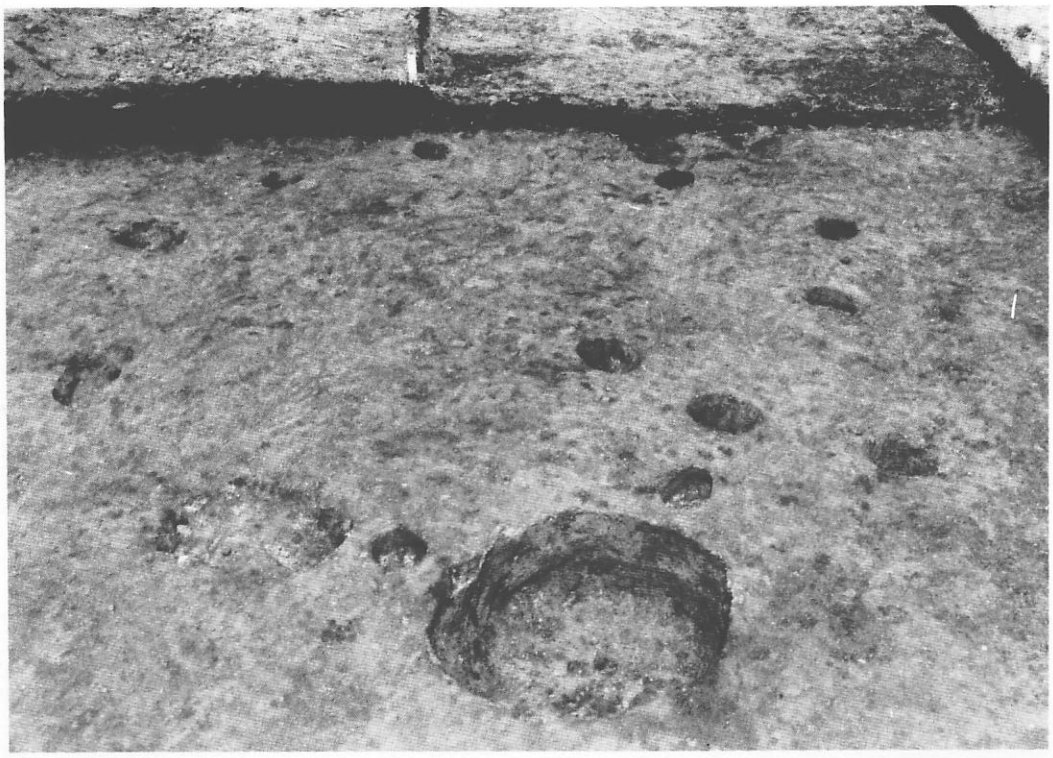
第３節　まとめ

本調査においては、調査の期間などから駒坂袋Ⅱ遺跡の性格を明確に把握するまでには至らなかったが、一応この遺跡が縄文晩期大洞C_1期のものであることが考えられる。特に晩期の住居跡としては県内では、藤株遺跡と蔦ケ長根Ⅲ遺跡でしか確認されておらず、いずれの住居跡もピットのみ確認したものであるが、特に後者の蔦ケ長根Ⅲ遺跡で住居跡に伴ってフラスコ状ピットも検出されており、今回の調査例と類似しているのである。晩期の住居跡がピットのみ確認されるのは、本来住居の竪穴状の壁がなかったものであろうかそれとも、後世に削平されるからであろうか、いずれにしろ今後、資料の増加を待って結論が下されるであろう。遺構外出土の第１類土器は縄文中期後半大木９式ないしは10式に比定される。又第２類土器は遺構内出土遺物同様大洞C_1式と考えられる。第３類土器は天王山式に併行するものであろう。

第14図　遺構外出土遺物

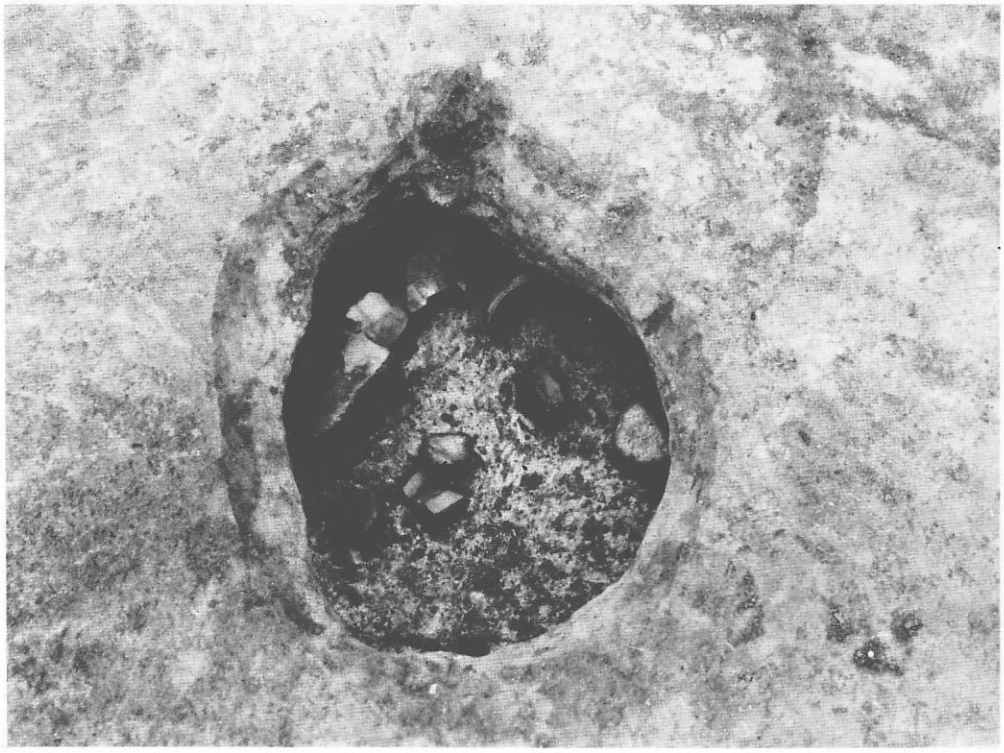


図版１　　上　遺跡全景　下　発掘風景

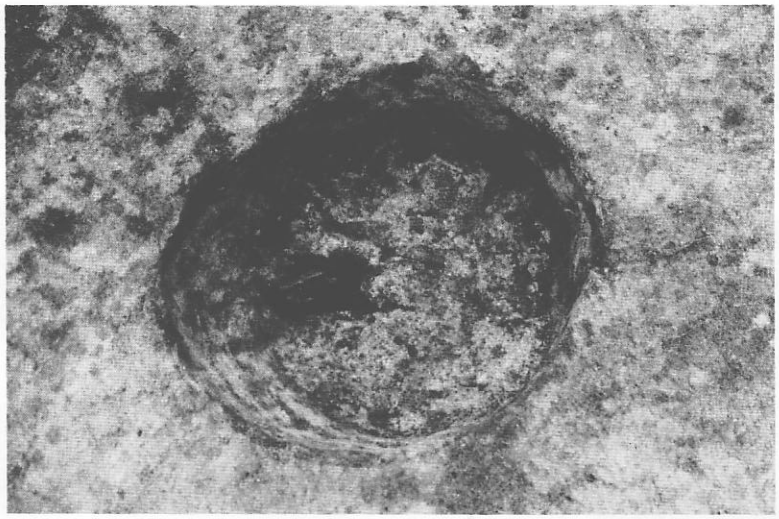


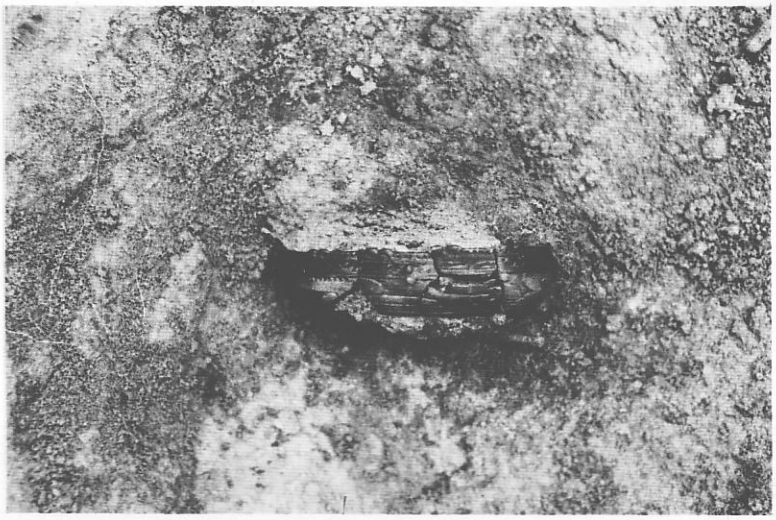
図版２　　上　SI 01竪穴住居跡　下　SI 02竪穴住居跡

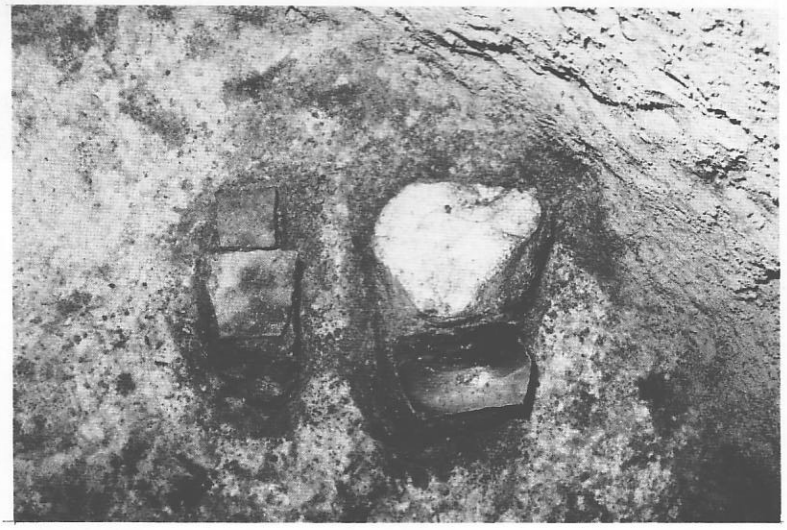
図版３　　上　ＳＫ０１土壙　下　同土層断面



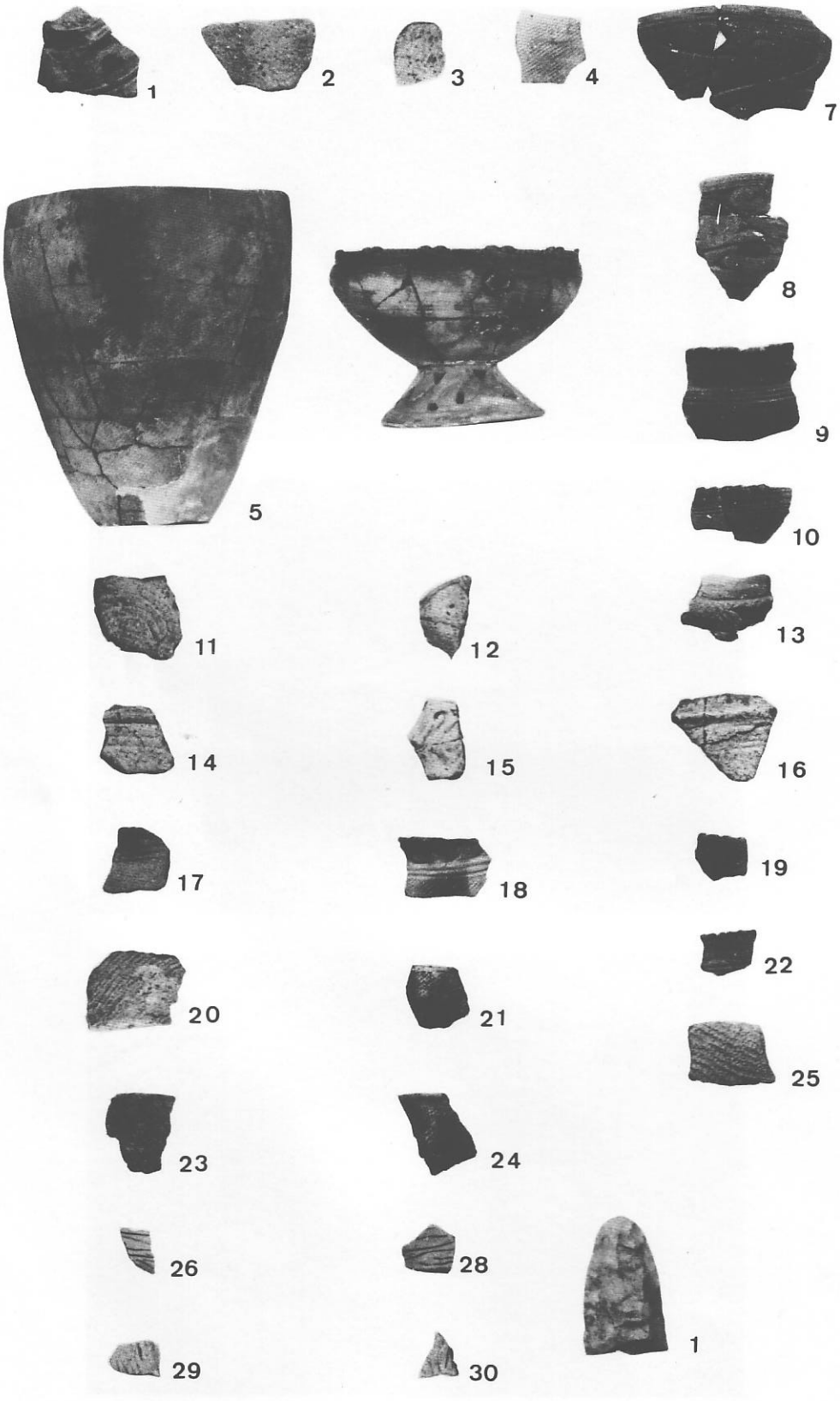
図版 4　　上　SK 03土壙　下　同土器出土状況







図版 5　　上　SK 04　中　同土器出土状況　下　SK 05土器出土状況



図版 6　　出土遺物